
代打～神様に代わりオレ～

鈴野宗一郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

代打く神様に代わりオレく

【Nコード】

N3766S

【作者名】

鈴野宗一郎

【あらすじ】

子供を助けたら見知らぬ真っ白な空間へ。何々？「サボりたいから代わりに世界の均衡をよろしく」だ？ちょ、何だよそれ！

そして、降りたのは異世界。ここから第二の人生が始まる。

作者の処女作で初投稿です。どうか温かく見守っていただければ幸いです。

チートな力くれるって言われたら、まずアニメの事思うよね。(前書き)

どうも、初めまして鈴野宗一郎という者です。

初めての小説で、あまり文才という物もありますが、そこら辺は目をつぶって頂けると有難いです。

では、代打く神様に代わりオレく、スタートです。

チートな力くれるって言われたら、まずアニメの事思うよね。

俺はどうしたんだろうか？

・・・いや、正しくはオレの目はどうかしちまったんだろうか？

今オレの目の前には、真っ白い空間と、

「いらっしやいます。ようこそ神の間へ。」

・・・ヘンな爺ちゃんがいる。

第零話 チートな力くれるって言われたら、まずアニメの事思うよね。

待て待て、思い出せオレ。俺は何をしていたっけ？

回想スタート

「よっしゃ、オズマ倒した！！頑張って精霊モンスターに宝石あげたかいがあったな。」

俺は現在ここで、某最後の幻想って訳すのに、

一向に終わりが見えないRPGの9番目をプレイしていた。

『大学も休みに入ったし、思いっきり遊ぶぞー！！』という気持ちで。

・・・え？なんで9番目かって？一番好きなんだよ！ジョンが！ガーンोटが！！

「ふうー、終わったら腹減ったな。コンビニにでも行くか。」

近くのファミリーオートへ。

適当なパスタとファーチキを購入。

「そんじゃ、さっさと家に帰って弁当食うとしますか。」

帰り道。

横断歩道を渡り終わったとき、

信号の点滅が始まった。

その時、小学2年生ぐらいの男の子が走って横断歩道を渡る。

すぐ横にトラックがあるにも拘らず――

回想終了

そっか、助けに飛び込んで死んじゃったのか。

「そうですね。ちなみにその子は無事なので～すよ。」

「心を読んだ！？ってか、アンタ誰！」

「わたしは、神様なので～す。」

神様・・・？ああ、天国か地獄かを判断するのか。

「それで？神様、俺は天国か？地獄か？」

「？・・・何を言っているの～すか？あなたは転生するので～す。」

「転生？」

「そうです。本来なら死んですぐに転生するのは許さくれないのですが、

あなたの行動が、ワタシの上司に知られ、すばらしい行為だ。という事で、

元の世界はさすがにダメなのですが、別の世界で転生させると認められたのですが。」

「な、なるほど・・・」

自分でそんなすごい事したつもりはないんだけどな・・・

「ん？誰かがすごい剣幕でこっちに来てるぞ？・・・スリッパを持って。」

「え？・・・おお、ビb（スパン！）グハ！」

突然、自称神様は同い年くらいの男性にスリッパで叩かれた。

「何嘘教えているんですか！ホントは自分がサボりたいから、

この人に世界の均衡を保ってもらおうとしてるんでしょうが！」

「痛いじゃないですか。ビビ君。・・・それで、上の人はどうでしたか？」

「認めてもらえましたよ。なんで認められたのか不思議でしょうがないですけど。」

「それは、ワタシの人ば」……いつもサボろうとしているのにですか？」……」

……なんか、俺、空気だな……

「あ！すみません。自己紹介が遅れました。自分、この神（笑）の助手をしております、

ビビ・ライアールと申します。」

「……ビビ君。神に（笑）は勘弁してもらえませ（スパン！）グフ！」

あ、気絶した。……スリッパで気絶するって怖っ！

「はあ……それで、俺はどうすればいいんですか？」

「はい。あなたには、これから別の世界に転生してもらい、その世界での均衡を

保ってもらおうと思います。」

世界の均衡って……

「あの、具体的に何をすれば……？」

「世界を支配したり、悪行を働く人達を、倒してもらえばいいです。」

・・・・・・へ？

「いやいや！無理ですよ！俺ケンカとか、自信無いですし！」

「大丈夫です。まずは軽い物から始めますし、なにより、あなたに能力を授けますから。」

「能力ですか？」

「はい。それは「ワタシ」が説明しましょう！」

あ、起きた。

「あなたには、プレゼンキャパシティ能力付加能力を与えます。」

「なんすか？それ。」

「物に能力を与える能力です。具体的に説明しますと・・・

説明中

・・・・・・という訳です。」

「なるほど・・・」

簡単に説明すると

・能力付加能力とは物体に能力を与える能力。

たとえば、ナイフに火属性を追加したり、とても丈夫にしたりできる。

・能力をつけられるのは、1つの物体につき、3つまで。

・最初は、自分の記憶にある能力（アニメ等も可）と3つの能力しか使えない。

・最初の能力は、任意性質変化、概念覚醒、空間転移の3つ。

任意性質変化は、はその名の通りその物が元々持っている性質を強化させるもの。

例えばここに剣があるとすると、剣がもっている性質（切れ味・硬度・重量等）を

自在に変化させることができるようになる。

概念覚醒は、持っている武器の概念（剣なら切る。ハンマーなら叩くといった）

を総て引き出す。その為、ある程度強度があるものでないと耐えられない。

また、使用後はその武器は碎けて使用不可になる。

しかし、持っている武器は、物にもよるが、通常の2倍以上の強さを得る。

空間転移は、文字通りテレポーションができるようになる。

発動させた時に触れていた

物体を転移できるが、設定した場所にしか転移できない。

しかも場所で設定する場合、その場所にいないと設定できないた

め、

見知らぬ土地に転移は不可能。条件で設定することもできる。
例えば自分の手の中とかにも設定可能。

・新しく能力を追加する際は、その能力に名前を付けて登録しなければならぬ。

・能力を取り消す際は、〇〇〇〇（能力名）取り消しとイメージすることで取り消せる。

・自らの身体に能力を付加する場合、物体と違い定着しないため、体力をかなり消費する。その為、10分程度しか持たない。

「ふーん。じゃあ、『幻想殺し』や『一方通行』とかも出来るわけか・・・」

滅茶苦茶チートだな。

「無理です。」

「なんで？見たことがあるなら大丈夫なんだろう？」

「その2つは、殿堂入りとでもいいまゝすか、強すぎて使用不可になっていまゝす。」

他にもいくつかありますよ。」

そこら辺はそうなるか。さすがに強すぎるし。

「それでゝは、後はこの助手に任せまゝす。」

「へ？　どういことですか？」

「自分が、転生先の世界でサポートします。能力については今話しました。」

それ以外の、どういう世界なのかや、戦い方などは転生してから説明しようと思います。」

「とういうわけで、さっそく、いってらっしゃい。」

へ！？

「ちょ、いきなり！？　つて、落ちるうううううううう！！！！」

落とし穴から落とされた。いや、墮とされた？

「それでは、神様。」

「はい。いってらっしゃい。」

「いってきます！」

神様 side

「果たして、あの若く者がバロムスの悪行を止められるでしょうかね？」

ま、楽しみにさせてもらいまうしょうか。

それにしても…………

…………あの人の、助手とワタシとの言葉遣い…………シヨツ
クでゝすね…………

チートな力くれるって言われたら、まずアニメの事思うよね。(後書き)

いかがでしたでしょうか？

これからも、随時更新していく予定です。よろしくお願いします。

登場人物設定（前書き）

多少ネタバレがあります。

登場人物設定

主人公と助手について書こうと思います。

主人公

名前 御神 剣一 おがみ けんいち

容姿 転生前は、本人の自覚は無いが、かなりの美形だった。
そんな人間の5歳児なので、転生後も美形。

年齢 転生前 19歳（大学1年生）

趣味 ゲーム、アニメ、漫画、ラノベ、あと、本人は下手の横好き
だと言っているが、

歌が得意。

特徴 顔は言うなれば、ワンピースのエースみたいな。

体はスタイリッシュで、性格は、明るめで、ちゃらけている
風だが、

一度真剣になると、とことん突き進めていく。

常に笑顔を絶やさない。

女性関係に疎い。

弱点 蛾が大の苦手。過去に蛾が顔に張り付くというトラウマが。

女性に対しての接し方が苦手。

特技 アニメ等の知識が豊富。上にも書いたが、実は歌が上手い。

本人の自覚無しの天然口説き

その他 ・能力名 プレゼンキャパシティ 能力付加能力を神から貰う。

・本人はロングヘアーの女性が好み。

・高校時代は、帰宅部（この頃からオタクに入り始める）。

・中学時代は、陸上部。

・親は、二人とも医者。しかし、そのせいで変に期待されるのが本人は嫌。

助手

名前 ビビ・ライアール

容姿 天界では、普通の青年といった感じ。

下界では青い宝石が嵌っているペンダントの中でしか居られない。

年齢 18歳（下界での年齢）

特徴 基本、敬語を使う。

自分より年下だったり、自分が信頼できる人になら砕けた口調になる。

弱点 特に無し

特技 僅かながら魔法が使えるが、かなり疲労する為（使うと半日寝込む）、あまり使わない。

その他

- ・主人公を信頼している。
- ・主人公の能力の管理をしている。（新しい能力の追加等）
- ・神様には呆れている。

ブレゼンキャパシティ
能力付加能力については、第零話をご覧ください。

登場人物設定（後書き）

設定としてはこんな感じです。

この先キャラが増えた場合、それについても書こうと思います。

初めての能力でも意外と何とかなるもんだ。(前書き)

2話目、投稿しました。

初めての能力でも意外と何とかなるもんだ。

「落ちるうううううううう!!!!!!」

今、俺は落ちています。まっさかさくまゝに。

ってふざけてる場合じゃねええええ!!!!!!

『あの・・・』

「え!?!? どちらさま!?!?」

『あ、助手です。神の。』

「どこですか!?!? どこにいるんですか!?!?」

『胸のペンダントに・・・』

ペンダント!?!? いつの間に・・・

「ってか、この状況どうにかしてください!!!」

『あなたの能力を使って、自分の服に飛行能力を付けたらいかがですか?』

あ、なるほど! それなら・・・って、あれ?

「どうすればいいんですかああ!!?」

『服で空を飛ぶような人を今までに見たことはありませんか?』

服で空を飛ぶ? そんなの分からない!

「こんなときに思いつきませんよ!!」

『……仕方ありませんね。今回だけですよ。』

「へ!」

『これ疲れるんだけどなあ……瞬間移動!』

レポート

助手さん――(?)がそう言うのと、一瞬、目の前が真っ白になり、

一気に地面が近くなった。

「ふげ!!……死ぬかと思った。今のはなんですか?」

『瞬間移動です。幸いにもフリーフォール状態だったので、慣性が働いていなかった』

おかげで、無事瞬間移動できましたね。』

「なら、なんですぐにやらなかったんですか!」

『理由は3つあります。1つは、フリーフォール状態でないと、瞬間移動しても、』

その慣性でどっちにしろ体が潰れてしまいますからね。』

「なるほど・・・」

『2つに、これを使用すると、私自身が疲労してしまうんです。それもかなり、ね。』

「そうだったんですか・・・。」

『普段なら、さほど疲れないのですが、下界に降りるとその疲労が増大するんです。』

「へえ・・・それで、3つ目はなんですか？」

『3つ目、これは自分の勝手な目的ですが、あなたに

能力を実際に使ってもらおうと思ったのです。早く慣れてもらうために。』

そうだったのか・・・でも、オレは使うことが出来なかった。

「すみません。使うことが出来なくて。」

『いえ、初めてだったんですし、これから慣れていけばいいんですよ。』

「はあ・・・」

『とりあえず、この話は終わりです。さて、ちょっと・・・ねかせて・・・もらいます・・・』

「え？」

『さっきも・・・言ったとおり・・・・・・・・疲れてしまったので・・・・・・・・ZZZ』

ね、寝てしまった。

どうするかな。とりあえず、家探すか。

「最悪、洞窟でもいいから、なんか探そう。」

そして歩くこと5分

オレは廃屋を見つけた。結構近くにあったな・・・

ペンダントをそこに置き、オレは外に出る。

その際、自分の視点が低くなっていることに気づく。

「小さくなったのか？いや、幼くなったというのが正しいか。」

後で助手さんにでも聞いてみるか。

「能力の練習を試みるか・・・」

近くにあった木の棒を拾う。初期装備が木の棒って・・・ドラクエかよ。

「話を聞いた限りだと・・・頭の中にイメージすればいいのか？」

じゃあ、まずは・・・任意性質変化ってのをやってみるか。

頭の中でイメージする。

「(硬くなれ・・・硬くなれ・・・)」

すると、木の棒が軽く光った。

「？これでいいのか？」

軽く振ってみる。重さは変わった感じがしない。

「この木でも叩いてみるか。」

近くの木に思いっきり叩いてみる。この細さなら、間違いなく木の棒が折れる。

「せえーの！」

ガン！

「・・・へ？」

木の棒は、折れるどころか、逆に木を凹ませている。

「えええええええ！？スゲーええええ！」

木の棒が一気に金棒になった気分だ！

・・・これ、力によっちゃ滅茶苦茶チートじゃね？

「じゃあ次は空間転移だな。」

オレは空間転移に挑戦してみる。

「これもイメージか？」

近くの石に触れる。

「（自分の手の中に・・・自分の手の中に・・・）」

そう思った後、その石を投げる。そして、

「（戻って来い・・・戻って来い・・・）」

すると、投げた筈の石が消え、その瞬間手元に感触が蘇る。

・・・さっきの石だ。

「スゲェ・・・本当に出来た。」

最初に場所を設定して、その物が離れた後、

念じることで、設定した場所に戻るんだな・・・

これもスゲェ。さて、最後に・・・

「概念覚醒・・・これはどうすりゃいいんだ？」

この流れからしてイメージさせるんだろうけど・・・

「どうイメージすりゃいいんだ？これ。」

とりあえず、イメージしよう。オレはさっき使ったのとは別の木の棒を持ち、

「（概念覚醒・・・概念覚醒・・・）」

能力の名前をイメージしてみた。

「・・・・・・・・これでいいのか？」

オレは、さっき叩いた木を叩こうとしたが、手に力を入れたとたん、

パリン！

まるでガラスが割れたような音と共に、持っていた木の棒は砕け散る。

あ、そういえば、ある程度強度が無いと耐えられないって言ってたっけ。

「これは強い武器が手に入ってからだな・・・」

とりあえず、一通り試した。その後も少し練習した。

アニメの能力も再現しようと思ったが、辺りはもう夕方。

晩飯を作らねばならない。

魚でも取ってくるか。と思ったが、重大なことに気づく。

「・・・・・・・・近くに川とかあったっけ？」

どうしたもんかと、再び頭を悩ませる。すると・・・・・・・・

「グオオオオオ！」

何かが現れた。

「あれって・・・・フアング？」

それは、オレが死ぬ間際にやっていたRPGに出てくるモンスターにそっくりだった。

「ガウウウウウ！」

明らかに攻撃姿勢に入っている。

このままだと間違いなく殺される。

「・・・・・・・・仕方ない、戦うか。」

オレは軽く殺気（その殺気にフアングは少しビビっている）を放ち、木の棒を手取る。

「ゲームの能力を使えるなら・・・・・・・・」

オレは任意性質変化をするためにイメージする……木の棒を硬くし、さらに、

「（自分の足の筋力を上げ、体重を軽く……）」

そのイメージのまま、オレは空に向かって飛ぶ。

フアングはオレを見て驚いている。

「結構飛んだな……そんなじゃ、行きますか。」

オレは体重を軽くするイメージをやめ、逆に重くする。

「ジャンプしてからの……攻撃だああ!!」

この時、オレは何かしらの技名を言えばカッコよかったなあと後悔した。

「ガウ!？」

フアングはある程度落ち始めてから、逃げるといふ行動に出たが、遅かった。

オレの木の棒はフアングを貫いていた。

そして、着地する。

当然、筋力を上げて、体重も貫いた後軽くしたので、オレにダメージは無い。

「……………すまなかったな。オレも死ぬわけにはいかないんだ。」

フアングに向けて追悼の言葉を送る。

いくら相手がモンスターとはいえ、無抵抗の相手を殺してしまうのはあまりにも辛かった。

しかし、殺さなければ自分が殺されていただろう。

自分のやった行為は仕方ないといえば仕方ないのだが、そう自分を納得させることは出来なかった。

「RPGの主人公達も同じ事を思ったのかもな……………」

オレはフアングの死体を埋めてやることにした。

本当は食べようかとも思ったが、それは次回からにした。

少なくとも、そんな気分にはならなかったし、何より申し訳ない。

自分の勝手で殺し、自分の勝手で食べるという行為に対しての

勇気が持てなかった。

「……………という訳です。」

『なるほど、そういう事があったわけですか。』

オレが廃屋に戻ると、助手さんは目覚めていた。

「でも、助かりました。食料を見つけてくださって。」

『いえ、自分はただ、食べられる物を教えただけです。』

「それでも、ありがとうございます。」

助手さんに、食べられる果物や植物などを教えてもらった。

植物はそのままじゃ食べられなかったが、果物は美味しく食べられた。

「で、一つ聞きたいのですが。」

『なんででしょうか?』

「オレは今何歳なんですか?」

『自分が幼くなっていることに気が付いたようですね。』

・・・あなたは今、5歳の体になっています。』

「5歳・・・ですか・・・」

『驚かれないようですね。』

「いや・・・まあ、0歳からやり直すのを覚悟してたんで。」

転生って言うから、生まれたての姿からのスタートだと思っていた。

『まあ・・・それには理由があるんですけど、今は言いません。』

「へ？そうなんですか？」

『ええ。でも、いつか話しますよ。』

理由・・・なんだろうか？

「わかりました。・・・とりあえず、今日は寝ましようか。」

『そうですね。自分も寝かせてもらいます。』

あれだけ寝たのに、また寝るのか。と思ったが、言わないことにした。

オレはなぜか廃屋にあった、布団を使って寝た。

『あ、そうでした。明日から、能力の訓練を始めますから。』

・・・マジですか？

初めての能力でも意外と何とかなるもんだ。(後書き)

初めての能力使用です。

後に、増えていくと思います。

お楽しみに？

自覚無しイケメンは自覚無しでフラグを立てる。(前書き)

今回、一人目のヒロイン登場です。

自覚無しイケメンは自覚無しでフラグを立てる。

オレがこの世界に来て2ヶ月が経った。

徐々に能力の使い方も分かり、技も増えた。

体も鍛え、モンスターを食することにも抵抗が無くなった。

・・・気持ち悪がるなよ。肉とか魚とか食ってるのと同じなんだから。

そんなこんなで、この2ヶ月の間に変わったことが2つある。

一つは――

「ふう、とりあえず休憩すつか。ビビ、いいだろ？」

『ああ。昼飯食って、それからもう少しやることにしよう。』

あの神の助手、ビビとの会話が敬語じゃなく、タメ口になった。

聞いてみると、この助手、ビビは死んだ当時のオレと同じ年だったらしい。

だったら、敬語はおかしいだろ。というわけでこの通り。

そして二つ目。

『しかし、よくもまあこんなに体力が付いたなあ。朝飯食ってから

練習ぶっ通しだろ？それなのに息も上がって無いじゃん、剣一。』

「そうか？自分では気づかなかったな。」

オレの名前が御神剣一おがみけんいちになった。

なんでも、前世の名前は使っちゃいけないらしい。

だから、ビビが勝手に名前をつけた。

なんか納得いかなかったけど、まあ、普通だしいいか。って事で

この名前になった。

「よし、これで晩飯も大丈夫だな。」

『しかし、近くに川があるのはいいな。魚も取れば水も浴びれる。』

そして洗濯も出来る。これほど便利なのはないな。』

「川が綺麗ならの場合だけだな。」

2ヶ月前は見つからなかったが、廃屋から少し歩いた先に川を見つけることが出来た。

しかも、近くに村があるのか、村の住人らしき人も

洗濯に来ているらしい。

・・・距離？だいたい廃屋から・・・20キロぐらい？

体力付いたからね。このくらいは楽勝！

そして、そこで魚を取り、森を通り、廃屋に戻る途中であった。

「・・・あれ？なんか聞こえねえか？」

『ん？なんだ？』

「・・・ふええん・・・お母さーん・・・！」

「誰か・・・泣いている？」

泣き声のする方向へ向かう。

すると、そこで膝を抱えながら蹲っている女の子を見つけた。

「（・・・やっぱ助けるべきだよな）ビビ、ちよつと黙っててくれ。」

『分かってる。バレちゃマズいからな。』

「そういうこと。」

『一つ言っておくけど、頭の中で喋れば俺に通じるからね?』

「（あ、そうなの?）」

『そう。・・・ってもうやってんじゃん!』

こんな漫才は置いといて。さて、行くか。

「キミ、大丈夫?」

「・・・え?」

??? side

どうしよう・・・お母さんと離れちゃった。

果物を取りに来たのに・・・

お母さんに見せようと思ったのに・・・

家族みんなで食べようと思ったのに・・・

「どうしよう・・・かえれないかも・・・」

ふとそんな考えが過る。

「ふええん・・・ヒクツ・・・ふええええん!! おかあーさー
ーん!」

ボロボロ涙が出てくる。

もうダメだ・・・そう思った時。

「キミ、大丈夫?」

「・・・え?」

??? side out

女の子が泣いている。

すごい悩んだよね。こういう時って。

基本女の子とあまり話したこと無いんだよね。

「とりあえず、立てる？」

「う、うん。」

その子は立ち上がる。

わりとしつかりとした顔つきで、赤い髪の毛が

その子の表情を引き立たせる。

「キミだあれ？」

キミって・・・あ、そうか。今のオレって5歳だ。

「僕は御神剣一、5歳だよ。キミは？」

「・・・ルナ。ルナ・ガイアウオーカー・・・・・・・・6さい。」

オレより年上（？）なんだな・・・

「ルナちゃんか。可愛い名前だね。」

「・・・・・・・・／／／」

あれ？なんか赤くなってる。

「どうしたの？具合でも悪いの？」

「う、ううん！だ、だいじょうぶ！」

「そう？ならいいんだけど・・・で、どうしたの？」

そういうと女の子・・・ルナは俯く。

「・・・おかあさんとはなれちゃったの。」

「そうか・・・じゃあ、一緒に探してあげるよ！」

「え？・・・ホント!？」

「うん。だからいっしょに行こう？」

「うん！」

そういう訳で、母親探しスタート！

・
・
・
・
するはずだったんだけどなく。

「キュララララ！」

・ ・ ・ ・ ・
モンスター出現
・ ・ ・ ・ ・

今現れなくてもいいだろうに・・・

「ひっ！はやくにげよう！？」

オレ一人ならともかく、ルナと一緒にとなると……倒すしかない

な。

「…………大丈夫だよ。そこに隠れてて。」

「え？ケンイチは！？」

「僕はアイツを倒すから。」

「そんな！あぶないよ！？はやくにげだ——」

その言葉の前にモンスターが襲い掛かってきた。

「！ちっ！」

僕は強引にルナを木の陰に押す。

「きゃあ！」

モンスターはその腕をオレに突き刺そうとする。

しかし、オレだって伊達に2ヶ月鍛えていた訳じゃない！

モンスターの腕を回転することで避け、顔に一撃入れる。

「キュアアア！！？？」

「（ビビ！アイツなんだ！？）」

オレはビビに聞く。ビビにはこの世界の知識があるらしい。

『アイツはキューラ！植物系だから、火が弱点だ！』

「（そうか……なら！）」

オレは自分の手が火になるように思い浮かべる。

「これでもくらいな！……ブレイズアップバー火炎昇拳！」

自分の手を炎に変え、キューラを殴る。

「ギュラララ……」

キューラは怯んだのか帰っていった。

しかし、その時突然キューラがこっちを向き、

「『オガミケンイチ……オボエテオケ、オマエハ、イレギュラ
ー、ダ』」

「何！？」

しかし、それだけ言うとキューラは去っていった。

とりあえず、安心していいか……

「さて……ルナ、大丈夫？」

「……」

あ、怖がらせたかな？・・・・・・・・嫌われたかも・・・・・・・・

「あ、あのS「すごい！ケンイチくんすごいよ！」・・・・・・・・へ？」

「とってもかっこよかったよ！わたしびっくりした！」

「あ、ありがとう・・・・」

もしかして、意外とこの子・・・・明るい子？

「あ！ありがとう！たすけてくれて！」

「！！！！」

その子の笑顔についグラツときてしまった・・・・ロリコンじゃないぞ！？

その後、川の近くでルナの母親と再会し、お別れをした。

「またねー！ケンイチくん！！」

手を振るその子に対して、オレもてを大きく振り返した。

「さて、遅くなったが昼飯作って食うか！」

『・・・・剣一。あの声はいい・・・・・・・・頭の中に直接話したようだ。』

「さあな？でも、一つ分かった。」

『なんだ？』

「オレはここら辺から離れるべきだ。」

『なぜだ？』

「たぶん、アイツはここにいる奴じゃない。オレを狙ってきたんだ。

ルナはたまたまここに居合わせたただけだろう。」

『つまり、自分のせいで誰かを傷つけないってことか？』

「ああ。明日か明後日にでもここを出るぞ。」

『しかし、どこに行く？あては有るのか？』

「それは……風に聞いてくれ。」

『……くだらない決め台詞言ってんじゃないやねえよ。』

とりあえず、近い内にここから立ち去ろう。他人に迷惑をかける前に。

ルナ side

「ルナ？どうしたの？」

「おかあさん！わたし、つよくなりたい！」

「え？」

「つよくなって、あのこといっしょにいたい！」

「あの子って……助けてくれたケンイチって子？」

「うん！いつかいっしょにぼうけんしたい！」

「そう……でも大変よ？辛いことがいっぱいあるかもしれないわよ？」

「それでも！わたし、あきらめない！」

いつか……あのこ！

ルナside out

自覚無しイケメンは自覚無しでフラグを立てる。(後書き)

ヒロイン登場です。

あと、2人はヒロインが出ます。

メインヒロインは・・・秘密です。

ボス戦は前置きが長い。(前書き)

4話目です。

ボス戦は前置きが長い。

現在お引越し中です。

と言っても、そんなに荷物は無いんだけどさ。

廃屋さえ見つければ、そこには住める。

無くても、あるもので何とかなる。

そんな事を繰り返して、早3日。

オレは、ある意味ピンチに陥っている。

「(・・・なんで、こうなる?)」

「オイコラ！無視してねえでこっち来い！」

「さっさと捕まってくれば、痛い目に遭わないからさ？」

「キミのお父さんにお金を要求するだけだからね。」

「(ビビ、どうしようか?)」

『(どうするも何も見過ごすわけには行かないだろ?)」

オレの目の前には、三人の盗賊と、

「やめてください!!」

白いドレスを着た、金髪の女性がいた。

多分同い年か？（精神的な意味で）

「（誘拐か？）」

『（たぶんそうだろう。あの子、お嬢様っぽいしな。』

「（助けるべき？）」

『（そうだろう？ルナちゃんの時もそうだっただろうが）』

「（だよね〜。そんじゃ『（待て！！・・・見ろ。）』・・・
なんだよ？）」

オレは草の中から様子を見る。

「いい加減にしてください！じゃないと、酷い目に遭いますよ！」

女性は怒った雰囲気と言った。

「ガハハハハ！おもしれえ！コイツは傑作だ！」

「酷い目に遭いますよ！、だってさ！アハハハハ！！」

「可愛いね〜。お姉さん、意外とオレのストライクゾーンだよ。」

それぞれが、多種多様な反応を返す。・・・最後の奴は軽く告
ったのか？

「……仕方ありませんね。警告はしましたよ。」

女性は決意したように盗賊たちに向き合う。

「(なんだ? あの子何をするんだ?)」

「邪悪な者を焼き払え! フレイド!」

そういうとその人の手から炎が出る。そして盗賊たちに当たる。

「ぐああああ! 体が焼けるー!」

「熱い! ぐああああ!」

「ぐふっ、悪くない……かも……!」

盗賊たちは悶え、苦しんでいる(?)。……最後の奴はダメだな。

そして、盗賊たちは倒れる。

「だから酷い目に遭うと申し上げましたのに……手加減はしましたからね。」

「(………ビビ様? あれはまさか?)」

『(ああ。魔法だな。あんな女性なのにあの威力とは……)』
「すげえ。魔法ってあんな強いんだな……オレにも使えるのか?」

『（使えなくもないが、それほど強くはないだろう。）』

「（人の心を読むなよ！ ったく・・・さて、大丈夫みたいだしな。

オレたちも離れるか。）」

『（ああ、そうだな・・・ん？ 待て剣一。まだ何かあるようだぞ。
』

ん？ なんだ？

「姉ちゃん。こいつら姉ちゃんがやったのか？」

何やら、体の大きな男が現れた。盗賊のボスだろうか？

「そうですが、何か？ この方達が私に向かって暴行を働こうとしたので、

抵抗したまでですが。」

「姉ちゃん。部下がやられて黙ってる親分がいると思うか？」

「・・・何でしたら、貴方も同じ目に遭わせて差し上げましょうか？」

「ほう。面白い。やってみるといい。」

「では、お言葉に甘えて・・・フレイド！」

再び女性は手から炎を出す。

その炎は確かに盗賊のボスに当たった。が――

「・・・・この程度かい？姉ちゃん。」

「！？そんな！？」

「まあ、よくやったよ。こいつら3人に対してなら、

この程度で十分すぎるくらいだろうな。・・・・でも、オレには効かねえんだよ！！」

そう言うと、ボスは女の子に近づき、女性の腹に一撃加える。

「か、はっ！！」

「悪いな姉ちゃん。オレには特殊能力があつてな。

痛みを通さぬ者^{メガプロテクション}って言つてな？ある程度の魔法、打撃は跳ね返しちまうんだよ。」

そんな能力があるのか・・・・って言ってる場合じゃない！

助けてあげないと！

盗賊のボスは腹を蹴りながら言う。

「本来なら、無傷で誘拐して身代金を頂戴するんだけどよ。

仲間がやられたとなれば話は別だ。少し、お仕置きしなくちゃな。

」

そう言っ、その女性の顔を踏もうとする瞬間に

「何してんだお前!!」

——オレの体は動き出していた。

??? side

そんな・・・魔法が効かないなんて。

いくらほんの少し手加減をしたからといって、

かなりの魔力で攻撃した。でも、通じなかった。

「悪いな嬢ちゃん。オレには特殊能力があつてな。

痛みを通さぬ者^{メガプロテクション}つて言つてな? ある程度の魔法、打撃は跳ね返し
ちまうんだよ。」

そんな能力があるなんて・・・逃げなくちゃならない。

でも、体が動かない。初めて恐怖と言う物を感じた。

「本来なら、無傷で誘拐して身代金を頂戴するんだけどよ。

仲間がやられたとなれば話は別だ。少し、お仕置きしなくちゃな。」

怖い・・・誰か・・・助けて・・・！！

涙が目から溢れてくる。

盗賊の親分の足が顔に向けて上がった瞬間、

「何してんだお前!!」

救いの声が聞こえた。そして私は気を失った。

??? side out

「ああ？何だお前さん？」

「その人に何してんだって聞いてんだよ！」

「何って、この姉ちゃんはオレの部下を痛めつけたんだぜ？」

だから、お仕置きしてたんだよ。見てたんじゃねえのか？」

だからって・・・

「悪いことは言わねえ。さっさとお家に帰りな。さもなくばこの子みたいになるぜ？」

そんなの・・・

「・・・けるな。」

「ああ？」

そんなの、間違ってる！

「ふざけるな！！」

「何がだ？」

「一方的に誘拐しようとして、その人を殴って、

そして何よりも・・・その人を泣かせたな！！

その上で、お仕置きだ？ふざけるな！」

「・・・やっぱり見ていたんだな、小僧。誘拐なんて一言も言っていないぞ。」

「うるさい！そんな事はどうでもいい！」

「どうしてもよかねえんだよ。見られたからにはタダで返すわけには行かないな。」

お前も誘拐してやる。その前に、お仕置きだな。」

「ふん、やれるものならやってみろよ。……だが、その前に言っておく。」

「なんだ？」

「お前、オレに負けるから。」

「なんだと！！！！！」

「おばあちゃんが言っていた。この世で、男がやってはいけなことが2つある。」

食べ物を粗末にする事と、女の子を泣かせる事だ！！！」

某天の道を往く人のお婆ちゃんの言葉を拝借する。

「そして、お前はその人を泣かした。お前には罪がある。」

その罪、償ってもらうぞ！覚悟しやがれ！！！」

「……ふん、やれるものならやってみろ！！！」

こうして、オレの第2の人生初のボス戦が始まった。

ボス戦は前置きが長い。 (後書き)

主人公が、初めて魔法と、他の能力者に出会いました。
次回は、戦闘になります。

知らない天井の部屋に連れ込まれるのは主人公の運命（前書き）

ボス戦です。でも、まだ第一章は続きます。

知らない天井の部屋に連れ込まれるのは主人公の運命

オレは一気に盗賊のボスとの距離を詰め、力いっぱい殴る。

「ぐっ、……やるじゃねえか、小僧。」

「ちっ、やはり体が弱すぎるか。」

いくら鍛えたからとはいえ、たかが5歳の体。

軽い衝撃を与える事は出来たようだが、ダメージは無い様だ。

どうする……

「さあて、お返しだ!!」

「ぐはっ!!」

思い切り殴られた。2メートルぐらい吹っ飛ばされる。

結構いい腕してんじゃん。やっぱり能力を使うしかない。

「(何かいいアイデアは無いか? ビビ!)」

『(そうだな……『幻想殺し』が使えればいいんだが、ダメだからな。』

やはり、何か力技でぶち破るしかない!)」』

力技・・・身体強化か？いや、でもさっきの状態を見るとあまり効かないだろう。アイツ自身の耐久もすごいからな。となると・・・アレしかないか。

「どうした？もう終わりか？」

「・・・まだまだあ！」

オレは一か八か、腕に筋力強化のイメージをする。

「腕力強化！くらえ・・・パワーフィスト剛力覇拳！」

相手の腹に思いっきり拳を叩き込む。

「うぐ！・・・くう、今のは結構きたけどよ、まだまだダメだな。」

「ちっ！なら、これでどうだ！」

オレは、いったん距離を取り、イメージする。

「ゴムフォーム（軟体変化。・・・そして、全身の身体強化！）」

そして、オレは両膝に手を置き、思いっきり押す。

すると、体から蒸気が上がり、力が漲るのが分かる。

『お前、両足をポンプ代わりにして

血液の流れる量を増やし、それに耐えるために軟らかい体にしたのか！？

確かに身体能力はかなり高くなるが、そんなもの、あと30秒も持たないぞ！」

「なら30秒で決着をつける！いくぞ、ギア 2 《セカンド》！」

「なんだか知らんが、お前の攻撃は効かん！」

「それはどうかな！くらえ！ゴムゴムの、JET・ジェット・・・バズー
ーカーーーーーー！！！」

オレは叫びながら両腕の掌底を食らわす。

一時的に血流量が増え、身体能力がかなり上がった。

しかも、余程の達人で無いと見極めるのが難しいほどに速度が上がっている。

某人気海賊漫画の主人公と同じ技だ。

「ぐああああ！！！」

苦悶の声を叫びながら、盗賊のボスは吹っ飛ぶ。

そして、気を失ったようだ。

「はぁ・・・はぁ・・・終わった・・・・・・・・」

しかし、オレの意識はそこで途切れた。

『オイ剣一！オイ！しっかりしろ！』

??? side

「ん、ん。あれ？ここは。」

私は目が覚めた。ここは、森の中。

なんでここに・・・あ、そうだ。

確か盗賊の親分に殴られて、蹴られて、気を失ったんだ・・・

「・・・・・・・・あれ？この子。・・・・・・・・あ！あの親分が倒れてるわ！

この子がやったのかしら・・・・・・・・私を助けるために・・・・・・・・」

そういえば、誰かの声を聞いた気がする。

『そうだよ。』

「きゃ！誰！？」

突然声が聞こえた！一体何！？

『くくく、くくく。』

「え？」

聞こえたほうを見ると、あの子の胸にペンダントがあった。

もしかして……

「このペンダント？」

『そうだよ。』

「あなたはどちら様？」

『うーん……まあ、いいか。ビビだ。ビビって呼んでくれ。』

「ビビ？」

『ああそうだ。』

「……驚いた。まさかとは思ったけど、ペンダントが喋るなんて。」

『驚いたついでに1つ、いや2つお願いしていいかな？』

「え！？な、何でしょう？」

『1つは、俺の事は内緒にしてほしい。バレるといろいろ面倒なん
でな。』

「わ、わかりましたわ。」

何が面倒なのか気になるけれど、深く追求しないようにしよう。

『そして2つ目。コイツ、どっか安全なところに避難させたいんだけ
ど。何とかなんないかな?』

「で、では、この方の家まで連れて行って差し上げましょうか?」

『あゝ、悪い。コイツ家無いんだ。旅人でな。』

家が無い? 旅人って大変なのね……

「ど、どうしようかしら。」

どうしようか悩む。すると、

「シンディ様〜!」

「え? あ、シェイル!」

「シンディ様! ご無事で何よりです。全く、あれほど一人で出歩い
てはいけない

仰いましたのに……」

シエイル。ちよつとうるさい私の護衛者。

「いいじゃないですよ！私の勝手でしょう？・・・あ、そうだ。シエイル！」

「は、はい。なんでしょうシンディ様？」

「この子を助けてあげたいの。」

「は？この方は？」

「私を盗賊から守っていただいたのよ。・・・ほら、そこで気を失っているでしょう？」

「ええ！？シンディ様、盗賊に襲われたのですか！？」

全く・・・なんでこの者はこんなにうるさいんだろう。

「静かになさい。とりあえず、この子を私達の家連れて行こうと思うのよ。」

なので、お願いできるかしら？」

「は、はっ！承りました！」

そう言ってシエイルはこの子を背中に背負う。

あとで、お礼を申さねばなりませんね・・・

??? side out

オレは目を覚ます。

「…………知らない天井だ。」

『変なボケ咬ますな。』

「ビビか？オレはいたい……………」

『お前はギア2^{セカンド}つてのを使って盗賊のボスを倒した後、

倒れたんだよ。』

「そうなのか？で、ここは？」

『気を失った女の子が居たろ？その子の家だよ。』

「そうか…………ってことはその子は無事だったんだな？」

『ああ。お前のことを心配していたぞ。』

「じゃあ、今すぐ起きて礼を言わないとだな。」

オレは体を起こす。少しばかり体が重いが、割と平気だ。

そして、ビビに手を触れようとしたとき、

ドアが開く。

「あ、お目覚めになられたのですね。ケンイチ様。」

さっきの女性が部屋に入ってきた。

知らない天井の部屋に連れ込まれるのは主人公の運命（後書き）

ワンピースは作者本人の好みです。

ただ、能力のコピーではなく、

あくまでいくつかの能力を組み合わせた結果、こうなったのです。
その内、また説明を書くと思います。

では、また次回。

一宿一飯の恩義は大きい（前書き）

貯めていた小説はこれで最後です。
次話以降は、週一で更新していきます。

一宿二飯の恩義は大きい

「あ、お目覚めになられたんですね。ケンイチ様。」

この人は・・・襲われていた人か。

「えっと・・・まず、おはようございます?」

「あ、はい。お早う御座います。」

「えっと・・・その・・・いろいろ聞きたいことがあるんですけど。」

「为什么呢?」

「まず、ここは貴女の家ですよね?」

「はい。正しくは私の城の客室ですが。」

客室って・・・広っ!! 高級ホテルのスイートルーム並みはあるぞ!!???

「そうですか・・・じゃあ、お礼を言っておきます、えっと・・・?」

「あ、私の名前はシンディ・アスラローサと申します。」

「ありがとうございます。シンディさん。」

オレは彼女に向き合い、笑顔で言った。

「／／／」

すると彼女は、顔を真っ赤にし俯いてしまった。

なんかマズい事言ったか……？

「あ、そうだ。オレの名前は……そういえば、何で知ってるの？」

『オレが教えたんだよ。』

「そうか……いいのか？」

『ああ。どの道お前の名前くらい知られるだろうし、

オレの事は秘密にしてもらったからな。』

「ふーん……重ね重ねありがとうございます。」

「い、いえいえ！お気になさらず！／／／」

なんで赤くなってるんだろう……？

『（呆れる……）』

なんでオレに呆れてるんだろう？

様々な疑問が駆け巡るが……とりあえず、

「じゃあ、もう行きますね。いつまでもお世話になるわけには行かないし。」

一応体は動く。なら、長居するわけには行かない。

「え？もうお暇なさるのですか？本来お世話になったのは私の方ですのに……」

「でも、これ以上お世話になる訳にはいきませんし。」

「で、ですが！」

話が大きくなりそうだ……と思った時、ドアが再び開く。

「……おねえさま？どうかなさったの？」

そこから、肉体的な意味で同じ年ぐらいの、

金髪の長い髪の女の子が入ってきた。

「あらエリサ。ちょうど良かったわ。紹介しますわ、妹のエリサです。」

「……エリサ・アスラローサ……5さいです。」

「僕は御神剣一つて言うんだ。よろしくね、エリサちゃん。」

「は、はい……／／／」

あれ？精一杯の笑顔を向けてみたのに・・・俯いちゃった。

馴れ馴れしくし過ぎたか？

「あ、それと、そんなに堅く喋らなくていいよ。僕、キミと同年だし。」

「・・・はい、わかりました。」

・・・分かってないよね？

「ま、まあ、いいや。とりあえず、僕はこれで失礼します。」

「・・・本当に行ってしまったれるんですか？もう少し・・・」

うーん、どうする・・・何か、理由を考えるべきか・・・？

・・・いや、やめよう。

よく考えたら、お世話になりっぱなしでお礼もせずに帰るのはダメか。

「じゃあ、何か手伝わせてください。お世話になったお礼に。」

「え？うーん・・・でも・・・」

自分達が助けられたのに、お礼をされるのはどうか・・・って事で悩んでるのだろう。

しょうがない、少し強引に行くか。

「何も無いのでしたら、居てもご迷惑でしょうし、直ぐにお暇しようと思うのですが？」

「！わ、わかりました！じゃあ、この子・・・エリサと一緒に遊んでいただけますか？」

「え？そんな事でいいんですか？力仕事でも何でもやりますよ？」

「5歳の子にそんな事は出来ません！」

いや、出来ます。結構力あるし、能力使えば楽勝です。

「それに・・・この子は、城の中で育った為、同年代の友人という者が居ないのです。」

なので、少しばかり世間知らずなんです・・・お願いできますか？」

「わかりました。お城の中で遊べばいいんですか？」

「はい、城の中なら大丈夫です。では、お願いいたします。」

シンディさんは深く頭を下げる。

「あ、頭を上げてください！こちらこそ、よろしくお願いします。」

オレも深く頭を下げる。

「さ、エリサ。ケンイチ様と一緒に遊んできなさい。」

「…………はい。」

オレは5歳の女の子とデート(?)をすることになった。

「さて、何して遊ぼうか？」

「……………」

へんじがない。ただのしか……やめよう、女の子だし。

「うーん。何かしたいことある？」

「……………」

「じゃあ、行きたいと…………あの。」ん？なんだい？

やっと応答してくれた。

「わたし、おはながききたいです。あなたの。」

「え？オレの？」

するとエリサちゃんはコクンと頷く。

「…………おねえさまからきました。あなたはたびびとなんです

よね？」

「旅人？」

『（俺が話した。その方が都合がいいだろ。）』

「（なるほど・・・ま、そんなもんだしな。）うん。そうだよ。」

「わたし、そのことをなにも知らないのです、おしえてほしいんです。」

そとにはなにがあるのか、どんなことがあるのか。」

「教えてもいいけど、1つお願いがあるよ。」

「・・・なんですか？」

オレは思いつきり笑顔を向ける。

「その言葉遣い、やめてほしいな。」

「・・・え？」

エリサちゃんは目を丸くしている。

「もっと、友達らしく喋ろうよ。その方がいいと思うし。」

「でも、わたしにはともだちとよべるかたがいらっしやらないので・・・」

「じゃあ、僕と友達になろうよ。」

「え？」

友達が居ないなんて、寂しすぎる。

普通このくらいの子はもっとはしゃいでもいい年だ。

わがままも、子供の言葉遣いもして良い筈。

友達だって、居て良い筈なんだ。

「ね？それならいいでしょ？」

「で、でも、どうしたらいいか・・・」

「そんなの簡単だよ。お互い名前を呼んで、一緒に何かをすれば、

その時点で友達なんだよ。」

「なまえをよんで・・・いっしょに・・・」

「そ。それじゃあよろしくね、エリサちゃん。」

「うん、ケンイチさ・・・じゃなくて、ケンイチくん！」

くん付けか・・・まあ、いいか。

様よりよっぽど良い。

それから、どのくらい経っただろうか。

とりあえず、エリサちゃんに城を案内してもらい、

その途中でオレの冒険譚や、世界の事を話した。

エリサちゃんは驚いたり、驚いたり、・・・って驚いただけじゃん。

まあ、9割驚いていた。

そして、何だかんだでもう夕方。

シンディさんが、

「今日は泊まっていてください。父上も許可してくださったので。

」

と言ってくれたので、せっかくのご好意を無駄に出来ず、

今日は泊まる事となった。

久しぶりの風呂、豪華な夕飯、綺麗な部屋でもてなされ、

オレは、逆に申し訳無くなってしまった。

そして、朝日が昇り、早朝の内に旅立つことにした。

「それでは・・・お世話になりました。」

オレは深々と頭を下げる。

ちなみにビビはまだ寝ているようだ。

「すみません、大したもてなしも出来ず・・・」

シンディさんの母親らしき人が頭を下げる。

・・・あれで大した事が無いとなると、大半のホテルが潰れる事だろう。

「娘の事は、重ね重ねありがとう。」

とこれまた頭を下げる父親らしき人。

オレは、頭を上げてください、としか言えなかった。

「また、いつでもお越してください。」

とシンディさん。

うーん、こんな機会でも無いと思えますよ？

と心の中で軽いツツコミを入れると、あることに気づく。

「あの、エリサちゃんは・・・？」

そう、エリサちゃんが居ないのだ。

「あの子は、まだ寝ているんだと思います。起こしてきましょうか？」

「いえ、そっとしておいてあげてください。昨日遅くまで話していたので、

眠いでしょうから。」

昨日、日が変わる直前までベッドに潜りながら話していた。

もちろん、一緒にベッドじゃなくて、別々のベッドだ。

・・・だくくらく、ロリコンじゃないっての！

仕方ないだろ！？そう言われちゃったんだから！

「では、道中お氣をつけて。」

「はい。では、また会える機会があったら。」

そう言って歩き出そうとする。すると

「まって~~~~！！ケンイチくん！！」

城からエリサが駆けてきた。

そしてオレの前まで来て、

「ハア・・・またね！ケンイチくん！」

と言って近づき、

チュ

頬にキスをした・・・ってええええええ！？

「ちょ！エリサちゃん！？」

エリサちゃんの後ろで家族達があらあら～などと言っている。

「また・・・あえるよね？」

「・・・ああ。きつとね。」

少し顔が熱くなったオレは、そう言って今度こそ歩きだした。

「（いつか・・・またあおうね。やくそくだよ？ケンイチくん。）」

『（しかし、コイツはまだ気づかないんだな。

この家が王族の家系だって事に・・・）』

いつの間にか起きていたビビはそんな事を思ったのであった。

一宿二飯の恩義は大きい（後書き）

はい、二人目フラグ成立です。

やはり主人公はフラグ立たせるのが上手いですね。

先にも書きましたように、週一でこれからは更新していくので、よろしくお願いします。

PV1000回突破記念！『代打く神様に代わりオレく』キャラクター座談会く

作者（以後作） 「ということで、1000アクセス突破記念！キャラクター座談会く！」

剣一（以後剣） 「ほおく1000アクセスも行っただ。パクった部分もあるのに。」

作「……今回は1000アクセスを突破したということで、それを記念して

この小説の裏話についてキャラクターと話していこうという会です。」

剣「スルー！？それは認めたも同然だぞ！？」

作「しょうがないだろ！？元々そのつもりで書くつもりだったんだから！」

剣「まあ、いいか。何だかんだで読んでくれている方もいらっしゃるみたいだし。」

作「今後も、こういう機会があればやっていこうと思います。

とりあえず、最初の第一回と言うことで、

ゲストには、主人公の御神剣一に来てもらいましたく。」

剣「……ここで紹介するか。紹介にあった通り、御神剣一だ。」

作「さて、まずはこの議題から行きましょう！」

「プレゼンキャパシティ能力付加能力は、作者が考えたわけではない！」

剣「……オイ作者。どういふことだ？これは。」

作「いや、この能力は元々、オレの友人が考えた物で、それを小説にしたら

面白いんじゃないか、という事からこの小説は生まれたんだよ。

それ以降も、その友人にアイデア出してもらったりして……」

剣「……よし、分かった。ちょっと待ってろ。」

そこら辺探して頑丈そうな剣探してくる。」

作「ちょ！いきなり概念覚醒で行く気！？オレ死ぬよ！？説明させてくれよ！」

剣「……一応聞いておこうか。」

作「アイデアを出してもらったりはしてたんだけど、それを文章に起こしたり

自分でアイデア出したりしていたんだよ!？」

剣「ふん・・・なら、まあいいか。」

作「元々、どんなチート能力が最強か。という疑問から始まってさ。

オレは「ゲートオブ・バビロン王の財宝」が最高だって言っただけだね。」

剣「まあ、アレはなあ。よく転生物の小説でも使ったりしてるよな。」

作「そういうこと。・・・さて、次の議題に行きましょう!」

「実は主人公は御神剣一ではなかった!？」

剣「・・・オーケイ作者、ちよつとO☆H A☆N A☆S Iしようか。」

作「某白き魔王少女的な!？それは勘弁して!？つか説明させてっ
て!」

剣「・・・どういふことか聞かせてもらおう。」

作「(ったく・・・オレが居なかったら生まれてないというのに・・・)
」

剣「……………なんか言ったか？（邪惡な微笑）」

作「いえ！なんでもありません！

……………本当は、御神剣一という漢字は一緒だったんだけど、

御神剣一（ごしんけんいち）だったんだよ。」

剣「ふーん……………んで何でおがみになったんだ？」

作「……………聞いても怒らない？」

剣「返答しかねる。」

作「じゃあ言わない♪」

剣「……………さて、ビビ呼んでくるか。」

作「やめて！能力使わないで！僕、天国に召されちゃう！

言うから！ちゃんと言うから！」

剣「最初から言えば良かったものの……………で、なんでだ？」

作「この方がいいかなあと思っただけ。」

剣「なんだ、それだけか。」

作「え？怒らないの？」

剣「別にこの程度じゃ怒らねえよ。オレはまたてつきり、

友人辺りに『センス悪い』とでも言われたのかと思ったよ。」

作「・・・ソ、ソナコトナイヨ。」

剣「何故片言！？まさか・・・」

作「・・・さて、次の議題に行きましょう！」

「神様のモデルは某餅巾着が主役のアニメの中の神様！」

剣「あゝ分からなくもねえな。あの碎けた感じが。」

作「これも、先に言った友人が考えてくれたんだけどさ。

オレは最初は真面目な神様を考えていたんだよ。

でも、それでもいいかなあ。と思って書いたんだ。」

剣「そうなのか・・・その友人に感謝だな。」

作「え？なんで？いや、オレも感謝はしてるけど・・・」

剣「正直あんな碎けた感じの方が・・・」

作「……方が？」

剣「いたぶり易い。」

作「……ヘイポリス！コイツ逮捕してくれ！」

剣「警察でいいのか？警官潰すよ？」

作「あ、じゃあ……って違うだろ！何そのドS！

どっかの沖田さんですかコノヤロー！？」

剣「……正直、ビビがスリッパで頭殴った瞬間スカッとしたね。」

作「誰かー！この人捕まえてー！？」

剣「ま、いつかオレがやるつもりだけだな。」

作「……コイツ、こんなに黒かったっけ？

もっと爽やかにするつもりだったんだけど……」

剣「……ハハハハ！祭りの場所はここかあ？」

作「ヤバイ！コイツ壊れた！仕方がない、ここはとっておきの……」

剣「どいつもこいつもぶちのめ「セイヤ！（スリッパで叩いた）」
バシッ

！はっ！オレは一体？」

作「はい、無事主人公が帰って来た所で、

そろそろお別れの時間がやってきたしまったみたいです。」

剣「なあ、オレ何していたんだ？」

作「今回は本編になります。また、座談会はこれからも記念すべき事があった場合、

やっていこうと思います。その際はゲストキャラを変えていこうと思います。」

剣「ねえ、オレどうしてたんだ？」

作「それでは、また次回。お会いしましょう。さよなら。」

剣「誰か教えてくれよう!!」

金に困ったらギルドへ行け。(前書き)

はい、週一更新にするつもりでしたが、
2、3日中に更新することにします。
コロコロ変えてしまいすみません。

金に困ったらギルドへ行け。

「じゃあ、これにサインしてくれ。そうすりゃ登録終了だ。」

「わかりました。・・・これでいいですか？」

「おう。そんじゃ、これがお前のギルドカードだ。」

オレは今、ある村のギルドに来ている。

理由は単純明快。ギルドに登録するためだ。

登録しようと思ったのには2つ理由がある。

1つは、強い装備を手に入れるために金を稼ぐため。

強い武器が無いと概念覚醒が使えないからな。

もう1つは、自分の身体の強化。

この間、盗賊のボスと戦って気づいたが、オレにはまだ力が足りない。

あの時は能力が使えたからいいが、万が一ビビが居ない時に襲われても、敵を倒せるようにするためだ。

・・・え？なんでビビを呼ぶ必要があるかって？

任意性質変化と概念覚醒、それと空間転移。

オレはビビが居ないとこの3つしか使えないらしいんだよ。

「じゃあ、さっそく何か依頼やるか？ポーズ。」

ギルドのおっさん（年齢42歳 独身）がオレに言う。

「・・・なんか、バカにされた気がするんだが。」

「気のせいじゃないですか？で、オレに出来る依頼って何がありますか？」

「そうだな・・・畑仕事の手伝い・・・迷子猫探し・・・ベビーシッター」

・・・街のガイド・・・こんなもんじゃねえか？」

・・・簡単すぎると言うか・・・つまらないと言うか・・・

「あの・・・誰かの護衛とかはダメですか？」

「そういうのは、もっとベテランがやることなんだ。入ったばかりのお前じゃダメだ。」

何より、お前はまだガキだろ。」

いや、精神年齢はもうすぐ20歳ですから。

「はぁ・・・分かりました。じゃあ街のガイドは

出来ないですけど、それ以外全部やります。」

「全部か！？さすがに終わらないだろ。」

「大丈夫です。任せてください。」

「そうか？じゃあ、やってもらうが・・・ちゃんと全部終わらせろよ？」

「じゃないと、依頼者に迷惑だからな。」

そう言って、ギルドのおっさんは手続きをする。

「じゃあ、こことこことここに行ってくれ。頼んだぞ。」

オレの最初の依頼が始まる。

〳畑仕事〵

「じゃあ、畑を耕してくれるかい？」

「分かりました。」

10分後

「終わりました。」

「え？もうかい？ちゃんとやったんだろうね？どれどれ・・・

・・・すごいね、完璧だよ。いったいどんなマジックを使ったんだい？」

「マジックなんて使ってませんよ。ちゃんと自力でやりました。」

『（能力使って、な）』

「（うるさいな）。終われば全てよしだろう？」

「じゃあ次は、あの辺一帯の雑草取りをしてもらえるかい？」

「分かりました。」

5分後

「終わりました。」

「早くないかい！？どれどれ・・・綺麗だね・・・」

「後は何をすれば？」

「じゃ、じゃあ、最後にあの作物達を収獲してくれるかい？ 丁寧にやるんだよ？」

「分かりました。」

3分後

「終わりました。」

「・・・もう驚かないよ。でも、綺麗に取ったんだろうね？」

「はい、この通り。」

「・・・・・・・・・・ありがとう。あんたウチで働かないかい？」

「いえ、旅人ですから。」

「分かってたさ。何するか知んないけど、頑張んなよ？」

「アンタなら出来るからさ。」

「はい、ありがとうございました。」

く迷子猫探し

「この猫なんだけど・・・お願いできる?」

「はい、任せておいてください。」

5分後

「はい見つけてきました。」

「早くない!?・・・ちゃんとウチの猫ね・・・しかも懐いてる。」

「何か、他にありますか?時間ありますし・・・」

「じゃあ、少しでいいから、ウチの猫と遊んであげてくれる?」

「分かりました。」

30分後

「どうかしら？って寝ているのね・・・」

おかしいなあ、ウチの猫、かなりの人見知りなのに。」

「なんか、一緒に遊んでいたら疲れちゃったみたいです。」

「そう・・・ありがとうね。」

「いえいえ。それでは。」

（ベビーシッター）

「じゃあ私が留守の間、ウチのアカネちゃんをお願いできるかしら？」

「分かりました。」

2時間後

「よしよし。アカネちゃん。」

「まう～～♪」

「ただいま・・・あら？」

「アカネちゃん、たかいたかい！」

「あう～～♪」

「・・・親要らないわね・・・」

「あ、そろそろ時間ですね。」

「あ、そうね。アカネちゃん？お兄ちゃん帰るからね？」

「ふ、ふええええん！！」

「ちよ、アカネちゃん！？お母さんよ！？・・・ダメ、全然泣き止まない・・・」

「また今度遊ぼうね？」

「ふええ・・・（コクン）」

「ありがとうございました。それでは・・・」

「・・・ええ。次の機会があればよろしくね・・・」

「・・・というわけで、午前中で終わらせてきました。」

「……お前何モンだ？まあいい。ほれ、今回の報酬。」

「ありがとうございます。」

中を確認……1000と書かれた札が5枚か……

「（これって日本円でいくらぐらいなんだ？）」

『（そうだな……それを10倍した数だと考えてくれればいい）』

ってことは……5万円ぐらいか。結構貰ったな。

「あの……午後に何か依頼があればやろうと思うんですけど。」

「んあ？そうだな……じゃあ、ガルバ山にある薬草取りなんてどうだ？」

「それって簡単なんですか？」

薬草取りって、簡単そうでもあり、難しそうでもありそうなんだが……？

「大丈夫だ。出てきてもファングやキューラ程度のモンスターだからよ。」

ちょっと難しいが、やめるか？」

「そうですか……じゃあ、受けます。」

「おう。ちょっと待ってな。手続きすつからよ。」

オレはこの時、まだ知らなかった。このガルバ山で・・・

オレの第2の人生に関わる凄いイベントが待っていることを・・・

金に困ったらギルドへ行け。(後書き)

次回、主人公に何かが起こる！(かも)

特別な相手となると特別な対応をするべきか悩む。(前書き)

8話目、始まります。

特別な相手となると特別な対応をするべきか悩む。

あるこゝう♪あるこゝう♪わたしは〜げんき〜♪

・・・と、のんきに歌を歌っている場合じゃなくて、

実は今、結構ピンチに陥っています。

なぜなら・・・

「「「「「「キュラララ!」「」「」「」

・・・大量のキューラが出てきたからです。

「なんでこうなるー!ー!」

事の始まりは2時間前。

回想開始

「傷によく効く薬草・・・ですか・・・。」

「はい。ですが、ガルバ山の頂上付近にありまして、いつもギルドの皆さんに

協力してもらっているんです。」

「薬草かぁ・・・（ビビ、どう思う？）」

『（そんな物は探せばいくらでもありそうな物だが・・・）』

「（だよな。）あの、どうしてもその薬草で無いといけないんですか？」

「はい。あの山にしかない薬草でして、私の運営する医院に必要なんです。

この辺は怪我をした兵隊さんたちがよくご利用なさるので。」

「そうですか・・・」

そうすると、別の山へ、という訳にはいかないのか

「・・・あの、失礼ですけど、あなた様はおいくつですか？」

「え？・・・5歳ですけど・・・」

「あなたに依頼して大丈夫なんでしょうか・・・？あ！いえ、ただ・・・」

「子供に出来るのか、という事ですか？」

「・・・はい、頼んでおいてこんなことを言うのはどうかと思うのですけど・・・」

まあ、そうなるよね。

「大丈夫です。安心してください。もし不安でしたら、

もう1人、誰かベテランの方もお連れしましょうか？」

「・・・じゃあ、お願いします。」

という訳で、オレと依頼者のサーナさんとベテランの方3人でガル
バ山にレッツゴー！

回想終了

・・・だからって、なんで山に入った瞬間こうなるー！ー！！

「カイザさん！大丈夫ですか！」

「ああ、こっちは平気だ！お前は依頼者を守れ！」

「はい！」

オレはサーナさんの元へ向かう。

「大丈夫ですか！」

「はい・・・あっ！」

後ろを振り向くと、ベテランのカイザさんが、こちら側に弾き飛ば
された。

「くっ、こいつら、数が多すぎる!」

「カイザさん。オレに任せてもらえませんか?」

「何を言ってる! 新米の、それも5歳のガキに任せられるか!」

「ここで依頼者を死なせるよりマシでしょう!」

「ぐっ・・・死ぬなよ。行きましょう。入り口で待ってるからな!」

「はい!」

カイザさんはサーナさんと共に山を降りる。

「さくで、初めてやるけど成功するかな?」

『正確には初めてじゃないだろ?』

「あの時は木の棒だったからな。今回は違うさ。」

オレは街で買った短剣を構える。

『短剣で大丈夫か?』

「ああ、なんとかなるだろ。いくぜ! 概念覚醒! 切る概念を最大に!」

その瞬間、剣が光る。

「よっしゃ! 成功! オラオラ!」

オレはキューラに向かう。

「キューラ！」

キューラの一匹が腕を突く。

「甘いよっと！」

それを難なく避けるオレ！そして、

「お返しだ！」

短剣をキューラに向かって突く。

「キューラ・・・」

攻撃されて、怯むキューラ。

仲間をやられて完全に怒り出す他のキューラ達。

「さて、行くぜ行くぜ！」

「」「」「キューラララ！」「」「」

いざ戦いが始まろうとした時、

「ギュラララ！！」

叫び声にも思えるキューラの声が聞こえた。

その声にキューラ達は動きを止める。

「ん？何だ？」

すると群れの中から他のキューラとは違うキューラが出てきた。

普通、キューラは赤い花がある植物系のモンスターなんだが、

そのキューラは黒い花を持っていた。

「黒い・・・キューラ？」

『あれはアサシンキューラだ。キューラの強化版といったところか。』

「ほう・・・」

黒いキューラ・・・アサシンキューラは、こっちを見た。

「ヒサシブリダナ・・・オガミケンイチ。」

「ど、どうしてオレの名を！？」

「オボエテイナイノカ・・・オレヲ。」

『お前・・・いつかの。』

「え？ビビ、どういう事だ？」

『忘れたか？あの、他とは違ったキューラだ。』

他とは違ったキューラ・・・あ！

「お前！ルナちゃんを襲った時の・・・！」

あの時、ルナちゃんを襲おうとして、オレが追い払った・・・

そして、唯一オレに話しかけてきたモンスター・・・

「オモイダシタカ。オガミケンイチ、イヤ、イレギュラー。」

「イレギュラー？・・・どういう事だ。」

「・・・ソノウチミズカラシルコトニナル。

コノバハ、オマエヲオスノハ、ヤメテオコウ。」

何だと？それは・・・

「カンチガイスルナ。アクマデモ、コノバハ、ダ。

ツギハ・・・タオス。」

そう言い放ち、キューラ達は去っていった。

「・・・何なんだ？アイツは・・・」

その時、ガラスが割れたような音を立て、短剣が碎ける。

「・・・結局無駄になっちゃったな。結構な値段したのに・・・」

『・・・とりあえず、山の入り口に戻ろうぜ。カイザさんと依頼者が待ってる。』

「ああ・・・」

オレは釈然としない気持ちを持ちながら、下山した。

「おお、無事だったか！心配したぞ！」

「ご心配おかけしました、カイザさん。」

オレは、入り口に戻り、カイザさんらと合流した。

「さて、ちょっといろいろありましたんで、今日は帰ることにしませんか？」

カイザさんも負傷してしまいましたし、大丈夫ですか？サーナさん。」

「はい。明日でかまいません。」

という訳で、オレ達の任務は明日に持ち越された。

次の日、ガルバ山に向かったオレ達は、薬草を取ることに成功した。

そして、今は下山中。

「今回はモンスター出ませんでしたね。」

「そうだな、せっかく武器も用意したんだが・・・」

そう、モンスターが全くといっていいほど出なかったのだ。

まるで、嵐の前の静けさのような・・・

「―（ビビ。）」

『（何だ？）』

「（オレ、今回の任務が終わったら、装備を整えて、

もう一度、ガルバ山に来ようと思う。）」

『（あのアサシンキューラに会う為か？）』

「（ああ。イレギュラーとは何なのか、アイツはオレに何を言いたいのか、

それを、知りたいんだ。）」

『（わかった。で？オレは何をすればいいんだ？）』

「（後でいくつか、能力の登録をする。それに協力してもらうから、な？）」

『（はぁ・・・わかったよ。結構大変なんだぞ？）』

「（でも、わかってくれたんだろ？）」

『（・・・オレは寝る。モンスター出たら起こせ。）』

あ、照れてやんの。

その後、無事下山したオレは、報酬を貰い、

カイザさんとサーナさんに別れを告げ、宿に泊まった。

（その時、カイザさんとサーナさんがいい雰囲気だったのはまた別の話。）

オレはベッドに入り、アイツのことを考える。

いったいアイツは何だったのか・・・

それを考えながら、オレは眠りについた・・・

特別な相手となると特別な対応をするべきか悩む。 (後書き)

連日更新頑張ってます。(自分で言うな！b y 剣一)
また明日更新します。

いよいよ、第一章も終盤にさしかかりました。
まあ、元々第二章以降がメインのつもりだったんですね。
第一章は、長いプロローグだと思ってください。

追記 y y mさん、感想ありがとうございます。
これからも頑張りますので、よろしくお願いします。

話し合いに行く時は武器を持つべきではない。(前書き)

遅れました。

本来なら日中の内に更新するはずだったんですけどね・・・
今回は、少し長いです。

それでは、9話スタートです。

話し合いに行く時は武器を持つべきではない。

「よし、行くか。」

オレは準備万端にし、ガルバ山へ向かった。

『大丈夫か？昨日ずっと鍛錬していただろ？』

「そんな事言ったらビビだって、まだ登録時の疲労が抜けていないんじゃないか？」

『まあ・・・そうだな。』

「どうする？もう少し休むか？」

『いや、行くなら早く行ったほうが良い。オレ自身もイレギュラーが何なのか』

知りたいしな。』

「そうか・・・そんなじゃ、行きますか。」

『ああ。』

そんなこんなで到着。

戦わないで話せばいいんだけど・・・戦うと面倒臭いんだよ。

最悪、この山のモンスター全部VSオレ&ビビ、みたいな事になる

かもしれないからな・・・

「キュラララ！」

突然出てきたキューラが襲い掛かる。

「・・・そういや、どうやってアイツのそこ行くんのだ？」

相手の攻撃を避けながら、ふと思う。

『（考えてなかったのかよ！？・・・昨日登録した能力で何とかならないのか？）』

「（あ！・・・アレ使えばいけるかもな・・・）」

そこで、オレはキューラと向き合う。

「能力使用！マスタースペル熟達言語！」

この能力は、某青い狸型ロボットのホン〇クコ〇ニヤクを元にしたやつだ。

どんな相手とも、会話が出来るようになる。文字も読める。

でも、複数の相手に使うことは出来ないんだよな・・・

ここからは、キュウラ語を翻訳いたします。

「待て！」

「てめえ、よくも昨日はやってくれたな！」

え？キュウラだけでそんな長い意味になるの？キュウラ語って便利だな。

「人の話を聞け！オレは話し合いに来たんだ！」

「話し合いだ？ふざけるな！武器持って話し合いに来るやつがあるか！」

あ、そうか。

「でも攻撃はしない！ただ、あの昨日のヤツと話したいだけなんだ！」

「信じられるか！お前をリーダーに会わせる訳ねえだろ！」

「リーダー？アイツ、お前達のリーダーなのか！？」

「うるさい！そんなことはどうでもいい！とにかくてめえを・・・！」

「やめろお前達！」

突如、別の声が聞こえる。

声の方へ視線を向けると、昨日のアサシンキューラが居た。

「まったく・・・熱くなれば話し合いも何も無いというのに・・・」

「リーダー！何故ここに！」

「お前の帰りが遅かったからな。探しに来たんだ。」

コイツ・・・本当にリーダーだったんだな。

「ついて来い、オガミケンイチ。何故我らの言語を理解したのか知らないが、

我らの長に会わせてやる。」

「リーダー！？こんな人間を長老に会わせるつもりですか！？」

「何も問題はあるまい。こいつは話したいと言った。

おそらく、それを成し得るまで帰るつもりはないのだろうか？」

「ああ。もちろんだ。」

「お前が知りたい答えはオレよりも、長のほうが知っている。

ただし、最初に幾つか忠告しておく。」

忠告？

「まず1つ、お前では我らの長に勝てない。決して怒らせぬことだな。」

なんだと・・・？それほどまでに強いのか？

「そして2つ、どんな現実を知ろうとも、それ相応の覚悟はしておけ。」

「！？どういうことだ！」

「それはオレよりも我らの長の方が知っている。

だが、どちらにしろ、いずれ分かることにはなるのだがな。」

「・・・わかった。行こう。」

翻訳終了

『(剣一、どうする?)』

「(耐えるしかないだろ。もし襲ってきたら戦えば良い。)」

現在、物凄い数の視線に晒されています。

なぜか？それは・・・

「「「「「じーーーー」」」」」

・・・沢山のキュラ達に睨まれている(?)からです。

「(早く来てくんねえかな〜!正直辛い・・・)」

すると、奥の洞窟らしき所から、銀色の花を持つキュラが出てくる。

「待たせたようじゃな。イレギュラー。こっちに入るのじゃ。」

そう言われ、洞窟の中に入る。けっこう中は広がった。

「・・・アンタは人間の言葉が話せるんだな。」

「まあ、この年じゃからな。このくらいは何でもないわい。

・・・それで、イレギュラー。わしに何の用じゃ?」

「それだよ。その、イレギュラーってヤツ。

なんでお前や、あいつはオレをそう呼ぶんだ?」

すると、長老キュラ(オレ命名)は暗い顔になった・・・気がした。

「・・・・・・・・どうしても知りたいかのう?」

「ああ。教えてくれ。」

「そうじゃな・・・はつきり申すと、お主はこの世界にとっては異端の存在なんじゃ。」

まあ、転生者だしな。

「それは知ってる。それが何だ？」

「人の話は最後まで聞け。・・・この世界には、何十年かに一度、わし等が、と言っても地位が上の者だけじゃがの、イレギュラーと呼ぶ存在が現れる。」

ということはつまり、オレみたいな転生者は他にも居たって事か？

「しかも、そのイレギュラーが何らかの事で命を落とすと、

また別の別のイレギュラーが現れる。」

「『（！！！）』」

ビビも驚いているようだ。あの神様、こんな事隠していたのか・・・

「（ってか、ビビも知らなかったのか？）」

『（ああ。オレは助手の仕事1年目だからな。）』

1年目であの態度だったのか・・・ビビらしいと言えばビビらしい。

「その転生者は決まって、この世界には無い、特殊な力を身に付けておる。」

イレギュラーは、他の人間には分からないようじゃ。

わし等みたいなモンスター、それも、ほんの数人にしか気づかぬらしい。」

「・・・・・・・・・・」

『・・・・・・・・・・』

言葉が出ない。ビビも同じようだ。

「お主がこの世界に来る前にもこの世界にイレギュラーという者はおったのじゃろう。」

その者にわしは会った事は無いのじゃが、その事はまず間違い無いのう。

そして、おそらくその者が何らかの事で、息絶え、お主が来たのじゃろうな。」

「・・・・・・・・お前は他の転生者たちに会ったことはあるのか？」

「・・・過去に、5人ほど会った事がある。皆わしを恐れず、掛け替えの無い友人になった。・・・そして、この話を2人に話した。」

「他の3人はどうしたんだ？」

「その時はまだ、この説が可能性の話じゃったからのう。

話したのは、10年前に会った者と、その一年後に会った者じゃ。

それより前に会った者には、話しておらぬのじゃ。」

「それで・・・この話をした時、その2人はどう思ったんだ？」

ぜひとも聞きたい。オレの先輩とも言える人が、

同じ話を聞いてどう思ったのか、そして、

今突然感じた・・・死への恐怖という思いにどう向き合ったのか。

「その2人も、今のお主のような表情をしておった。

2人ともこう言っておった。

『死が怖い。最強とも言える能力を持ってなお、死んでしまう事が。』とな。」

やはり・・・考えることは同じか・・・

「・・・じゃが、1人はこう言っておった。

『でも、安心した部分もある。もし自分が倒れても、自分の後輩が

きっと代わりに為し得てくれる。』」

「！」

オレははっとする。自分がやるべき事は何だったのか。

世界を自由気儘に旅する事じゃねえだろ！

世界の均衡を守らなくちゃいけないんだろうが！

いくら偶然あの神に頼まれたからとはいえ、一度引き受けたんだ！

・・・なら、最後の最後までやりきらなきゃいけないだろうが。

「もう1人はわしにこう言い残しおった。

『もし、お前がまた転生者に会ったら、同じ話をするんだろう？

だったら、こう伝えてくれ。

過去に出来なかったからって、自分が出来ないとは限らない。

大事なのは、自分で決めた事に後悔しない事だ。

それが、自分の自信になり、やがて、力になる。』とな。」

「自分で決めた事に後悔しない・・・」

こういう台詞や名言はいくつも聞いたことがある。

でも、ここまで心を感じたのは久しぶりかもしれない。

『（剣一、どうする？ここで、自分のやる事を決めるべきじゃないか？）』

「（ビビ、オレは・・・）」

オレは、決意した。

「オレは・・・世界を救ってみせる！そう決めた！後悔はしない！」

『（剣一・・・わかった。オレもそれに付き合ってやるよ！）』

「（おう！頼んだぜ！）」

「・・・・・・・・イレギュラー。」

「へ？」

「いきなり叫んだと思えば、何か決意したような顔つきになっておるし・・・」

何か答えは出たのかのう？」

あ、そうか、つい声に出しちゃったのか。・・・つか恥ずかし！

「はい！ありがとうございました！」

オレは長老キューラに深々と頭を下げる。

「ふふ、人間に襲われる事はあっても、礼を言われる事は無かったのう。

・・・行け、イレギュラー。何をするかは知らぬが、成功すると良いな。」

「ははっ、モンスターに応援されるとは思わなかったよ。

じゃあな、えっと・・・名前は？」

「好きに呼ぶと良い。」

「んじゃ、長老キュラー、略してチーラでどうだ？」

「・・・まあ、いい。勝手にするがいいさ。」

あれ？気に入らなかったか？まあいいか。

「じゃあな！チーラ！」

オレは、洞窟を出て、下山する。

「あのイレギュラー、今までのとは違う感じがするのう。あやつならきつと・・・」

・・・そうは思わんか？キョウヤ、ケイスケ？」

チーラはそう呟く。まるでそこに2人が見えているかのように・・・

話し合いに行く時は武器を持つべきではない。(後書き)

そろそろ、1章が終わります。

具体的に言いますと、あと2、3話です。

その後、3話ぐらい日常編を書いて、2章に入ります。
それでは、また次回。

主人公のピンチに駆けつける奴は結構強い。(前書き)

連日更新・・・ストップ。

まあ、これから頑張りますので、よろしくお願いします！

主人公のピンチに駆けつける奴は結構強い。

キューラの長老、チーラとの会話（前話参照）で、

決意を固めたオレは、

ギルドの依頼の、村荒らしモンスター退治の帰りだった。

「さて、結構稼いだし、そろそろ別の村にでも行ってみるか？」

『ああ。良いかもしれないな。さまざまな情報を知っておくのも悪くない。』

「よし、そうと決まれば・・・って、何だこりゃあ！」

『これは・・・ファングの死体か？なんでこんなに・・・』

目の前にあるのは沢山のファングの死体。

比喩表現としては、死体の山だと言うのが正しいだろう。

「誰がこんなことを・・・」

『大方、誰かが大量のファングに襲われたんだろ。』

だが、相手がなかなかの実力者の為に、返り討ちにあったんだろ
うな。』

オレもそれは考えた。だが・・・

「でも、だからってここまでやるか？あまりにも多すぎるぞ。」

死体の量があまりにも多すぎる。数で言えば20を超えているだろう。

普通、逃げるのが得策なはずだ。

『よっぽどの自信家か、それとも単なる阿呆か・・・もしくは・・・モンスターか。』

いずれにしろ、かなりの実力者であることは間違いないだろう。』

「とりあえず、この死体どうしようか？」

『埋めるか、火葬してやるといい。せめても・・・だ。』

オレは、全て火葬してやる事にした。

そして、その場を後にした。

村に帰り、ギルドに任務完了の報告をしに行こうとした時、

突然、大きな爆発音が聞こえた。

「な、なんだ!？」

「いったい何が起こったんだ!？」

村人が騒ぎ立てる。

「た、大変だぁー！モンスターだ！」

「何だと!?!」

「しかも、とんでもなくデケェ！」

ギルドの奴らが向かったけど、かなり押されてる！」

ギルドのみんなが・・・

「・・・オレたちも行くぞ!ビビ！」

『ああ!』

オレは現場に駆けていった。

「あ!カイザさん！」

「おお!お前か!アイツ、全然手ごたえがねえ。

数はこちらが多いのに、押すどころか、むしろピンチだ。

他の仲間も、怪我して戦えそうにねえ!後はオレと何人かだけだ
!」

相手は・・・なんだありゃあ！全長30メートルはある竜！？

あんなの見たことねえぞ！

『（あれはブラスタードラゴンだ！ドラゴン族の中でもかなり上のヤツだ！）』

「（何でそんなのが！？・・・とりあえず！）オレに任せてください！」

「ふざけるな！ガキはいいから、大人に任せろ！」

「人手は多いほうがいいです！オレの実力を知ってますよね！」

「ぐっ・・・で、でもな！」

「大丈夫ですから・・・あ！危ない！」

ブラスタードラゴンの尾がカイザさんに向かって伸びる。

「ぐあっ！」

カイザさんはそのまま吹き飛ばされる。

「カイザさん！・・・くそ！行くぞビビ！」

『どれで行くんだ？』

「まず剣を硬化させる。そして、この盾に痛みを通さぬ者だ！」
メガプロテクション

『ふむ、相手の出方を見るってどこか？』

「ああ。とりあえずな。よし！行くぜ！」

オレはブラスタードラゴンに向かって切りかかる。

ブラスタードラゴンはオレに向かって鋭い爪の生えた手を振り下ろす。

「（速い！）ぐっ！」

メガプロテクション
痛みを通さぬ者の付いた盾で防いだのに、衝撃が体を駆け巡る。

「凄いパワーだな。オラァ！」

オレも負けじと剣を振る。が、

ガキーン

その剣は体を切る事は無く、弾かれる。

「くっ！なんて硬さだ！」

カイザさん達が歯が立たなかったのも分かる。

「ビビ、何かねえか！」

『前も言ったが、たぶん小細工は通用しない。なら、力技でぶち破るしかない！』

「くっ！ならギア2で・・・」
セカンド

『それはダメだ！万が一、アイツが生き残ったらこの村は終わってしまう！』

セカンド
ギア2は使用後の副作用として、過度の疲労がある。

万が一倒せなかったら、それこそ守る者が居なくなり、この村は終わるだろう。

「どうすれば・・・！」

「グラァァァ！」

ブラスタードラゴンは口からビームを出した・・・って何だよアレ！

『あのビームに当たったら、一巻の終わりだ！』

「くっ！」

盾で防ぐ。くっ・・・頼む、もってくれ・・・！

盾に亀裂が入り始める。

「！マズい！」

やがて盾の亀裂が大きくなる。

「なら・・・概念覚醒！盾の本質を最大に！」

盾に力が加わる。

「グラ・・・」

ビームの咆哮が終わる。そしてそれと同時に盾が碎ける。

「何とか凌いだな・・・だが、次来られたら終わりだ。」

力技とかそういう問題じゃねえ。まず攻撃できない。

自分に疲労が来る技は、選択できない。

が、そうになると力技と言うのはかなり難しくなる。

「どうすればいいんだ・・・!」

ブラスタードラゴンの攻撃を避けつつ、必死に頭で考える。

しかし、ブラスタードラゴンはさっきのビームを打つ準備をしている。

まずい、やられる!

心からそう思った。その時、

「はあああああ!! レイジングウウスラッシュャー!!!!!!」

誰かの声が聞こえた。そして誰かの斬撃がブラスタードラゴンに向かって伸びる。

それと同時にブラスタードラゴンの口からビームが放たれる。

ビームと斬撃が互いに当たる。

しかし、斬撃はビームを霧散させ、ブラスタードラゴンに当たる。

「グララアアア！！！」

ブラスタードラゴンは苦しんでいる。

「オイキミ！」

さっきの斬撃を放ったであろう人物がオレに話しかけてきた。

30代後半ぐらいだろうか。

「は、はい！」

「キミの最高の攻撃をやツにぶつけろ！二人でやツを倒す！」

「わ、わかりました！」

オレは若干ポカンとしつつも返事をする。

何で斬撃が飛ぶのか、貴方は誰なのか、という疑問もあったが、

それよりもまず、この人は味方だ、という直感が先に頭の中に出てきた。

「私が時間を稼ぐ。その間に準備をしろ！」

「はい！・・・身体強化！そして、マジックプラス魔力付加！」

自分の身体能力を上げ、自分に魔力を与える。

そして、

「概念覚醒！剣の切る概念を最大に！」

剣に概念覚醒を付ける。

「準備は出来たか！」

「はい！」

「じゃあ行くぞ！レイジングウウウ・・・」

オレは剣に魔力を込める。概念覚醒によって剣の限界を超えているため、

他に能力を付けられない。

なので、オレに付け、オレから与えるというのがオレの考えだ。

「シャイニングウウウ・・・」

「「スラッシャー！！！！！」」

互いに斬撃が飛ぶ。と言ってもオレのは魔力の塊だが。

そして、その二つの斬撃は、ブラスタードラゴンに当たる。

「グ、ラァァァー!!!」

ブラスタードラゴンは悲鳴をあげ、倒れる。

「終わった・・・」

『ああ。ゆっくり休め。』

その言葉と同時にオレは倒れる。

・・・はずだったが、衝撃はいつまでたっても来ない。

「大丈夫か？」

さっきの人に支えられていた。

『あの、ソイツ、お願いします。』

「!キミは・・・わかった。」

そんな声を聞きながら、オレは意識を失った。

主人公のピンチに駆けつける奴は結構強い。(後書き)

次回、第1章最終回です。

その後、予告通り、2、3話ほど番外編を書いて
第2章に行きます！

最強主人公になるには時間がかかる。 (第1章 完結) (前書き)

ついに、第1章完結です。

もしかすると、察しのいい人はタイトルで分かるかもしれないですね。

最強主人公になるには時間がかかる。 (第1章 完結)

「・・・知らない親子丼だ。」

『だから、変なボケかますな！しかも、天井関係ねえし！』

若干のデジャブを感じながら、目を覚ます。

「ブラスタードラゴンはどうなったんだ？」

倒したと思ったんだが・・・

『ああ。無事倒した。』

「そうか・・・よかった。」

これ以上の被害が出なくて本当によかった。

何だかんだで、この村に愛着もあるしな。

『お前は2日寝込んだがな。』

そんなに寝たのか・・・まあ、オレに負担がかなりかかってたしな。

『それで・・・あの剣士のことなんだが・・・』

剣士？ああ・・・あの人がか。

「あの人にも礼を言わないとな。あの人がいなかったらオレもダメ

だったし。」

『そうだな。さっきまで居たんだが、散歩に行つたみたいだ。』

「そうか・・・んじゃ、オレも行くか。」

お礼と・・・1つ頼みがあるしな。

『体は動くのか？』

「ああ、全然平気・・・とは言えないが、普通に歩くくらいなら大丈夫だろう。」

『ならいい。』

「あ、もしかして・・・ここってあの人の家なのか？」

『いや、ギルドのおっさんの家だ。あの人と知り合いだったんだってよ。』

「じゃあギルドにも行かないとだな。」

オレはビビを連れて、家を出た。

まずはギルドに行くか。おっさんに礼言つとかないと。

「おっさん！御神剣一、復活しました〜！」

「おう！起きたか！もう大丈夫なんだな。」

「はい！ありがとうございました！」

オレはおっさんに心から礼を述べる。

「よせよ。それに、お前はこの村の英雄の1人だしな。」

・・・英雄？

「なんだ、知らなかったのか？お前とあの剣士はこの村の英雄だつて事で

今、村中で話題の的だぞ？」

そうなのか・・・オレというより、あの人のような気がするが・・・

「まあ、寝てたから当たり前か。そうだ、お前にこれをやるんだつた。」

そう言つてオレに1つの剣を渡した。

「これは・・・？」

「この村に伝わる秘剣 ライジング・カリバー 太陽の神剣だ。」

「え！？そんな大事な物、頂けません！」

「いいんだいいんだ。どうせこの村に使いこなせる者はいねえしな。」

それに、これはオレの独断じゃねえ。村人皆が賛成したんだ。

だから・・・頼む、受け取ってくれ。」

「・・・わかりました。ありがたく、使わせていただきます。」

オレは剣を受け取る。

「（ッ！これは・・・！）」

触れただけで、体に何かが巡る感じが分かる。

『（凄いな・・・これはかなりの物だ・・・）』

ビビにも伝わっているようだ。

「これからも・・・頑張れよ。次はどこに行くのか知らねえが、応援してるぜ。」

え！？

「ど、どうしてオレが旅立つことを・・・」

「なんとなく。表情見れば分かる。」

このおっさん、本当は凄い人なのかもしれない・・・

ただの一人身の悲しいおっさんかと思ってた。

「ん？何かせつかく良い事言っただのに侮辱された気が・・・」

「き、気のせいですよ！・・・それじゃあ、行って来ます。」

「と言っても、もう少し居ますけど。」

「そうか・・・頑張れよ。」

オレはおっさんと握手をする。

その後、村の人に軽く挨拶（サインを強請られたりもした）し、

あの剣士の人を探す。

そして、村外れの森で見つけた。

「あの・・・」

「ん？キミか・・・もう、大丈夫なのか？」

「あ、はい。おかげさまで。えっと・・・お名前は？」

「私は、ライル・アルゲート。よろしく。」

「こちらこそ。・・・ライルさんは、どうしてあの村に？」

「私は旅人でね。たまたまあそこに居ただけだったんだ。」

「1人でですか？」

すると、ライルさんは表情が険しくなる。

「・・・昔はもう1人いたんだがね。でも、亡くなってしまっ
てね。」

「あ・・・すみません。」

「いや、気にしないでいい。・・・ところで、キミのペンダント、

喋るんだよね？」

ギクッ・・・どうして？

『オレが教えた。前もそうだったろ？』

「そうなのか・・・あの、秘密にしといてください。騒がれたくない
んで。」

「ああ。分かってる。ただ・・・1つ聞いていいかい？」

「なんででしょう？」

「キミ、もしかして転生者かい？」

「『え!?!』」

オレとビビは驚く。なぜ分かるのか……

「その反応を見る限り、当たりの様だね……」

「どうして分かるんですか?」

「さっき話した、亡くなってしまった仲間。その人は転生者と言っているね。」

「キミのペンダントと同じような喋るペンダントを持っていたんだ。」

「え!?!」

『貴方は前の転生者の仲間だったんですか!?!』

「ああ。名前をイシガミケイスケと言ってね、もう十年近く前になるか。」

「ソイツはキミみたいに幼くなくてね、20歳位の年だった。」

「え? 前の転生者は初めから大人だったんですか!?!」

『それは……知らなかった。てっきり、前の転生者も皆5歳から始めるのかと……』

「それは違うみたいだね。・・・で、私は彼に勝負を挑み、負けた。

その事がきっかけで、共に旅をする事になってね。

・・・それ以降、彼が死ぬまで、一緒だったよ。」

オレはそこで無粋にも、質問してしまった。

「・・・どうして、死んでしまったんですか？」

『おい！それは・・・！』

怒鳴られることを覚悟した。しかし、怒りの声はまだ聞こえない。

「・・・知りたいかい？」

「・・・はい。ですが、話したくないのなら、別に構いません。」

すると、ふう、と息を吐き、ゆっくりと話し始めた。

「あれは・・・魔王が復活したときだったかな。」

「魔王・・・ですか？」

「ああ。この世界を破滅に導く、まさに邪悪の化身のような奴だ。

そいつを倒しに行く為に、私達は旅立った。そして、数々の戦いを何とか退き、

ついに、魔王との決戦になった。そして何とか苦戦しつつも、

私達は何とか魔王を倒す事に成功した・・・かに見えた。」

「・・・どうなったんですか？」

「魔王は私にある魔法を掛けていたんだ。それかなり頑丈な、ケイスケも解けないようなね。」

それは・・・指定した相手を殺すまで、私を戦わせるという物だった。」

「!?!」

「私はその時の記憶を覚えている。体が何かに操られ、襲いたくないのに、襲っている。」

私は何とか意識を押さえ込み、叫んだよ。『私を倒せ! じゃないと死んでしまう!』とね。」

「ケイスケさんは・・・どうしたんですか？」

「お前を殺すわけにはいかない!と言われてしまってね、そのまま死んでしまったよ。」

「・・・私の一太刀でね。そのおかげで魔法は解け、私は無事で済んだ。」

「そうだったんですか・・・すみません! 本当にすみません!」

オレは必死で謝る。そんな辛い事があったなんて・・・

「いや、キミに話しておこうとは思ってたからね。別にいいんだ。

・・・その後、私はケイスケの事を知り合いに報告しに言ったよ。

ある村の村長さんや、キューラの長老にね。」

「え？キューラの長老ですか!？」

「そうだけど・・・知ってるのかい？」

「はい!この間、いろいろあつて・・・」

「そうか・・・アイツも元気か・・・もしかして名前付けたりしたのかい？」

「あ、はい、長老キューラを縮めて、チーラって名前にしました。」

「ッ!こんな偶然があるとはな・・・ケイスケも同じ名前を付けたんだよ。」

「そ、そうだったんですか!？」

「ああ。まさかこんな事があるとはね・・・」

「そうですね・・・あの、ライルさん。」

オレは頭の中で考えていた事を声に出す。

「ん？なんだい？」

「オレを・・・強くしてください！」

「え？それは一緒に旅に出るという事かい？」

「はい！そして、オレは世界を守ります！」

「・・・簡単に言うけど、かなり難しいよ。何せ、ケイスケと私でも出来なかったんだから。」

それは確かにそうだろう・・・だけど！

「オレにもこの世界で知り合った人が居ます！」

その人達を守るために、オレは、世界を守ります！」

そういうと、ライルさんは笑う。

「ふふっ、誰かを守るために、世界を守るとはね・・・

わかったよ。ついでに修行も行うからね？覚悟しとくんだよ？」

「はい！望むところです！」

オレはライルさんと共に旅に出た。

世界を救い、仲間を守るために、オレは強くなってみせる！

その頃、とある場所で

「ワレガ・・・ヨミガエルニハ・・・マダチカラガタリナイ・
・」

何かが、復活するために力を蓄えようとしていた・・・

最強主人公になるには時間がかかる。 (第1章 完結) (後書き)

はい、無事終了です。

この後、2，3話書いて、第2章へ。

1つ、申し上げておきますと、第1章がこの長さで終わったので、

2章もこのぐらいか。と思う方がいらっしゃるかもしれませんが、

この小説は2章がメインです。

ぶっちゃけ、1章は長いプロローグみたいなものなんです。

なので、2章はもっと長いです。

ですが、温かく見守っていただけるとありがたいです。

それでは、また次回、番外編にてお会いしましょう！

番外編その1 頑張る女の子はどうしてこんなにも可愛いのだろうか。(ルナ

番外編です。ルナ編です。

番外編その1 頑張る女の子はどうしてこんなにも可愛いのだろうか。

(ルナ

「はぁ！やぁ！」

わたし、ルナ・ガイアウオーカーです！おぼえていますか？

いま、ぼうけんにいくためのじゅんびとして、

「せんとくんれん」というものをやっています。

「脇があまい！」

「あっ！・・・まけました・・・」

「うーん、まだまだ訓練が必要みたいだね。相手が僕だからいいけど、

モンスターや盗賊だったら、直前で止めたりしないからね？」

「はい・・・」

ぎるどのひとたちにおねがいして、くんれんをしてもらっているんですけど・・・

わたし、けんをうまくつかえなくて、ちょっとつらいです。

「はぁ・・・くんれんってつらいなぁ・・・」

あのケンイチっていうおとこのこといっしょにぼうけんしたいからがんばってみたけど、こんなにつらいとはおもわなかった。

「・・・かわ、いこう。」

わたしはちかくのかわへとでかけました。

「ふう〜！きもちいい！」

かわにあしをいれて、ちかくそいしにすわる。

このかわはわたしのおきにいりなの！あ〜きもちいい！

「・・・くんれん、やめようかなあ・・・」

そうすれば、いつでもかわにはいれるし、

ともだちともいっぱいあそべるし・・・

「ケンイチ、いまごろどうしてるかなあ・・・」

いまもたびしてるのかな？

とってもつよいし・・・わたしじゃだめだね・・・

いっしょにいれるのは、もっとつよいひとじゃないと・・・

「・・・もうかえろ。」

わたしはかなしいきもちでいえにかえった。

つぎのひ、わたしはあさのくんれんをさぼった。

ぎるどのひとには、ぐあいがわるかった、っていった。

そして、わたしはいえにかえってやすんじた。

しばらくしたら、いえにおきゃくさんがきたみたい。

「いやゝ、お久しぶりですね。ガイアウオーカーさん。」

「そうですね。本当にお久しぶりです。」

わたしのおとうさんとなにかはなしてる・・・

きになって、はなしをきいてみる。

「最近、本当にモンスターが多いですね。」

「ええ。ギルドの方々も頑張っていらっしゃるようですが、

さすがに数が多いですから・・・国兵もモンスター退治に動員されているようですよ。」

「そうなんですか！やはり、自分の身は自分で守らなくてはですね。」

なんかよくわかんないけど、もんすたーがふえているってことと、とてもたいへんということはわかった。

「あ、そうですそうですガイアウオーカーさん。

西にあるリアード村の事件、知ってますか？」

「・・・いや、知らないな。何かあったのか？」

なんだろう？

「ギルドの知り合いに聞いたんですけど、

村でブラスタードラゴンが暴れたらしいんです。」

「え！？ブラスタードラゴンが！？」

ぶらすたーどらごん？わからないけど、とってもつよそうなの。

「そのブラスタードラゴンが、村を襲ったときに、ギルドの方達が精一杯戦ったそうなんですけど、結局負けてしまったそうなんです。」

「それで・・・村が滅んでしまったのか・・・」

・
むらがほろんでしまった？そんなにすごいもんすたーだったんだ・

「いえ、滅んでいません。」

「え！？・・・じゃあ、村人が戦ったってことですか？」

「そうじゃありません。村にたまたま訪れていた剣士と、

ギルドに入ったばかりの5歳の子供が倒したそうなんです。」

え！？わたしとおないどしのこが！？そんなすごいもんすたーをたおしたの！？

「それは・・・何かの間違いでしょう。」

ブラスタードラゴンは、1人2人で倒せるようなものではないし、

ましてや、剣士はともかく、5歳児が倒すなんて・・・」

「私もウソだと思ったんですけど、村人の半分近くがそれを見ていたらしいです。」

1人2人ならともかく、半分近くとなるとさすがに・・・事実みたいです。」

「そうなのか・・・そんな凄い人なら王国が黙ってないでしょう。」

「ええ。国軍に勧誘するために探し回っているそうですよ。」

なんでも、剣士の方は名前も年齢も不明らしく、探すのは難しい
ようなんです。」

「じゃあ、子供の方は？ご両親もいるでしょうし・・・」

「子供は旅人らしく、両親どころか、身内の情報も無いそうなんです。」

唯一分かってるのは、オガミケンイチという名前しか・・・」

へへ、オガミケンイチ・・・ってケンイチ！？

「オガミケンイチ！？」

「ご存知なんですか？」

「え、ええ。以前うちの娘をモンスターから守ってくれまして・・・」

ケンイチ・・・そんなあぶないことしてたんだ・・・

よくかんがえると、まえもそうだった。

そのときはわたしはすごいとしかおもえなかったけど、

あのとき、ケンイチがもんすたーとたたかっていたのは

わたしをまもるためだった。

そして、ケンイチはこんどはむらをまもるためにあぶないめにあっ

た。

わたしは・・・ケンイチといっしょにぼうけんしたい、とおもった。

でもそれは・・・わたしがケンイチをまもるということなんだ。

「(わたしは・・・つよくならなきゃだめなんだ!)」

わたしはいえをでて、ぎるどにむかう。

「ケンイチ、わたし、がんばるからね!」

へうん、頑張れ!」

ケンイチのこえがきこえたきがした。

「(よし!やるぞ〜!!) カインおにいさん!くんれんさせてください!」

ぎるどのどあをあけ、わたしはさけんだ。

番外編その1 頑張る女の子はどうしてこんなにも可愛いのだろうか。

（ルナ

今回は、たぶん想像ついている方もいらっしゃると思います。
ここで1つお知らせです。

第2章ですが、1週間後に始めます。

理由は、世界が未来になるので、ある程度空けた方がいいと思ったからです。

勝手な理由ですみません。

これからも、応援していただけるとありがたいです。

番外編その2 頑張る女の子はどうしてこんなにも可愛いのだろうか。

(エリサ

更新遅れてすみませんでした。

ちよろつといろいろありまして・・・

では、番外編スタートです。

番外編その2 頑張る女の子はどうしてこんなにも可愛いのだろうか。

(エリサ

「まほうのくんれん、ですか？」

「はい、エリサ様。」

どうも・・・エリサ・アスラローサです。

シエイルさんが、わたしに、まほうのくんれんをするように、
つてきました。

「なぜそのようなことをしなければならいんですか？」

「それはまお・・・じゃなく！エリサ様ご自身の成長の為です。

王家に生まれ育ったからには、魔法を覚えるべきなのです！」

・・・いま、「まお」っていいかけなかったですか？

まおってなんでしょう？

「・・・でも、どうすればいいんでしょう？」

「その辺はご心配無く。街一番の魔術師を呼んでありますゆえ。

その方にご教授いただきます。」

まちいちばん？そんなにすごいかたをよばれたの？

「では、どこにいけばいいのでしょうか？」

「城の訓練場にてお待ちしております。」

「わかりました。では、いつてきます。」

わたしは、くんれんじょうにむかった。

「はじめましてエリサ様。私、エリサ様に魔法をお教えする事になった、

アスカ・サテライアです。よろしくお願い致します。」

きれいなひとです・・・おねえさまやおかあさまとおなじくらい。

「・・・よろしくおねがいます。」

「では、まず魔力を出すことから始めますね。」

「どうすればいいんですか？」

「心を落ち着けて、体を楽にして、自分が空気と同じになった気持ちで。」

「・・・こうですか？」

「はい。そのまま、自分の中にある物を空気に溶け込ませるように・・・」

わたしはいわれたとおりにやってみる。

すると、まわりのくうきがかわった。

あたたかいような、きもちいいくうきに。

でも、いっしゅんでなくなった。

「さすがエリサ様ですね。普通は魔力を出すことすら練習しなければ出来ませんのに。」

「でも、なくなっちゃいました。」

「いえ、それでいいんです。最初は私もそうでしたから・・・」

そのあとも、なんかいかやってみましたが、それきりまりよくはでなくなりました。

「うーん・・・疲れたんでしょう。少しご休憩なさるといいですよ。」

「はい・・・」

わたしはやすませてもらった。

「はぁ・・・」

いま、わたしはくんれんじょうのかげでやすんでいます。

「やっぱりむりだよ・・・まほうなんて。」

まえにおねえさまがまほうをつかっているのをみたことがあります。

とてもすごいとおもっていましたけど、

わたしには、できないとおもっていました。

おねえさまはとくべつ・・・

わたしにはむり・・・

「・・・ケンイチくんなら・・・なんていうかなあ・・・？」

「ケンイチ様がどうかしましたのですの？」

「ええ!？」

うしろからこえをかけられ、おどろいてうしろをみる。

すると、うしろにはおねえさまがたっていました。

「どうかなさったの?そんなに落ち込んで。」

「おねえさま・・・じつは・・・」

わたしはおもったことをはなす。

「……なるほどね……。ねえエリサ。さっきケンイチ様の事を話していたけど……」

私達と別れてから、ケンイチ様は何をしていたと思う？」

「ケンイチくんが？うーん……。何でしょう？」

ケンイチくんは何かをしていたのでしょうか？

「ケンイチ様は……。村を守っておられたのよ。」

「村を？」

「3日ほど前に、西にある村にモンスターが現れたらしいんですよ。」

そのモンスターはとても凶暴で、村1つなら軽々と壊してしまうぐらいのモンスター。

並みの人間では、とても歯が立たないそうですわよ。」

そんなすごいモンスターが……

「さすがにケンイチ様も、1人では倒す事は出来なかったそうですわよ。」

え？あのケンイチくんが？はなしをきいたなかでだけど、あんなつよいケンイチくんが？

「その村にいた、とても強い剣士様と協力して、なんとか倒すことが出来たそうですわよ。」

「……で、エリサ。この事を聞いて何か思ったことはあるかしら？」

「おもったこと……？」

「うーん……ケンイチくんもいちばんつよいわけじゃない？」

「そうね。ケンイチ様は、確かに強いわ。でも、1人じゃ勝てないこともある。」

つまり、ケンイチ様も特別じゃないし、ましてや私なんかは特別どころじゃないのですわよ。」

ケンイチくんも……おねえさまも……とくべつじゃない。

「さらに、エリサ、あなた、ケンイチ様が好きなんでしょう？」

「うっ！……はい。／＼／」

わたしは、ケンイチくんがすき。それはかわらない。

「エリサが強くなれば、ケンイチ様と一緒に戦うことも出来るのよ？」

ケンイチくんと……いっしょに……

「……わたし、どうしたらつよくなれるのでしょうか？」

「それは・・・頑張るしかないわ。私もそうだったのですわよ？」

「おねえさまも？」

「うん。とても辛かったけど、頑張ったのよ。」

この魔法で、誰かを救いたかったのですから・・・」

おねえさまもがんばってたんだ・・・

「あなたも、ケンイチ様のためなら、頑張れるでしょう？」

なら、ケンイチ様を守って差し上げればいいのですのよ。」

ケンイチくんを・・・まもる・・・

「・・・はい！エリサ、がんばりますわ！」

「それでこそ、私の妹よ。頑張るなさい、エリサ。」

ケンイチ様に胸を張って会えるように。」

わたしは、アスカさまのもとへはしった。

「アスカさま！まほうのれんしゅうはじめましょう！」

ぜったい・・・ケンイチくんを、まもってみせる！」

番外編その2 頑張る女の子はどうしてこんなにも可愛いのだろうか。

(エリサ

・・・え？前回とストーリーが似てる？

すみませんでしたああ！！

いや、もともと、こんな感じで書くつもりだったんですけど、ルナverとほとんど変わらない話になりました！

重ね重ねすみませんでしたああ！orz

さて、次回は違います！勘の良い方なら分かるはず！

では、お楽しみに！

番外編その3 相手に合わせて敬語は使うべきだと思う。(前書き)

どうも、番外編はこれで終わりです。

今回、少し短いですが、そこら辺はご了承ください。

番外編その3 相手に合わせて敬語は使うべきだと思う。

「なあビビ。」

『ん？なんだ？』

「お前って・・・最初敬語使ってたよな。」

『ああ、そうだな。』

「何で？」

『・・・はあ？前に言っただろ？』

「え？そうだったのか？」

『思い出してみろよ。あの日の事。』

あの日・・・ああ、あの日か・・・

そうそう、あれは確かこっちの世界に来てから、

まだ1ヶ月も経ってなかった時だっけ。

「ビビさん。この実、食べられますかね？」

『大丈夫でしょう。これはアケビの一種ですから。』

オレも、この人はまともな人だと思ってたから、敬語使ってたんだよな・・・

「もう少し鍛えたいですね。何か良い訓練メニューはありませんか？」

『そうですね・・・まず、ランニングを5km前後、その後素振り200回、

そして、昼食。その後は、能力使用の訓練。

これはそこらの辺のモンスターを相手にしましょう。そして、夕食の準備をし、

夕食、その後は休んでおくと思います。鍛えすぎてもいけませんし。』

「なるほど・・・じゃあそれで行こうと思います。」

他愛も無い会話も、敬語だったし・・・

「それじゃあ、お休みなさい。」

『こちらこそ、お休みなさい。』

・・・今考えると何気ない一言一言が、全て敬語だったな・・・

そして、ある日オレはふと言ったんだっけ。

「ビビさん。」

『はい？何でしょう。』

「ビビさんっていくつなんですか？」

『そうですね・・・人間の年号で数えるならば、294歳なんですけど・・・』

「294歳ですか!？」

『はい。ですが、これはあくまで年齢であって、

天界人の寿命は1200年ぐらいありますから、人間の平均寿命を80歳と考えると、

20歳にもなっていませんね。』

「・・・・え？じゃあ、生前のオレと同じ年だったんですか？」

『まあ、あくまで人間で例えるのですから。』

「・・・・なら、1つお願いがあるんですけど。」

『？何でしょうか？』

「敬語をやめて、タメ口で話しませんか？」

『・・・いえ、そういう訳にはいきません。天界人の掟として、下界の人間と親しくしてはいけないのです。』

「そうですか・・・でも、」

『・・・でも?』

「既に十分親しくしていると思いますよ？」

『そ、そうですか?』

「ええ。こんなに助けてくれましたし、一緒に話したことも多々ありますし、

何より、オレが既に相棒だと思っていますから！」

『相棒・・・ですか・・・?』

「はい! だったら、敬語じゃなくて、タメ口で話すのが、普通じゃないですか?」

『ですが・・・掟がありますから・・・』

「掟なんて、こんなに親しくしている時点で既に破っているんですから

今更どうってことないでしょう。」

『じゃあ……わかりまし「わかった。」……わかった、剣一。』

「はい、こちらこそよろしくな! ビビ!」

「……あゝ、そうだったっけ。掟だったんだ。」

『そうだよ。なのにお前はそれを軽々しく破れて言うもんだからよ。』

「あ……悪かったか?」

『………悪ければ、こんな事しねえよ。』

ま、オレも今はお前を相棒と思ってるぜ。』

「そうか……ありがとな、ビビ。」

『………気持ち悪いな。』

「なんだよ！人がせっかく礼を言ったというのに！」

『今日、隕石でも降ってくるか？』

「ふざけるなあ！オレだってお前に礼を言うときや言うわ！」

「ってか、雨とか雪じゃなくて隕石かよ！どんだけオレの礼はレアなんだよ！」

『……ハレー彗星ぐらい？』

「何十年に一回！？いやいやおかしいだろそりゃあ！」

『……惑星直列？』

「頻度が変わらんわ！！もっとソフトなのにしろ！」

『……皆既日食？』

「いゝいゝかゝげゝんゝにゝしろー！ー！ー！！」

『冗談だ……剣一。』

「……なんだ？」

『これからもよろしくな。』

「……ったく……ああ。よろしくな。」

オレは、相棒との絆を再認識し、旅を続ける。

相棒・・・ビビも同じ事を考えているだろうな。

人間と天界人。種族は違えど、分かり合える。

いや、むしろ種族が違うからこそ、絆は深まるのかもしれない。

いつかは別れるのかもしれない。

でも、絆が生まれたということは、覆しようもない真実になる。

そしてその真実は、別れても、そこに在り続ける。

オレは・・・ビビと相棒で良かった。

そんな事を考えながら、オレは歩き始めた。

番外編その3 相手に合わせて敬語は使うべきだと思う。(後書き)

次回、第2章突入！と言いたい所ですが、

前にも申したとおり、投稿するのは4／27となります。
なので、その前に、軽い予告編を投稿しようと思います。

第2章 予告

御神剣一が修行に出て、10年の月日が経った。

「ツイニ・・・ヨミガエル・・・」

「ワレラノオウガ・・・」

「ニンゲンタチニ、フクシュウヲ・・・！」

3人の邪悪な存在と、目の前で眠っているその長。

「魔王討伐・・・ですか？」

「ああ、頼んだぞエリサ。お前にしか出来ない事だ。」

魔王に対して動き出す国家、そして使命を受ける姫。

「くっ・・・なぜ戦争など・・・っ！」

争いは何も生まんと言うのに・・・」

「行きましょう、ルナさん。国を守るために。」

自身の愛する国のために苦悩する1人の冒険家。

この者達は、いずれお互いが自らの考えの為に戦う事になる。

ある者達は、自身の欲望のために。

また、ある者達は、世界を破壊する存在を倒すために。

そして、ある者達は、愛する祖国を守るために。

「行け、もう教えることは無い。」

「ありがとうございましたあ！！」

そんな中、御神剣一は再び動き出す。

彼はこれから何をするのか。

世界に対し、何を思うのか。

彼の存在は……この者達にどんな影響を与えるのか……

それは……神も知らない事である……

「ヴェクシヨイ!! 誰か噂でくもしてるくんでしょうか?」

・
・
・
・
シリアスな空気が
・
・
・
O
r
Z

PV5000回&ユニーク1000人突破記念！『代打く神様に代わりオレ』

5000回かあゝ・・・良かったあゝ（TOT）。

ユニークも1000人行きましたし、これからも頑張ります！

・・・今回は作者不在ですが。

？「ということで、前と同じく記念座談会く今回のキャラはこの人！ビビさん。人の姿で登場でくす」

ビビ（以下ビ）「お、オレ！？ていうかあんた誰なんだよ？作者じゃないだろ！」

？「んく、誰って言われてもねく。まあ、前の座談会を読んでる人予想つくと思うけどさ。」

ビ「前の座談会？ってことは作者の友人か？」

三銃士（以下三）「そうだよ、三銃士とも呼んでくれい。今回は作者の代理で来たんだよ。」

・・・アイツ、これなくなっちゃったから」

ビ「作者に何があったんだよ！」

三「まあ、気にしない気にしない。まあ今回も裏話を明かしてくよ。最初の裏話ドン！」

「なんとビビは最初はネコだった！」

ビ「しよっぱなから、どういことだよ、説明しろ！」

三「えゝ、めんどく

ビ「剣一呼ぶぞ。」

三「スミマセンでした！説明するから呼ばないで！」

ビ「で、どういことなんだよ。」

三「いや、まあ初期の段階から助手をだすことは決定してたわけなんだが、

人じゃなくネコの姿をしてたんだよ。」

ビ「ふゝん、でなぜにネコ？」

三「あの神様にネコの助手って似合いそうだったからさ。」

ビ「実際は？」

三「作者・オレ、二人とも猫派だったから・・・」

ビ「・・・殺す」

三「ま、曲りなりでも神様の元助手が殺すなんて言葉を」

ビ「殺す」

三「そ、そう怒らないでよ。つ、次の話いってみよう。」

ビ「逃げたな」

「なんと、プレキャパは初期では非チートの使いにくいものだった」

ビ「まあ、前の話はいいとして、これはどういうことなんだ？」

三「今では、ほとんど好きな能力を付加できるだろ？」

ビ「ああ、そうだな」

三「でも、最初はみたことあるスキルとあの三つしか使えないものだったんだよ。」

見たことあっても魔術系の能力は不可能だったし。」

ビ「確かに使いにくいな。」

三「だろ？でもそれだとさすがにキツイってことでルールが甘くな
って今にいたるわけで。」

ビ「なるほどなあ、でもこれってオレに説明するよりも剣一に言っ
たほうがよかったんじゃないかねえ？」

三「いや、それ以外の設定は今とだいたい同じだったから、

非チートで異世界に送ってたかも知れないとかばれると・・・」

ビ「ヤバイってことか。・・・予想外なところで作者たちの弱みが握れたぜ。」

三「弱み握るって！アンタほんとに神様の助手だったの？」

ビ「神様の助手だったって神様アレだぞ。」

三「あゝ、納得。じゃあ最後の裏話いくよ」

「ビビは、女の子の予定もあった！」

ビ「・・・遺言は？」

三「ちょ、そのセリフはリアル怖いからやめて！」

ビ「それで・・・終わりか？」

三「ま、待って、言い訳ぐらいさせてくれよ！」

ビ「じゃあ、5秒だけ待つ。」

三「短っ！」

ビ「いゝち」

三「い、いやまってくれよ！」

ビ「にゝい」

三「ひ、ヒロイン決めるときにさ」

ビ「さゝん」

三「そ、そういう話もあったってだけで」

ビ「しゝい」

三「さ、最終的に却下になったんだし。」

ビ「ごゝお」

三「き、気にしないでくれよ」

ビ「終わりだ。死ね！」

ボグッ！

三「へブチッ！」

ヒュゝゝゝキラリ☆

ビ「……はい、謎の侵入者（？）は星になったので、これにて座談会を終わります！」

これから、
『代打く神様に代わりオレ』をよろしくお願
いします！」

PV5000回&ユニーク1000人突破記念！『代打く神様に代わりオレ』

はい、実は今回の座談会は、友人の自称、三銃士さんに書いていた
だきました。

・・・理由ですか？出たと言ってたからです。

それだけですよ？・・・ち、違いますよ！決してサボりたいとか
じゃなくて！

と、とりあえず、今後ともよろしくお願いいたします！

人間、時が経てば変わるものである。（前書き）

皆さま、お久しぶりでございます。

ガスキン様に、お気に入りユーザーに入れてもらえました。

ありがとうございます。

第2章、スタートです。

人間、時が経てば変わるものである。

御神剣一・・・かつて、ある村をブラスタードラゴンから守った事で、

ギルドハンター達の間で噂されていたが、

その後の消息が不明な事で、死亡説が挙げられていた。

その為、人々の記憶の中から消え去ろうとしていた。

しかし、その人々は知らない。

彼が・・・やがて英雄と呼ばれる事になろうとは・・・

エリサside

「エリサ様。国王陛下が国王の間にてお待ちです。」

「分かりました。今参ります。」

私はアスラローサ国、第二王女のエリサ・アスラローサです。

国王陛下・・・つまり、私のお父様が私にお話があるそうです。
いったい何でしょう？

「失礼します。お父様、只今参りました。」

「エリサ。よく来てくれた。」

お父様は私に向き合って、口を開いた。

「実は・・・1つ、頼みと言うかな、いや、命令とさせてもらおう。」

「命令・・・ですか？」

「ああ、エリサ、お前には・・・」

お父様は話すのをとまどってらっしゃるようですわね。

それほど重要な話なのでしょうか？

「お父様？」

「・・・いや、なんでもない。お前には、魔王討伐の命に出てもらう。」

魔王？討伐？いったいどういう事でしょう？

「魔王討伐・・・ですか？」

「ああ、頼んだぞエリサ。お前にしか出来ない事だ。」

いや、その前に・・・

「その前に、説明してください！まず、魔王とは何なのですか！」

「魔王か・・・そうだな・・・まずこの世界の歴史に、

世界の崩壊があった事を知っておるか？」

「っ！世界の崩壊ですか！？そんな事が・・・」

「まあ、知らなくても無理はない。あまり人には知られておらぬことだからな。」

・・・それで、本題はこれからだ。その世界の崩壊の原因こそが、魔王なのだ。」

「え！？どうしてですか！」

「魔王には、全てのモンスターの戦闘意欲を増加させる能力がある。

さらにそれだけではなく、魔王自身にも特殊な能力があるらしい。

」

そんな恐ろしい者が昔にいたなんて・・・

「・・・しかし、魔王を討伐するために、騎士と魔術師と旅人が向かい、

相討ちになりつつも倒したそうだ。」

「そうだったのですか・・・」

「ところが、近頃モンスターの動きが活発になってきてな、

私が信頼を置く予言者に、予言してもらったところ・・・こんな事になるそうだ。」

邪悪なる者、世界を再び闇へと返そうとする。

それを止めるべく、四人と天からの使い達が動き出す。

使命を帯びし者、世界を愛し者、人を守りし者、獣の血を引く者、

そして、天から参りし者と、神から遣われし者。

邪悪なる者、僕と共にその者達と相見える。

やがて、争いが終わりし時、真の闇が姿を現す。

「邪悪なる者・・・これは魔王のことでしょうか？」

「おそらくそうだろう。後は、使命を帯びし者、これはエリサの事だ。」

「わ、私ですか!？」

「ああ。後は・・・まだ分からんな。」

「真の闇というものも気になりますね・・・」

「その通りだ。とにかく、魔王討伐の命、引き受けてくれるな？」

「はい。アスラローサの名に懸けて。」

「では、出発の準備をするのだ。出発は5日後だ。」

意外とお早いですね・・・

「分かりました。では。」

私は国王の間を出ようとする。

「あ、ちょっと待て。」

「はい？」

「出発する際に、シオン・ヴェイス2番隊隊長を連れて行くのだ。」

さすがに一人旅は難しかりう。」

「あ……そうですね。ありがとうございます。」

確かに、時間が経ってからならともかく、最初はまだ難しいだろう。

私は、ドアノブを捻り、国王の間を出た。

エリサ side out

シオン side

「はあ！たあ！やあ！」

僕は今、一生懸命訓練中です。

国を守る為、国民を守る為、国王陛下を守る為。

とにかく、守る為に、強くならなくちゃいけないんです！

……いえ、守る為、ではなく、約束を守る為と言った方がいいかもしれませんね。

「ふう。今日はこのくらいにしておくか。」

「隊長。」

あれは、副隊長のロッティだ。

「ん？どうした？」

「国王陛下がお呼びです。国王の間に、お急ぎください。」

「分かった。」

国王陛下が・・・何かの任務だろうか？

「お呼びでしょうか。国王陛下。」

「うむ。実はだ・・・」

僕は話を聞いた。

魔王の事、過去にあった事、予言の事、そして・・・エリサ様の事。

「・・・そうでありましたか。それで、私は何を・・・？」

「お前には旅に出るエリサの護衛に就いてもらいたい。」

「わ、私ですか！？何故私のような者が・・・？」

「お前になら出来ると思ったのだ。お前は忠誠心に厚い。」

さらに、実力もある。……エリサを守れるのなら尚更な。」

「な!？」

僕は、エリサ様が好きだ。

もちろん、異性として。

私の兄は、エリサ様とふれ合う事が多々あり、

その際、僕は、彼女に惚れてしまった。

身分の違いもあるが、そんな物は関係無い。

僕は彼女が好きなんだ。

……って、そんな事は今は置いておくべきか。

「ふっ。そんなに顔を赤くすることもあるまい。」

既にエリサ以外には知られておる。」

「な、な……!」

……そんな……自分では隠していたつもりなのに……

「まあ、そんな理由だ。まさか、断るつもりはあるまいな?」

「…………はい…………」

「ふむ？嫌か？ならば仕方ない、他の者を…………」

「い、いえ！シオン・ヴェイス、誠心誠意を込めて

エリサ様の護衛任務を遂行致します！」

「うむ。では、頼んだぞ。」

僕は、嬉しさとショックが入り混じったような気持ちで国王の間を出た。

人間、時間が経てば変わるものである。(後書き)

はい、ひとまずこの辺で。
次回をお楽しみに。

大切な物を守る為には時に苦渋の決断を強いられることがある。（前書き）

少し遅くなりました。すみません。

大切な物を守る為には時に苦渋の決断を強いられることがある。

ルナside out

私はルナ・ガイアウォーカー。冒険家だ。

と言っても、今は違う・・・と言わべきだろう。

なぜなら、今私は王子誘拐計画を企てているからだ。

「今の状況は？」

「着々と計画執行に向けて進んでいます。」

「そうか・・・」

「・・・ルナさん。落ち込まないでください。これは仕方の無い事ですから。」

それに、私達の一番上である貴女が落ち込んでいては、

他の者の士気が下がってしまいますよ？」

そうだろう。しかし、頭の中では思えても、

納得出来ない自分がいる。

もっと良い方法はないのか。

誰もが笑える方法は無いか。

自分の・・・私の正義に納得できる方法は無いか。

「（剣一・・・キミならどうする・・・？）」

私は、私自身が尊敬しつつ目標でもあった彼を思い浮かべる。

・・・やめよう。私の悪い癖だ。

大体、彼はもう死んだ。

実際には、誰も死んでいるところを見た者がいる訳じゃないが、

もう10年経った。

それでいて、何も情報が無いという事は、やはり・・・死んでしまったのだろう。

私はとても苦しかった。それでいて、この事件だ。

精神的にもかなり辛くなっている。私も、仲間達も。

「どうして・・・」

「・・・戦争なんて始めるのか、ですか？」

もう何回も自問自答した。

しかし、答えが出ない。という答えしかない。

この国、アスラローサ国と、隣に接しているナルダン国。

この2つの国が戦争を始めるといふ。

それも、ナルダン国側の宣戦布告によって。

私は極秘にその情報を入手し、各地で仲間を募り、悩んだ末、

ナルダン国の9歳になる第一王子、リオン・ナルダンを

誘拐する事を決意した。

そして、王子の身柄を人質にし、戦争の中止を求める。

仮に戦争が止まらなくても、この事件で国民の信頼は落ちる事だろう。

そうなれば、国は国で無くなり、戦争どころじゃなくなる。

この計画は、王子の誘拐が成功すれば、

交渉に成功しても失敗しても戦争は止まるのだ。

ただし、成功しようと失敗しようと、私達に誘拐犯というレッテルが貼られる。

「・・・・・・・・」

「・・・考えてる事。当てて差し上げましょうか。」

「・・・・・・・・」

「・・・自分1人で王子誘拐をしよう。」

「!?!」

「・・・そうすれば、私以外は表の世界を歩いていける。

呪縛に囚われたり、人々に嫌われなくて済む。」

「・・・そうだな。」

「ルナさん。勘違いしてもらっては困りますよ?」

「え?」

「私達は好きでやってるんです。好きで、この国を守ろうとして
るし、

この身を捧げているんです。そして、ルナさん。貴女と守ろうと
しているんです。」

「アスカ・・・」

「そりゃあ、いろいろ不満は無くも無いですよ?

常に野宿ですし、あまり物資も入りませんし、

・・・年下に敬語を使い、命令口調で話されたり、ね。」

「な！勝手に敬語を使うのも、命令口調で話せと言ったのもアスカだろう！？」

「何の事でしよう？」

「まったく・・・それにしても、本当にいいのか？」

そもそも、ナルダンはお前の故郷じゃなかったのか？」

前にそんなことを聞いた気がするのだが・・・

「いいんです。確かに私の故郷はナルダンです。」

でも、私にはこの国は、エリサ様・・・いや、守りたい弟子もいるんです。

・・・それに、私がいるからこの作戦が出来るんですよ？

この状況でいなくなられても困るんじゃないですか？」

皮肉めいたともとれる笑みを浮かべながら、私に向き合う。

しかし、私には分かる。この笑みは信頼の笑みだ。

「ふっ、そうか。なら、よろしく頼むぞ。アスカ。」

「はい。」

ルナsideout

リオンside

「兵士さん？」

「なんででしょうか？リオン様。」

「なんでボクは外に出てはいけないの？」

ボクは、最近なぜ外に出ることを禁止させられたのかをふしぎに
思って聞いてみた。

「王の命でございます。」

「お父さんが？」

「さようでございます。」

おかしいな？お父さんは、王様は国のみんなの代表だから、

みんなから直接意見を聞くのが王様への第一歩だっていつてるのに、
なんで？

「じゃあ、お父さんは、なんで外出を禁止したの？」

「そ、それは」

「賊が出たのですよ。」

兵士さんが答えられないでいると、後ろから声がした。

ふりかえって見るとそこには大臣さんが立っていた。

「だ、大臣さん・・・」

「リオン様、今回の外出禁止は国民の目撃情報から、

最近、この国に賊が多く出没してる事がわかりましてね。そのためですよ。」

正直、ボクはこの新しい大臣さんがすきじゃない。

見たかんじはやさしいんだけど、時々ものすごくえがおがこわく見えるんだ。

今も、えがおなんだけどなぜかこわく感じる。

「ほ、本当ですか？」

「はい、本当ですよ。リオン様」

「ど、どこにでたんですか？」

「えーと、確か、南部の森辺りだそうですよ。」

「そ、そうですか。」

うそだ、南に森なんてないはず。

お父さんにきよねん、つれて行ってもらったけどあるのはせいぜい草原だった・・・。

「あ、あの、大臣さん。」

「はい、なんででしょう？」

「お父さんと、話がしたいんだけどあわせてくれませんか？」

「すみませんが・・・それは、できません。王は、お勤めが忙しく。お時間が取れませんので。」

「は、はい。」

「では、私も仕事に戻りますね。」

「は、はい。」

やっぱり、前も兵士さんにたのんでみたけどそう言われた。

お父さん、前はそうだんしたいって言ったら会ってくれたのに、

さいきん、きゅうにいそがしくなったらしく会ってくれない。

このごろ、おしろの中のふんいきもおかしいし、いったいどうしちやっただろう？

リ
オ
ン
S
i
d
e
o
u
t

大切な物を守る為には時に苦渋の決断を強いられることがある。
(後書き)

いろいろあって書くのが遅くなりました。
また近い内に更新します。

意外な所で凄い出会いはある。(前書き)

いや、お久しぶりです。

と言っても、さほど経っていませんけど。

では、スタートです。

意外な所で凄いい会いはある。

エリサ side

「アスカ様、お久しぶりです。」

「エリサ様、お久しぶりでございます。急に参りましてすみません。」

「いえ、アスカ様なら全然構いませんわ。」

この方は、アスカ・サテライアと言って、私の魔術の師匠です。

10年前からお世話になっていたのですが、ここ2年ほどご無沙汰でした。

「それにしても・・・相変わらずお綺麗ですね。10年前と全然変わっていないですよ。」

「エリサ様、お世辞にしてもとてもありがたきお言葉、ありがとうございます。」

お世辞じゃない・・・本当に綺麗。

とても30歳とは思えない・・・

「お世辞じゃないです。あ、それで今日はいったい何の御用でしょう？」

「……しばらく、旅に出る事になり、この国を離れるので、
ぜひともエリサ様にご挨拶を……と思ひまして。」

「え？アスカ様も？」

「え？という事は、エリサ様もですか？」

「ええ。魔王討伐に。」

「そうでしたか……では、もしかすると何処かでまた会うかもしれませぬね。」

アスカ様もか……そうなるといいなあ。

「アスカ様、1つ聞きたいのですが……」

「何でしょう？」

「……御神剣一という方について、何かご存知ありませんか？」

10年前、私が……その、気になってしまった方の事。

私はもう一度会って話をしたいのに、まるっきり消息が不明になってしまった方。

「御神、剣一ですか……すみません、私にも分かりません。」

「そうですか……」

少なからず希望を抱いていたけれど、やはり・・・

「ふふっ、その方は、よほど愛されていらっしゃるのね。私の知り合いからも、

同じ事を聞かれましたわ。」

「えっ!？」

驚いた・・・まあ、あの方ですから当然ですわね。

大方、剣一様に何処かで助けられたという方なのでしょう。

「では、何処かで情報を手にしましたら、お教えいたします。」

「あ・・・ありがとうございます!」

「いえいえ。・・・エリサ様はいつご出発なされるんですか?」

「明後日にも旅立とうかと。アスカ様は?」

「私は、5日後を考えております。他にもお世話になった方に御挨拶を

せねばなりませんので。もちろんエリサ様のご出発の際には、

お見送りさせていただきます。・・・では、他の方にも

ご挨拶をする為、すみませんが、失礼させていただきます。」

「はい、では、また明後日に。」

「はい。」

アスカ様が部屋を出て行く。

「はあゝ・・・」

・・・アスカ様に一緒に来てもらおうと思ったのに・・・

仕方ないか。アスカ様にも都合があるのだから・・・

エリサ side out

アスカ side

「はあゝ・・・」

・・・エリサ様に嘘をついてしまった・・・

旅の為ではなく、犯罪の為に国を出るのに・・・

仕方ない、と頭では分かっているのにな・・・

「はあゝ・・・」

・・・溜息ばかり。

そんな事をしていたからだろう。前を見ていなかった。

ガッ

知らない人とぶつかってしまった。

「あ、すみません！」

頭を下げて謝る。

「いえ、気にしないでください。・・・あ、1つ聞きたいことがあるのですが。」

「へ？」

顔を上げると、マントを全身に羽織ったような格好の人がいた。

そして、フードの中から優しそうな微笑みで、

「ギルドの場所、ご存知ありませんか？」

そう私に話してきた。

アスカ side out

??? side

ギルドが無い。

10年ぶりにこの国に来て、せっかく寄ろうと思ったのに、

その場所には飲食店が出来ていた。

「おつかしいなあゝ・・・？ここにあったはずなんだけどなあゝ？」

ギルドが無くなるとは思えないから、何処かにある筈なんだろうけど・・・

つい考え事をしていると、誰かとぶつかってしまった。

いや、ぶつかってきたというのが正しいだろうか？

「あ、すみません！」

ぶつかってきた人は深く頭を下げている。見た目からして女性だろう。

「いえ、気にしないでください。・・・あ、1つ聞きたいことがあるのですが。」

「へ？」

そうだ、この人に聞けば分かるかもしれない。

オレは軽く微笑みながら、

「ギルドの場所、ご存知ありませんか？」

と言った。

??? side out

アスカ side

「ここです。」

「あゝ無事着いた。ありがとうございます！」

10年前来た時と場所が変わってて、迷っちゃうところでした。」

あの後、ギルドまで案内してあげた。

この男の人は私に深くお辞儀をした。

「6年前にここになったんですよ。それに、私も後でここに寄る予定でしたから、

少し早くなりましたが、全然構いません。」

「それでも、ありがとうございます。えっと……お名前は……？」

「あ、アスカ・サテライアといいます。」

「アスカさんですか、良い名前ですね。自分はおが——じゃなくて、

えっと、エドワード・エルリックと言います。エドでいいですよ。」

エドさんか……でも、今「おが」って言ったような……？

まあ、いいか。

「では、エドさん。一緒に行きましようか。」

「はい。……ふう、バレなかったか。」

「え？何か言いました？」

「い、いえ！何も！さ、行きましよう？」

私はエドさんと一緒にギルドへと入っていった。

アスカ side out

意外な所で凄い出会いはある。(後書き)

名前だけの出演。っていうか偽名。

分かる人は分かると思いますけど、

ハガオンの主人公です。

まあ、とっさに思いついたという事で。

年上にフラグは立てづらい。(前書き)

フラグが立ちそうですけど、立ちません！
ってか、立たせません！

年上にフラグは立てづらい。

エド？ side

ふう〜バレなくてよかった〜。

なるべくならあまり人にバレたくないんだよなあ。

とっさに某赤チビの錬金術師の名前使ったけど、

こりゃあ、しばらくこれで通すしかないなあ・・・

「だあれがレッドでスモールな錬金術師かぁー！！！」

・・・ん？なんか今電波が・・・？

しかも何か若干変わってるし・・・。

「エドさん？」

「あ、いえ。何でもあります。」

「私の用事は済んだので、エドさんもどうぞ？」

「あ、すみません。」

えっと、受付は・・・とあったあった。

お、親父さんだ。

「いらっしゃい、見ねえ顔だな。ギルドの登録かい？」

「ええ、あの・・・ちよつとお耳を・・・」

オレはヒソヒソ話をするために親父さんの耳を近づけるように言う。

「ん？なんだ？」

「（ひそひそ）実は・・・オレ、御神剣一です。」

「（ひそひそ）は？本当か？」

「（ひそひそ）ええ、これを・・・」

「（ひそひそ）これは・・・ギルドカードか。本物のようだな。

で？それだけが用事じゃないんだろ？」

「（ひそひそ）ええ。まず・・・」

オレは自分の事をエドと呼んで欲しいと、

そして、オレが生きてることは内緒にして欲しいと言った。

「（ひそひそ）分かった。しかし、何故だ？」

「（ひそひそ）それは・・・内緒で。」

もし知りたければ、後でお家に伺います。」

「（ひそひそ）分かった、じゃあ夕方ウチに来い。」

「ええ。では他に行く所がありますので。」

オレはヒソヒソ話を終え、親父さんに礼をする。

「おう。それにしても・・・立派になったなあ。」

親父さんが泣いている・・・

「そ、そんな、泣かないでください。」

「いや、嬉しいんだ。旅立ってから、10年間音沙汰無しだったかな、

てつきり何処かでくたばっちゃったのかと思ってな・・・

それが・・・こんなに立派になって、帰ってくるとは思っても見なかったからな。」

「親父さん・・・」

「親父さんだってよ・・・前はギルドのおっさんだったのに・・・」

ギクッ、前におっさんって呼んでたの、バレてる・・・

でも、そんなにオレの事を思ってたなんて・・・

「ありがとうございます。でも、また時期を見て旅に出ようと思っ
てますから。」

「ああ。男はじつとしてちゃいけねえ。旅だろうと何だろうと、
しっかり本気でやらなくちゃあな！」

「はい・・・！、それでは。」

「おう、長々と引き止めて悪かったな。」

「いえ。ではまた後で！」

オレはギルドの親父さんから別れ、アスカさんのところへ向かう。

「すみません。用事があったのに、引き止めてしまって。」

「いえ、そう急ぐ事でもありませんから。それにしても、

マスターとエドさんって、お知り合いなんですか？」

「え？」

「いえ、マスターが泣いてましたから。」

マスター？・・・あ、親父さんの事か。

「ええ。長い間連絡が出来なくて。」

頭をかきながら、そう言うと、

「そうですか・・・でも、驚きました。」

あの鬼のマスターが泣くなんて。」

「え？珍しいんですか？」

「ええ。ギルドランクSSって事から、
「最強の任務遂行者」
パーフェクトギルドマスター
と言われ、

新人には鬼と言われているんですよ。」

あの親父さん・・・そんな凄い人だったんだ・・・

「今は、現役を退いて、ああしてギルドの責任者をしていますけど、

それでも、厳しさは残ってるんですよ。」

へえ、そうだったんだ・・・なんか意外だったな。

親父さんは何となくこの世界の自分の父親のような感じで見てたかなあ。

「ふうん。そうなんですか。・・・さて、とりあえず用事は済んだし、

アスカさんはこれからどうするんですか？」

「他にも行く所があるので、これで失礼させていただきます。」

「あ、じゃあ・・・」

オレは袋を漁って、宝石を出す。

「何ですかこれ？」

「ガーネットっていう宝石です。お礼に差し上げますよ。」

「え!?! も、貰えませんか! こんな良い物!」

「いいんです。探そうと思えばいくらでも探せますし。それに、

この石言葉は「真実・友愛」。ま、お近づきの印って事で。」

オレの誕生石でもあるんだよな、ガーネットって。

・・・まあ、FFの影響もあるけど。

「じゃあ・・・ありがとうございます。」

「それじゃあ、この辺で。また会えたら会いましょう。」

オレは礼をして、歩いていく。

エド? side out

アスカ side

マスターが泣いてる・・・こんな初めて見た・・・

私も、マスターには散々怒鳴られ、叱られた。

一時期なんか、憎んでたこともあった。

そんなマスターが泣くなんて・・・

あのエドワードって人は何者なんだろう・・・

と悩んでいるうちに、エドさんが戻ってきた。

そして、それぞれ用事があるということで別れる事になった。

別れ際、エドさんが赤い石を差し出してきた。

ガーネットという宝石らしい。

最初は断ったけど、断りきれず貰ってしまった。

そして、エドさんは去っていった。

なんか・・・不思議な雰囲気な少年でしたね・・・。

アスカ side out

年上にフラグは立てづらい。 (後書き)

アスカさんはやっぱ年上なんでね。
フラグまでは行かないだろうと思います。
では、また次回。

PV10000回突破記念！『代打く神様に代わりオレく』キャラクター座談会

作「祝！PV10000回記念！『代打く神様に代わりオレく』キャラクター座談会！」

ルナ（以下ル）「はい、はじまりました！ちなみに、げすとはわたし、

ルナ・ガイアウオーカーです！」

作「はい、1章時のルナちゃんでくす。なぜ1章時なのかというと、

まだ2章では1話しか出てないからです。」

ル「・・・これからもちろんとでる？（涙目&上目使い）」

作「くはっ！（作者は9999ダメージを受けた！）・・・なんて攻撃力・・・」

これが、美少女能力と言うやつか・・・」

ル「あの・・・だいじょうぶ？」

作「だ、大丈夫だよ・・・それにしても、う、うう・・・（泣）」

ル「ど、どうしてないてるの!？」

作「いや、10000アクセス行ったのが嬉しいのと・・・」

ル「と？」

作「剣一やビビと違って、ルナちゃんは優しいから・・・」

今回はルナちゃんがゲストでよかった・・・」

ル「あ、あははは・・・さ、さて、はなししよ!はなし!」

作「そうだね。じゃあ最初の議題はこちら!」

「ルナは武術家の娘の予定だった?」

ル「そうなの?」

作「うん。そもそもルナの居た村が武術の栄えた村の予定だったんだ。」

ル「でもどうしてかわったの?」

作「うーん、ルナのキャラ設定が、普通の子の予定だったからかな。

普通の子なのに、武術が得意っていうのもちよっとなあ・・・
って事で。

武術等は後で学ばせる方向で行こうと。」

ル「そうなんだ・・・」

作「やっぱり、今回のゲストがルナちゃんでもよかった・・・」

剣一とかビビなら、即反論で、攻撃態勢だもん。

・・・そうだ、いつそ性格変えて、1話からやりな——

ル「あれ？なんかとんできたよ。」

作「へ？（ヒュウウウウ）ちょ、アレってギャアアア！！」

ル「ん？なんかてがみがある・・・あ、ケンイチくんからだ！

えーと、『ツギハ、ナイ』だってさ、さくしゃさん？」

作「・・・ぐ、なんとか耐えられた・・・まあ、これからは自重しよう。（たぶん。）

・・・さて、次の議題・・・と言いたいんだけど・・・」

ル「どうしたの？」

作「いや、正直議題がもう無いって言うか・・・ルナは結構楽に設定決まったし、

何より、もう思いつかないと言うか・・・」

ル「そ、そうなの！？」

作「他の事ならともかく、ルナはなあ・・・」

ル「じゃあどうするの?」

作「うーん・・・IFストーリーでも書こうかな。ってか、書きたい。」

ル「IFストーリーって?」

作「もしも、OOがOOだったら・・・って話の事だよ。そうだなあ・・・」

・・・もしも、剣一が女性だった（ヒュウウウウ）らって、な!あぶね!」

ル「あ、またてがみ。『ツギハナイト、イッタハズ』だって。」

作「え!?!これ入るの!?!もしもの話って言ってんじゃん!

じゃあ・・・こんなのはどう?」

もしも、剣一が、OOの世界に入ったら・・・
〈禁書目録編〉

「落ちるうううう!!」

今、オレは落ちています。

あの変な神様（笑）めくく!!

「って地面に叩き付けられるうううう!!」

オレの第2の人生、ここで終わりか・・・ん?

何か落ちる先に、見た事あるような人が・・・

「うわあああ!!」

「んア? 何だア?」

オレは目の前の人といっしょに死を覚悟した。

ピュン

・・・と同時に、何かの音が。

それと同時にオレは弾き飛ばされる。

・・・え? 弾き飛ばされる?

「ぐへ!」

オレは地面に叩きつけられたが、生きていた。

「お前、いったい何だ？」

生きている事を確認すると、声がかけられる。

声の主を確認すると、そこには白髪 of 白黒の服を着て、

いかにも『めんどくせえ』オーラを発している。

ってか、あれって・・・

「・・・アクセラレータ一方通行？」

「んア？俺の事知ってんのかア？」

・・・合ってるみたい。

って事はまさか、ここって『とある魔術の禁書目録』の世界！？

ありがとう！神様（アイツ以外）！！

「・・・なんだか知んねエが、用がねえならさっさと消えな。」

そう言って、アクセラレータ一方通行は去っていく。

「ちょ、ちょっと待て！あんたに礼が言いたいんだよ！」

「んなもんいるかア。」

「そう言わずに。」

「いらねえつつてんだろ！さっさとどっか行け。」

「おーねーがーいー。」

「しっけえ！」

オレは何度も一方通行アクセラレータに声をかける。

「……いい加減にしねえと消すぞ。」

「うーん、それは嫌だなあ。」

「なら消えな。」

「……妹達シスターズとやるのか？」

そう言うのと、一方通行アクセラレータは動きを止める。

「……てめえ、実験の関係者か？」

「さあね？じゃ、一方通行アクセラレータまたな〜。」

オレはダッシュでその場から立ち去る。

さて、次は上条さんに会いに行こう！

「アイツ、いったい何モンだア？」

1人残った一方通行はそう呟くのであった。
アクセラレータ

作「どよ！」

ル「……どよっていわれても……このさきは？」

作「まあ、この先はまだ書くつもりは無いよ。」

もしかしたら、またなんかの時に書くかもしれないけど。

あ、その時は別の作品でやるかもね。」

ル「そ、そうなの……」

と、とりあえず、これにて、こんかいのざだんかいはおわりです。」

作「また次回、お会いしましょう〜!」

見送りしてくれる人間は多い方がいい。(前書き)

最近ネタ切れに困り始める今日この頃。

試験に近い事に焦りだす今日この頃。

他の作者様の作品のクオリティの高さに驚く今日この頃。

・・・すみません、なんか愚痴っぽくなりました。

それでは、スタートです。

見送りしてくれる人間は多い方がいい。

シオンside

コンコン

「どうぞ。」

僕は今、エリサ王女様の部屋の前にいます。

そして、緊張しています。

なぜなら、自分はエリサ様の部屋に入った事が無いからです。

僕は国の騎士団の2番隊隊長ではあるけれど、

当然、戦う側なので、城の中にはめったに入りません。

食堂も自分の住む場所も、場外にあるので。

なので、王族の部屋、それもエリサ様の部屋に入るなんて事は無いのです。

「し、失礼します！」

僕は緊張に押し負けそうになりながらも、ドアノブを捻る。

中は綺麗で、とても整理されている。

・・・女の人の部屋ってこういうのかな？

「あらシオンじゃない。どうしたの？」

エリサ様は微笑みながら僕に話しかける。

「エ、エリサ様、ご準備は整いましたでしょうか！」

若干しどろもどろになりながら、そういうと、

「だから敬語じゃなくていいのよ？あなたと私は友達なんだから。」

・・・友達、か。

自分の気持ちの高ぶりが、少し治まる。

そのおかげか気持ちが落ち着いてきた。

「・・・いえ、自分は騎士です。子供の時とは違います。」

「なら、命令させてもらおうかしら。『敬語を使うな』って。」

ぐっ、命令されたら従うしかない。

「わかりました。じゃあせめて、旅立ってからにしてください。

そうでないと、下の者に示が付きません。」

「そう、わかったわ。そういう事にします。」

・・・それで、準備でしたっけ？もう出来てるわ。

後は着替えるだけね。」

「そうですか、ではお待ちします。」

すると、エリサ様は動きを止める。

「?・・・どうかなさいましたか？」

「・・・・私の着替え、見たいのですか？」

その言葉にハツとする。

「し、失礼しましたあ!!！」

僕は大急ぎで部屋を出る。

エリサ様の着替え・・・・・・ちょっと見たいような・・・・・・ってダメだダメだ！

僕は騎士、それ故に紳士だ！

決してそのようなやましい事はしてはいけない！

・・・・・・はあ、なんか疲れた・・・・・・

シオン side out

エリサ side

さっきのシオンの行動は今思い出しても笑えるわね。

あんなに顔を真っ赤にして。

「ふう、着替えよっと。」

私はドレスを脱いで、動きやすい洋服に着替える。

シンディお姉様が私に下さったこの服。

とても動きやすくて、軽く冒険者の気分を味わったような感じ。

「……ってダメですね私は。まだ始まってもないのに。」

自分はまだ何も出来ないのに。

「さて、準備も出来たし、シオンを呼びに行きましょうか。」

もうすぐ私の旅が始まる。

ふと、ある男の子を思い浮かべる。

私と同じ年でありながら、旅人である方。

私の尊敬すべき相手であり・・・初恋の相手でもある方。

「(もしも・・・いえ、やめましょう)」

会える可能性は無いと分かっているけど、

それでも希望を持ってしまう。

会いたい。

そして話したい。

私の事、私の周りの事を・・・知ってもらいたい。

そしてあわよくば、共に戦いたい。

「・・・よし、行きましょう！」

その希望を胸に、私は扉を開けた。

エリサ side out

エド？ 改め、剣一 side

オレは街をぶらぶらしていた。

変わった所、変わらない所などを見ながら、

買い物をしたり、情報を仕入れたりしながら歩いていた。

そして、ある店で食事をしていると、

店のドアを開け、1人の若者が入ってきた。

「マスター！もうすぐエリサ王女様が旅立つって！」

「何だと！本当か！？」

「ああ。東門から出発するんだってよ！今すぐ行こうぜ！」

エリサ王女様？東門？何事だ？

「私たちも行きましょう！」

「おう、そうだな！」

「急がなくなっちゃ！」

店に居た客が全員立ち上がる。

そして、店の外へと出て行く。

「・・・なんだ？」

首を傾げていると、店のマスターが近づいてきた。

「すまねえお客さん。今から少し店じまいするんだ。」

「何があっただ？」

「魔王退治に行くエリサ王女様が、今日旅立つんだ。」

王女様が旅に出るって言うのに、俺達が見送らねえ訳ねえだろ？

頼んだ分のお代はタダでいいから、外に出てもらっていいか？」

「まあ、ほとんど食ったし、わかった。」

こっちこそありがとな。」

「そう言ってもらえると助かるぜ。じゃ、頼むわ！」

そう言ってマスターは出て行った。

旅立つねえ・・・まあ、向こうは覚えている訳無いだろうが、

見送らせてもらおうかな。

門の近くに行くと、既に大勢の人ばかりが出来ていた。

「・・・これ、この街の全員が来てねえか？」

それはもう、人、人、人。

こんなに来て、大丈夫なのかと言うほど。

そんなこんなで、少し待っていると、

「あ！エリサ王女様だ！」

「エリサ様〜！いってらっしゃいませ〜！」

と言う声が聞こえてきた。

剣一 side out

エリサ side

・・・こんなに街の皆さんが来てくださるなんて・・・

「エリサ様〜！」

「お気をつけて〜！」

「シオン隊長、頑張ってくれ〜！」

街の皆さんの声が聞こえる。

「こんなに来て・・・店はどうするんでしょう?」

「逆にこんなに来てくれるんですから、店を開けても意味無い

「と思いますよ？」

とシオンが言う。

なるほど・・・と納得していると、

「（・・・あれ？）」

見覚えのあるような男の方が立っていた。

もう一度、目を凝らして見てみると、そこには居なくなっていた。

「（何でしょう？今の。）」

私は疑問に思いつつも、見送ってくださる方々の

温かい声援を浴びながら、東門を潜った。

「（・・・そうだ！）」

と考えて、後ろを振り向き、

「いってきます！」

と大声で街の皆さんに向かって、叫んだ。

エリサ side out

見送りしてくれる人間は多い方がいい。 (後書き)

感想を下さい。お願いします。

なんか、最近自信が無くなって来ました・・・
ぜひともいただきたい所存でございます。
では、また次回。

「偶然とは必然である。」とはよく言ったもんだ。(前書き)

今回、少し長めです。

「偶然とは必然である。」とはよく言ったもんだ。

ルナside

「では、これより説明を行う。心して聞くように。

リーダー、お願いします。」

「ああ。」

明後日はリオン・ナルダン王子誘拐作戦の実行日。

私はその作戦内容を本拠地にて——と言ってもアスカの家だが——同志達に説明をするところだ。

同志達と言っても、私を含めて10人ほどだ。

一応ギルドで、モンスター討伐と名目を変えて有志を募ったが、

報酬も低く、たいして説明も無い怪しい依頼を受ける者などおらず、
来た者はいなかった。

「リーダーのルナ・ガイアウオーカーだ。

——まあ、知らない者はいないだろうが。

これより、作戦の説明、及び、最終確認をする。」

作戦とは、まず、ナルダン国からの信頼が厚いアスカが、

リオン王子の護衛隊として、私を含めたA隊5人と共に城に入る。

護衛隊の話は既に通してある故、ここまでは成功している。

それにより、リオン王子の部屋で待機。

その後、他の5人によるB隊が顔を隠し、アスカが開けておいた裏の入口から入る。

そしてリオン王子の部屋に忍び込み、誘拐。

A隊は変装しB隊と合流し、城から脱出。

この際、国の兵との戦闘があるだろうが、

その時には、A隊が主な戦闘―（命は取らない）を、B隊は王子の誘拐を最優先にする。

交渉用の手紙を残し、しばらく身を隠し、落ち着いた頃に王子を解放。

こうすれば、戦争は行われず、全てが丸く収まる。

……私達が誘拐犯のレッテルを貼られるのは確定事項だが。

「前にも話しておいたが、この作戦は交渉が目的じゃない。

誘拐が目的だ。それさえ果たせば、戦争は止まる。

無駄な血を流すな、そして流されるな。・・・いいな？」

それぞれが返事をする。

「よし、とりあえずこれで説明は終わる。何か質問は？」

「・・・はい。」

同士の1人が手を挙げる。

「何だ？ イリス。」

「・・・オレ達はその後どうすればいいんですかね・・・。」

その言葉に対し、私ははっきりと答える。

「それは問題無い。この事は胸の内にしまい、皆思い思いに過ごすと良い。」

お前達に被害は何も無い。」

その言葉に同志達が驚きの表情をしている。

「驚く事は無いだろう。誰もお前達が誘拐犯と分かる筈が無い。

だから、安心して過ごすの良い。」

「でも、誘拐した事には変わりないですよ・・・」

「なら、その責任を果たす為に生きれば良い。

人の為に尽くせば良い。なに、人を殺した訳ではないだろう。

心配せず、お前達は生きろ。」

私の言葉にイリスを含めた同志達の表情が少しだが晴れる。

「（そう、お前達はな・・・）」

交渉用の手紙に私の名前を書いておく。勿論リーダーとして。

主犯を捕らえれば、その部下を無理して追う事は無いだろう。

アスカは捕まるかもしれないが、私が脅していたとすれば、

説明に納得がいくだろうから、直ぐに釈放されることだろう。

・・・と言えばアスカや皆は怒るだろうが、それが現状において
最善の手だ。

ならば私は喜んでこの身を捧げよう。

私というたかが16の少女に、ついて来てくれたこの者達を守るこ
とが出来るなら・・・

「他に質問は？・・・無い様だな。では、各自十分に休んでおく
ように。以上だ。」

そう言い、私はその場から立ち去る。

すると、家の玄関を叩く音がする。

「あ、はい。」

とアスカが玄関に向かい、ドアを開ける。

そこには、フードを被った、旅人の様な男が立っていた。

「え、エドさん？どうしてここに？」

アスカが問いかける。エド？いったい誰だろうか？

「あの、えっと・・・」

その男は口を開き、

「その、ギルドの依頼を見て来たんですが？」

と言った。

ルナ side out

剣一 side

「おう、来たか。さあ入れ。」

「どうも。」

オレはその日、約束通りギルドの親父さんの家に行き、

10年間の状況を説明した。

もちろん、自分が他の世界から来た事や、

ライルさんの事についてなど、話すとマズイ事になりそうな物は省略した。

途中、『無茶し過ぎだ。』と軽く（と言っても結構痛かった）殴られたが。

「・・・そうか。で、お前はこれからどうする？」

「まだ、特に決めてません。ですが、その内また旅立ちます。」

当然、魔王を倒しに行かなければならないからな。

「・・・なら、1つ頼みがある。」

そう親父さんが言う。

「？何ですか？」

「実は・・・変な依頼が来てな。」

「変な依頼、ですか？」

「おう、名目上はモンスター討伐なんだが、

何を討伐するのかや、人数の制限、資格などが書かれていないんだ。

書いてあるのは、モンスター討伐という内容と、期日、

報酬、そして集合場所だけだ。」

確かに変だな・・・そんな依頼をしても、誰も受けないだろうに。

「誰がその依頼を持ちかけたか分かりますか？」

「確か・・・アスカ・サテライアって人だったな。」

アスカ・サテライア？それって・・・今日会った人か。

あの時に依頼したのか？

「で、もしかして・・・」

「ああ、その依頼を受けて欲しいんだ。何かあっても、お前なら大丈夫だろ。」

「そんな、人を不死身みたいに言わないで下さいよ・・・」

オレがそう言うと、親父さんは大きな声で笑い始める。

「と、とりあえず、分かりました。」

でも、準備の期間があるので、明日直ぐにという訳には行きませんが。」

「おう。頼む。期日は5日後までだからな。」

それまでに行けばいいだろ。」

「はい。・・・では、そろそろ失礼します。」

オレは頭を下げ、親父さんの家を出ようとするが、

「ちよい待ち。」

と、腕を？まれた。

「お前、今日何処泊まるんだ？」

「え？一応宿は取ってありますけど・・・」

「そうか・・・明日からは？」

「まだ、決めてません・・・」

と言うと、親父さんはオレの方を向き、

「なら、しばらくここに住め！」

「え、いや、悪いですよ。」

「いいからいいから。じゃ、明日また来いよ。」

依頼の手続きは済ませとくからな。」

そう言って、俺の腕を放し、部屋へと去っていった。

「・・・ま、いいか。」

オレは親父さんの家を出た。

『あゝ、やっと喋れる。』

「わりいな、ビビ。」

今日はずっと人と話してたせいでビビは話す事は無かった。

頭の中での会話も出来るが、軽い話程度ならともかく、

さすがに2つの会話を同時にこなせるほど器用じゃない。

『で、いつ行くんだ？』

「明後日だな。まだ準備もたいして出来てないし。」

『そんな事しなくても、何とかなるだろ？』

「いや、準備しとくに越した事は無い。」

と話しながら宿に行き、寝た。

・・・途中、口で話してる事を忘れて、街の人に変な目で見たのは別の話。

そして、3日後。

オレはある家に来ている。

「ここか・・・さて、入るか。」

ドアを叩く。すると、

「あ、はい。」

と声が返ってくる。アスカさんの声だろう。

「え、エドさん？どうしてここに？」

アスカさんが驚いている。

中には10人前後の人が見えた。

オレは声をつつかえながらも、

「その、ギルドの依頼を見て来たんですが？」

と言った。

剣一 side out

「偶然とは必然である。」とはよく言ったもんだ。(後書き)

いや、今回ちょっとピンチでした。

なにせ、ビビの事をすっかりわすれ『作者?』・・・はい?

ぎゃあああああああ! ガフツ・・・

ビ『サンキュ、剣一』

剣「いや、これは当然の報いだ。

それでは、また次回もよろしくお願いします!」

知り合いから知り合いに繋がる事とはよくあるのだろうか。 (前書き)

評価いただきました。

平均3ptでした。

うーん、これからも頑張ろう。って感じですかね。

それでは、スタートです！

知り合いから知り合いに繋がる事とはよくあるのだろうか。

剣 side

「・・・・・・・・」

現在、絶賛沈黙中。いや、絶賛では無いか。

理由は簡単。

オレがあんな事をシャウトしたからだ。

そのせいで、とても静かに時が流れている。

「（どうしてこうなった・・・）」

『（それは仕方ない。たぶん誰が聞いてもこうなると思うぞ？）』

オレはこうなった時の事を回想する事にした。

回想開始

「はい、エドさん。お茶です。」

「あ、どうも。それと、敬語じゃなくていいですよ。」

オレ、年下ですし。」

「いえ、これは私の口癖みたいな物ですから。」

アスカさんがオレにお茶を差し出す。

敬語が口癖って・・・某イケメンな超能力者か？

いや、アレよりは柔らかい感じがして良いな。

「・・・で、キミは本当にこの依頼を受けるのか？」

目の前に座っている赤毛の女性が聞いてくる。

・・・どっかで会ったような気がするなあ・・・？

「はい。それが何か？」

オレは淡々と答える。

「いや、来てくれたのは嬉しいのだが、

何故この依頼を受けたのか気になってな。」

「？何かやって欲しい事があるから、依頼したんじゃないんですか

「？」

「……私達がやる事は本当はモンスター討伐なんかでは無いと？」

確認するように問い返してくる。

「ええ。じゃないとあんなの。誰も受けないですよ？」

「なかなか鋭いな。ああ、その通りだ。」

私達の目的はモンスター討伐なんかじゃない。」

やはりか……そんな気はしてたが。

「では、いったい何でs「これを聞くという事は、本当に受けるんだな？」……はい。」

「よし、では約束して欲しい。」

この事は他言無用だ。公言した場合には、即座に、お前を潰す。」

目の前の女性が殺気を発してくる。

……まあ、オレにとっては少し視線を感じるくらいなんだが。

「ええ。そこは安心してください。」

なんなら、オレの秘密を教えましょうか？

そうすれば、それが拘束条件となり、オレを少しは信用できません？」

「いや、それがどういう秘密かによるな。」

犯罪クラスの秘密でないと信用できん。」

ふむ、なるほど。

「（つまり、この依頼内容は犯罪クラスの物って事か。）」

『（そういう事だな。で、どうする？何を言うんだ？）』

「（うーん、どうしよう。御神剣一つて事はまだバラしたくないし。」

・・・そうだ、アレにすればいいか。）」

オレは1つの事柄を言う。

「わかりました。では、言います。」

・・・オレは、1つの山の一部を消しました。」

オレがそう言い放つと、しばしの沈黙があり、

「「「「・・・はあ？」「「「「

とその場に居たオレとビビ以外が同じセリフを吐いた。

回想終了

「・・・・・・・・」

沈黙が重えええええ！！誰かヘルプ！ヘルプミー！！

『（いや、誰も助けん。）』

「（心を読むなあああ！！お前に話す時とは違って

心の中で思ってるだけだかなあああ！！???)」

オレがビビに突っ込みを入れていると、

「・・・・・・・・おい。」

と、やっと口を開いてくれた目の前の女性。

「はっ、はい!?!」

「・・・・・・・・どこまで本当だ?」

と聞かれる。

「えっと・・・どこまでとは？」

「山の一部と言ったって、規模があるだろ。

どのくらいを・・・その、消したんだ？」

えっと・・・確か・・・

「山を、城2つ分くらい消しました。」

「・・・城2つ分？」

「はい。あ、ちょうどアスラローサ国の城みたいな物2つ分ぐらいです。」

オレの言葉に、周りの皆が口をアングリしている。

「え？それってもしかして・・・ガトン山ですか？」

とアスカさんが聞いてくる。

「あ、はい。どうして知ってるんですか？」

「2年前に、そういう事件があったんです。」

確か、誰も来ない山なので、被害は無いものの、

捕まえるべきだと国の兵が向かったのですが、犯人はフードを深く被った男で、

その犯人は今だに捕まっていないと・・・」

「うーん、じゃあそれはオレですね。

時期もぴったりですし。」

2年前・・・そうだな、確かそうだった。

『（確か・・・ライルさんの剣を勝手に持ち出して、^{エクス}「約束された
勝利の剣！！」^{カリバー}」

って言いながら力いっぱい振ったらなったんだよな。）』

言わないでえええええ！！！！オレの黒歴史いいいい！！！！

その後来たライルさんにめっちゃ叱られて、その場から離れたけど、
もしそのままだったら捕まってたな、間違い無く。

「まあ、とりあえずこれで秘密を話しました。

たぶん、兵にこの事を話して、

オレの服装と武器を見せれば、捕まりますよオレ？」

「・・・そうか、わかった。にわかには信じられんが、

お前には悪意と言う物は感じられん。お前を信じる事にしよう。」

よかった・・・信じてもらえず、兵に突き出される事になったらどうしようかと・・・

まあ、この人とアスカさんは信用できそうだし、そんな事はしないだろう。

「では、今度は私達の番だな。

実は・・・」

オレは依頼内容を聞いた。

「・・・と、言うわけだ。お前はこれを聞いて、まだ協力するか？」

不安な表情でこっちを見てきた。

アスカさんも、同じような表情をしている。その後ろの方々も同様だ。

オレはその人達に向け、微笑みながら、

「何を今更。オレは最初からここから依頼を受けて来たんです。

それがどんな物だろうと、オレはやり抜きますよ。」

と言った。

周りの人は驚いていたが、目の前の女性は

少し顔を赤く染め、

「な、なら今日からお前は私達の同志だ。よろしく頼む。」

と、手を差し出してきた。

「あ、よろしくお願いします。オレはエドワード・エルリックです。

エドと呼んで下さい!」

手を取り、自己紹介をする。

「ああ。私はこの集まりのリーダーになっている、

ルナ・ガイアウオーカーだ。ルナでいい。」

・・・・・・・・・・・・・・・・へ?

「(なあビビ。同姓同名・・・・・・・・じゃないかな?)」

『(あ、ああ。たぶんそうだろう。あの時のルナちゃんだな。)』

「(だ、だよな・・・・・・・・)」

まさか、こんな形で再会なんて・・・

やばい、こんな事ってありかよ!!

どうするどうする!! 落ち着けオレ。Cool downだ!

「? どうした?」

目の前の女性、もとい、ルナちゃんがオレに聞く。

「な、何でもないです何でもないです!!」

・・・あれ? って事は、この人16歳!?

大人っぽいから全然気づかなかった・・・

どっかで会ったような気はしてたが、会ったようなじゃなくて、会ってたんだな。

「と、とりあえず、これからよろしくお願いします。

えっと・・・ルナさん。」

オレは心が落ち着かないまま、そう言った。

剣一 side out

知り合いから知り合いに繋がる事とはよくあるのだろうか。(後書き)

再会しました。

まあ、ルナは気づいていませんけど。

次回は戦闘する・・・かも？

それでは、また次回。

実力を見せる時は遠慮をしないのが礼儀。
(前書き)

戦闘します。

・ ・ ・ ・ ・あまり長くないですけど。

実力を見せる時は遠慮をしないのが礼儀。

ルナ side

「模擬戦？」

「ええ。彼の実力を図るためにも必要だと思います。

A 隊と B 隊、どちらに入れるかを決めるためにも。」

会議が終わった後、アスカがそんな事を言ってきた。

「……とりあえず、エドに聞いてみるでしょう。

模擬戦の相手は……アスカ、頼めるか？」

「ええ。いいですよ。ちょうど、そのつもりでしたし。

じゃあ、エドさんに聞いてきますね。」

そう言って、部屋を出ようとするアスカ。

「待ってくれアスカ。私が行く。

ちょうど聞きたい事もあったからな。」

「そうですか……わかりました。では、庭で待ってますね。」

部屋を出て行くアスカ。

さて、私も行くとするか・・・

ルナside out

剣一side

オレは今、他のメンバーの人たちと話をしているところです。

「へー、そんな旅してたのか。」

「ええ、まあ。」

「ちょっとその辺の話くわしく聞かせてくれよ。」

と、割とフレンドリー。

皆ええ人達やなあー。

『（・・・なんで関西弁？）』

「（うるさい。変なところに茶々入れるな。）」

皆と楽しく会話していると、

「エドさん？ いるかしら？」

とアスカさんがドアを開けて入ってきた。

「え、はい。ここにいます。」

と軽く手を挙げながら答える。

「お願いがあるのでですけど、これから私と模擬戦をしてくれませんか？」

「模擬戦、ですか？（どうしようか、ビビ）」

『（いいんじゃないか？ 軽く捻ってやれ。）』

いやいや、そういう訳にはいかないだろ。

「まあ・・・いいですけど。」

「じゃあ、外で待ってるので、準備が出来たら来て下さいね。」

と言って出て行った。別に準備する事無いけどなあ。

「大変だなあゝお前。」

「え？ 何ですか？」

「アスカさんは、オレ等の中での実力はリーダーに続き2番目だ。

まず、やられるな。」

そんなに強いのか・・・と言ってもまだ分からんが。

「（よし、行くか）」

『（気をつけろよ。）』

「（大丈夫だ。負けねえよ。）」

『（いや、そうじゃなくて・・・）』

「（なんだよ？）」

『（・・・ケガさせるなよ。）』

「（・・・分かってるよ。）」

オレも男だから、全力を出すなんて無粋な真似はしない。

・・・まあ、本気では行くが。

「それじゃあ、皆さん。行ってきます。」

他のメンバーさん達の「頑張れよ」等の声を聞きながら、

オレは部屋を出て行く。

剣一 side out

アスカ side

「お待たせしました。」

エドさんが出てくる。

そのすぐ後にルナさんを含めた仲間達が外に出てくる。

「いえ、では、始めましょうか。」

ルナさん、審判をお願いします。」

「わかった。互いに武器、魔術、体術の使用有りの戦闘とする！」

どちらかが戦闘不能、あるいは自身の負けと認めた場合にのみの
決着とする！

・・・では、両者向かい合え！」

私はエドさんに向き合う。

少しニコニコしているのが若干腹に立つけど、

その姿には隙が無い。

表情はアレだけでも、戦闘意思はきちんとあるみたいね。

「それでは・・・試合開始!」

私は魔力を込め、エドさんに向かって言い放つ。

「焼き払え! フレイドス!」

炎魔法の中の中級魔法を撃つ。

と言っても、倒すわけじゃないので手加減はしているけど。

炎はエドさんに当たる。

「(あちゃあ、いきなり終わらせちゃったかしら?)」

と、少し油断をしていたのがいけないみたい。

とっさに殺気を感じ、左に飛ぶ。

立っていた場所にエドさんが立っている。

「驚きました。こんなに凄い魔法を撃つとは思いませんでした。」

その表情はとて余裕を見せている笑みだった。

「なっ!アレを避けるなんて・・・」

「では、僕からも行かせて貰いますよ?」

エドさんが真剣な顔になった。

アスカ side out

剣一 side

何アレエエ!!?? 魔法ハンパねえ……

避ける事は出来たけど、もし当たっていれば、ひとたまりも無い。

模擬戦って事忘れてない?

「では、僕からも行かせて貰いますよ?」

ちょっと本気でいこう。

僕は自分の服のポケットから、長い鉄の棒を出す。

……へ? どうやって出したかって?

そんなの簡単。オレのポケットには異次元収納能力をつけてあるんだ。

感覚的には、四次元ポット?

まあ、説明はこの辺にして、そろそろ行こうか。

「ど、どこからそんな棒を出したんですか!？」

アスカさんは驚いていた。

「まあ、それは……禁則事項です♪」

アスカさんを含め、周りの皆さんが「？」マークを浮かべる。

あ、このネタわかんないか。

「ま、とりあえず行きますね。……ヒートアップ発熱追加!」

棒の温度が上がる。もちろん、棒自身の熱で溶けるなんてバカな真似はしない。

オレは棒を構える。

……いや、ちゃんと手に^{クールダウン}冷却追加の能力付けた手袋をしてるよ？

あらかじめ付けといたんだ。

「くっ、クロス・アクアス!」

アスカさんが水の魔法をたくさん出し、オレに向ける。

なるほど、数多く出す事でオレの隙を窺うて事か。

ふっふっふ、その考え、甘い！

オレは棒を回転させながら、向かってくる魔法に備える。

水はオレの棒により、蒸発させられた。

「さて、行きますよ！」

オレはアスカさんに接近し、棒を軽く振るう。

アスカさんは避けたものの体勢が不安定になっている。

「ここだ！」

その瞬間、オレはアスカさんの足元を払い、転ばせる。

「これで決まりです。」

オレはアスカさんに棒を向ける。

・・・あ、とりあえず、能力切っところ。熱いからね。

「・・・私の負けです。」

アスカさんが負けを認め、模擬戦は終了した。

劍
一
s
i
d
e
o
u
t

実力を見せる時は遠慮をしないのが礼儀。 (後書き)

どうでしょう？

この剣一の戦闘。

今の剣一はそこら辺の人には絶対負けないぐらいの強さになっているので、

戦闘もあっけなく終わりました。

・・・ちゃんと戦闘描写できてましたかね？

では、また次回。

人に認めてもらうのは意外と大変。
(前書き)

今回少し短めになってしまいました。

人に認めてもらうのは意外と大変。

ルナ side

アスカが負けるなんて……

あの魔法には私でさえ苦戦を強いられると言うのに……

あのエドという男はいったい何者だ……？

見た目から察するに私と同じ年くらいだと思うが……

「あのー。ルナさん？」

「はっ！ な、何だ？」

気が付けば目の前にエドが立っていた。

「えっと……オレの戦闘どうでしたかね？」

「え？ あ、ああ。いいんじゃないか？」

「というか、たぶん私じゃ相手にならないんじゃないか？」

「いえ、見たところ、アスカさんは魔法による戦闘が主体のようですし」

対人よりは、対軍戦という感じでしたから、接近戦に持ち込めば勝てると思っただけです。

ルナさんは逆に接近戦が得意そうですし、そうになると、まだ分かりませんよ。」

そうは言っているが、あの身のこなしは私以上だろう。

しかもこの男は本気じゃないと言った。

「とりあえず、オレは戻りますね。それじゃ。」

「ああ。ゆっくり休むと良い。」

そう言って、エドは家へと戻っていった。

ルナ side out

剣一 side

「（ふう。疲れた）」

『（よく言うぜ。全然本気出してないくせに。）』

「（相手に傷つけないようにするのが疲れたんだよ。）」

本気で行くと思ったが、

本気で行って、全力で行かない。これが意外と難しい。

・・・オレもまだまだだな。

「おい。」

「へ？」

後ろを振り向くと、模擬戦の前まで話していたこの集まりのメンバーの方々がいた。

「お前、何モンだ？」

「・・・と言うと？」

「しらばっくれるな！あの動きは並の人間じゃない！

お前、本当はナルダン軍の者じゃないのか！？」

あ・・・こうなる事考えてなかったな。

「いえ。ナルダン軍どころか、ナルダン国にはほとんど関わりあつてないです。

前に何度か街に行っただぐらいで。」

「ウソだ！じゃなければ、ただの旅人がアスカさんを倒せるわけが――」

「——いえ、その人は本当にただの旅人でしょう。」

と、いきなり声が発せられる。

その声の先にはさっきまで戦っていたアスカさんが居た。

「ア、アスカさん!？」

「戦ったから分かります。エドさんは私に傷をつけないように

気を使いながら戦っていました。

戦いながら、その人の優しさが伝わってくる。こんな事は初めてです。

そんな人が、これから戦争を仕掛けようとする国の軍人であるわけがありません。」

「で、ですが、」

「それに、もしエドさんがナルダン国の軍人なら、

あの力で、私たちをとくに捕まえているはずです。

私達の事を知りながらも、自らの罪を教え、心を開いてくれた

エドさんは……とても優しい方です。」

「う……」

アスカさん・・・オレの事過大評価し過ぎですよ・・・

「という訳で、エドさんに謝ってください。」

「え？いいですよ別に!？」

「・・・いや、謝らせて欲しい。エド。」

このアスカさんがここまで言うという事は、お前には本当に邪な心が無いという事だろう。

そんなお前を問い詰めてしまった・・・すまない。」

その人は深々と頭を下げ、それに合わせ、他の人も頭を下げる。

アスカさん、とても信頼されているんだな・・・

「顔を上げてください。気にしてませんから。」

むしろ、いきなり余所者がこんな事すれば、そうなるのは当たり前です。」

「し、しかし・・・」

む、しつこい。いいと言っているのに。

「あ、じゃあ1つお願いしていいですか?」

「な、何だ?」

「オレの事、仲間として認めてもらっていいですか？」

皆口をポカンと開けている。

「えっと・・・どうしてそんな事を？」

「いえ、ただ単にちゃんと仲間として認めてもらえたらなあ・・・
って思っ

そうすれば、もっと親しくなれるだろうって・・・」

そう言っ

「ハ、ハハハハハ！！」

アスカさんが笑い始めた。

「・・・エドさんって、本当に優しい方なんです

なんか、少ししか話していないのに、もう友達みたいで。」

そうなのか？友達からはよく『親しみやすい』とは言われた事あるけど・・・

自分じゃよく分からないな。

「わかった。エド。改めてお前を俺達の仲間として迎え入れる。」

そう言って手を差し出す。

「あ、ありがとうございます！よろしくお願いします！」

オレはその手を握り、固い握手を交わす。

「あ、そうだ。エドさん。私、伝言があってきたんですよ。」

「伝言、ですか？」

「ええ。ルナさんが呼んでました。」

「明後日の作戦について話したいから、来て欲しい。」そうです。」

あ、そういえばどういいう作戦か全然知らない・・・

「分かりました。それじゃ、また後で。」

オレは軽く微笑み、その場を後にした。

劍
一
s
i
d
e
o
u
t

人に認めてもらうのは意外と大変。（後書き）

えー、1つお知らせがあります。

次回以降、1話分の小説の長さが長くなります。

理由は、自分で書いていて、これは短いと実感したからです。
なので、ご理解いただきますようお願い申し上げます。

ではまた次回。

外見と中身が合わないのはよくある事だ……と思う。
(前書き)

最初に言っておきます！

今回の話、反省も後悔もしていません！

外見と中身が合わないのはよくある事だ……と思う。

剣一 side

「失礼します。」

「ああ。入れ。」

オレはドアを開け、ルナさんの部屋に入る。

「そこに座るといい。」

椅子を指差し、そう言うルナさん。

「……今思ったけど、

「（オレってルナさんって言ってるけどさ、いいのかな？）」

『（年上だし、リーダーだから、別にいいんじゃないか？）』

そうか……まあ、そうしよう。

「まず、模擬戦ご苦労だった。」

「いえ……それより、作戦についての説明をお願いします。」

「ああ。まず……」

オレは作戦を聞いた。その際、俺はA隊に入る事になった。

「……という風になる。分かったか？」

「はい。……あの、1つ聞いていいですか？」

オレは1つ気になった事を聞いてみる事にした。

「ん？何だ？」

「あの……作戦とは関係ないんですけど、

どうしてルナさんはこんな事をやろうと思ったんですか？

アスラローサ国、もしくはナルダン国に情報を与えれば、

阻止する事だって出来るかもしれないのに……」

そう、どうしてこんな危険を冒してまで戦争を止めようとするのか。

オレはそれが気になっていた。

「……した。」

「え？」

「アスラローサ国には、2度渡した。ナルダン国にも1度した。

しかし、アスラローサ国に関しては、確証も無い事に兵は割けないという事で

大方、大臣辺りで止まっているだろう。」

そうか……。でもナルダン国は……。？

「あの、ナルダン国は……。？」

「……。国の上層部どころか、国の門番によって破られたさ。

目の前でな。さらに、『余計な事をするな』と剣で脅しをかけられた。

私は反論したが、切り付けられ、その場を退くしかなかった。」

「!？」

そんな……。国の上層部どころか、その兵までもが戦争を望むなんて……

『(……。おかしい。)』

「(え? ビビ、何がおかしいって?)」

『(この戦争の情報は、そもそも極秘に手に入れた物だろう?)

そんな物が、国の一般兵までにも伝わっているだろうか?)』

・・・確かに、そうとも思える。が・・・

「（でも、国の戦争だろ？兵辺りまでなら伝わっているとは思いますが・・・）」

『（兵にまで伝わっているのに、国外には殆ど伝わっていないというのがおかしいんだ。）』

どうしようと、人の口に戸は立てられないもんだ。（）』

ってことは・・・

「（かなりの地位を持つ者・・・王族や、大臣と言ったところか。が」

絶対的な圧制を強いているとか、か？）」

『（そう願いたいところだが、もっと簡単な方法がある。）』

「（というと？）」

『（おそらく、せん「・・・・・・・・エド？」・・・・・・・・後で話す。）』

ガクツ・・・ルナさん、もう少しタイミングを・・・ってしようがないか。

「（ああ。分かった。）ル、ルナさん？」

「いや、急に黙り込んでどうしたのかと・・・・・・・・」

まあ、傍から見たら黙って座っているように見えるからな・・・

「いえ、なんでも。ただ、あまりにも国の対応が酷くて・・・」

「・・・まあ、な。しかしそれも、私達の作戦が成功すれば、無問題だ。」

無問題・・・ねえ・・・？

「ルナさんの犠牲があって、ですけどね。」

「なっ!？・・・気づいていたのか。」

まあ、ルナさんはどうみても皆を助けようとするからな。

「ええ。明らかにルナさんがやりそうな事ですし。でも、そうはいきませんよ。」

「だが、これ以外に皆を助ける方法はない・・・だから私が。」

・・・私が・・・？

その言葉に俺はカチンと来た。

「私が・・・何ですか・・・？・・・自分は犠牲になりたいんですか・・・？」

「・・・仕方ないだろう・・・このくらいしか、私は「ふざけるな!」・・・エド?」

「このくらいしか・・・？じゃあそのくらいしか出来ないような小娘に

オレや、アスカさん、他の皆さんはついて来たって言うのか！？

違うだろ！誰もルナさんが言わなかったら、戦争を止めようと思う動しなかったら

動かなかったし出会わなかった！そして、仲間にならなかった！

そうしてくれた大事な人が、自分の身を犠牲にして自分達を守ってくれたなんて知ったら、

嬉しいどころか、逆に悲しいに決まってる！！」

「エ、エド・・・」

ルナさんの目が泣きそうになっている・・・でもこれだけは譲れない！

「ルナちゃんは幸せになりたいんじゃないのか！？

皆と一緒に、街の人や、家族と一緒に、大事な人生を過ごしたくないのか！？」

「・・・私は————」

ルナさんは、いや、ルナちゃんは泣いている。

それはいきなり怒り出したオレへの恐怖なのか、それとも違う物なのか。

それは分らない。が、ルナちゃんは決死の叫びで言う。

「—————生きたい！！皆と笑いあって、辛くなっても皆に助けてもらいたい！！」

皆が辛くなったら、私が助けてあげたい！！！」

そこに居たのは、戦争を止める集まりのリーダーじゃない。

仲間に不安を見せないために、皆を纏める為に自分を偽っていた1人の少女。

ルナ・ガイアウオーカーという名の、か弱い少女。

「そうだろう？ルナちゃんは生きたい筈だ。

だったら生きよう？ルナちゃんが犠牲になる事なんて無い。

オレで良ければ、力を貸すから、さ？」

「うん・・・」

・・・あれ？今思ったけど、ルナちゃんってこんなキャラ？

まあ、そういう見せ掛けだったんだろう。

精一杯虚勢を張ってたんだろうな・・・

「で、どうしよう？」

「へ？」

「いや、オレ何とかしたいとは思ってたけど、

どうすればいいのか分からないんですけど・・・」

・・・べ、別に何も考えていないわけじゃないんだからね！？

『（気持ち悪！）』

「（言うなあああ！！ってか、居たのかああ！？）」

『（居たわああ！！！空気読んで出てこなかったんだよおおお！！！？？）』

シリアス空気ぶち壊し。

「ふ、ふふっ。」

お？ルナさん笑ってる。

「ああゆうのは考えてからいいなよ？」

あと、もう今更堅苦しい言葉は使わなくていいって。」

と、随分と朗らかな言葉でオレに言うルナちゃん。

よかった・・・オレの心の声とか、どっかの神の助手との会話を聞いていたわけじゃないのか・・・

「そうか？じゃあありがたくそうさせてもらおうかな。」

「・・・なんか、キミを見てると、あの人を思い出すよ。」

知ってる？オガミケンイチって人の事。」

ブフウウウウ！！！！

「えっと・・・（どうする！？ビビ！？）」

『（知るか！自分で考えろ！）』

よほど忘れられていたのがショックだったんだろうか・・・

「うーん・・・知ってる・・・かな？」

そう言ったとたん、ルナちゃんの目が変わる。

「本当に！？いつ！？どこで知ったの！？」

「えっと・・・そのう・・・」

ま、前に、山を消した事があるって言ったじゃん？

で、逃げる時に、手伝ってもらったんだ・・・よ？」

かなり曖昧だけど・・・さすがに信じては・・・

「そうなんだ！さすがケンイチね！」

もらえちゃったよ！？ってか、さっきまでのルナちゃんのキャラが
違いすぎる・・・

もしかして、二重人格・・・とか？

「じゃ、じゃあ何時かケンイチと会えるかなあ・・・」

「た、たぶん会えるよ。あの人めっちゃ強いし、

ルナちゃんのこともしっかりと覚えていたから。」

「本当に！？よくし！頑張ってるううう！！！」

・・・何か知らんけど、すごいやる気になっているから・・・いいの、かな？

剣一 side out

外見と中身が合わないのはよくある事だ．．．．．と思う。
(後書き)

まさかのルナさん．．．．

まあ、実はこんなキャラでしたゝみたいな感じで。

16歳ですし、これでもいいかなゝって。

では、また次回もよろしくお願いします！

慎重に動かないと作戦は失敗する。(前書き)

いよいよ、ルナの作戦決行です。

慎重に動かないと作戦は失敗する。

ルナside

「皆、ついに作戦決行の当日だ。いろいろあったが、

それも今日で終わる。今日で全てを終わらせる。」

作戦当日。この作戦で全てが決まる。

失敗すれば、戦争は起こり、多くの罪もない人々が命を落とすハメになる。

成功すれば、戦争は起こらず、大勢の命が助かる。私の命と引き換えに……

エドは、「オレに任せておけば大丈夫!」と言っていたが、

どんな策があるのか、聞かせてはもらえなかった。

とりあえず、私は今できる事を精一杯やるだけ。

……え? キャラが元に戻ってる?

う、うるさい——! 皆の前だからこういう風になっているだけだ!

ルナside out

剣一 side

とうとう作戦当日。全ての準備は整った。

後は時期を見るだけ。

……あの可能性だけは否定したいがな。

回想開始

ルナちゃんとの会話を終えたオレは、人目のつかない所に行き、ビビと話す。

「……なあ、ビビ。これってわざわざ口で話す必要はないか？」

『この方がオレも楽なんだよ。……で、さっきの話だが。』

「ああ。どんな方法でナルダン国は兵や王族に戦争をさせるのか……って話だな。」

『もっと具体的に言うと、どうやって国の軍や上層部に、

戦争の事を口外させないようにするか、だな。』

「さっきも言ったが、国の権力者……王族や上層部が口外しないように

かなりの圧力をかけているんじゃないのか？」

オレはそうだと思ったんだが……

『それも確かに有効な手段には違いない。が、どうしても人の口に戸は立てられない。』

少なくとも、ナルダン国内での噂程度にはなっているはず。

そして、ルナちゃん達のようにそれに抗おうとする奴らだっているはずだ。』

それはそうだな……誰だって、自分達が戦争に巻き込まれる可能性が

あるのに、それを黙って見過ごすなんて出来ないはず。

「じゃあ、どうやってそんな事しているんだ？」

『簡単だ……洗脳だよ。』

洗脳！？確かにそうすれば、絶対に口を割る事は無いだろう。

「でも、誰が、どうやって……！まさか、魔王の連中が！？」
『そう考えるのが妥当だろう。アイツ等は人間の死がお望みだからな。』

くっそ……魔王の完全復活なんて、絶対させてたまるか！！

回想終了

「……ん！エドさん！」

「ん、へっ！？あ、アスカさん……？」

オレがあの中の時の回想をしていると、目の前にアスカさんがいた。

「さっきからずっと呼びかけていたんですよ？」

そんなに思い耽っていたのか……

「すみません、ちょっと緊張しちゃって。」

「わかりますよ……でも、いざって時に動けないのはやめてく

ださいね？」

「大丈夫です。もう行くんですか？」

「はい。A隊は先に行かなければならないですから。」

そうか、じゃあ行くとしますか！

剣一 side out

アスカ side

出発して2時間。

ナルダン国に入る。アスラローサ国とナルダン国は接しているため、距離は意外と近い。

「ナルダン国軍、魔術用特別講師のアスカ・サテライアです。」

リオン王子護衛隊の紹介につき参りました。」

「了解しました。どうぞ城内へ。」

そう言われ、城門が開く。

・・・心なしか、門番の目に光が点っていなかったような・・・？

まあ、気のせいでしょうね。

そして、私達は城の大臣の部屋に入る。

「アスカ様。ようこそお越しくださいました。本日はどういったご用件で・・・？」

「以前申し上げておりました、リオン王子の護衛隊の件でございます。」

「ああ！あのアスカ様ご推薦の！ひょっとして、そちらの方々が？」

「ええ。私が誇る最高の隊です。」

大臣は後ろにいる、ルナさん、エドさんを含めた5人の方を向く。

「中には若干経験の浅いような者もおるようですが・・・？」

「でも強さは本物です。リオン王子の身柄は間違いなく安全でしょう。」

「そうですか？なら、ナルダン国が誇る名魔術師のアスカ様のお言葉を信じるとしましょう。」

くっ、イヤミったらしい！要するに「自分に責任は無いぞ」って事でしょう！？」

嘘とはいえ、ここまで自分の言う事をバカにされた様な言い方されれば腹が立つわ！

「では、私達は只今から、リオン王子の護衛隊の任務に就かせていただきます。」

「ええ。せいぜい期待させていただきましょう。」

心の中の怒りを抑えながら、その部屋を出る。

見てなさい！その顔を驚愕に染めてあげます！

アスカ side out

??? side

ふっ、護衛隊など要らぬと言うのに……

まあ、手駒は多い方が使えるから良しとするか。

後でじっくり私の洗脳術にかけてあげるとしよう。

しかし、あの少年は他の者と目つきが違った。

もしや私のやっている事に気づいて……

……いや、そんなはずは無い。

他人に気づかれるようなへまはしない。

おそらく私の勘違いだろう。

とりあえず、あの者達の洗脳の準備をしますか……

??? side out

剣 side

「(ビビ、もしかすると……)」

『(オレの予想通りかもな……あの大臣から邪悪な魔力が感じられた。)』

オレ達は大臣の部屋を後にし、リオン王子の部屋へ向かう途中だ。

そして、その間ビビと話をする事にした。

内容は勿論ついさっき会ったばかりのあの大臣の事だ。

「(じゃあ、あの大臣による洗脳か……でも、

どうしてリオン王子は監禁されているんだ？」

『（ひょっとすると、リオン王子は洗脳が効かない体質なのかもな・・・）』

そんな事であるのかよ・・・

「（でも、魔王に仕える奴なんだろう？効かないなんて事あるのか？）」

『（仕えている＝強い奴、とは限らないだろう？

弱い奴が、自分より弱いものを使って魔王に奉仕しているに過ぎない。）』

「（じゃあ、あの場でさっさとケリつければ・・・！）」

『（そんな事しても、洗脳が解けるかどうか分からない。

それに、アイツがどの程度の強さかは分からないだろう？いくら弱い奴としても。）』

そうか・・・じゃあ時期を見るしかないという事か・・・

『（とりあえず、リオン王子の誘拐に成功したら、

大臣と戦う事になるだろう。）』

「（そうだな、その辺りになるか・・・）」

よっし！久々に暴れるか！

「着きました。ここがリオン王子の部屋です。」

つと、話しているうちに着いたようだな。

「今日からリオン王子の護衛を承る、アスカ・サテライアです。」

「了解しました。では。」

そう言って、門番は去っていく。

反応が薄いところを見ると、やっぱり洗脳か・・・

コンコン

アスカさんがドアを叩き、

「アスカ・サテライアです。リオン王子？いらっしゃいますか？」

と言うと、ドアの向こうから、

「アスカさん！？ど、どうぞ！」

と返ってきた。やっぱり知り合いなんだ・・・

「失礼します。お久しぶりですね、リオン様。」

「お久しぶりです！お元気でしたか？」

「ええ。リオン様こそ、お元気そうで何よりです。」

ふむ・・・この様子を見る限り、よほど仲が良かったんだな・・・

魔術でも教えていたのだろうか？

「はい！・・・あの、そちらの方々は？」

「今日から、リオン様の護衛を承りました者です。」

「そうですか・・・アスカさんですか？」

「ええ。よろしく願います。」

「こちらこそ・・・」

先ほどとは打って変わって悲しそうな表情を浮かべるリオン王子。

何でだ・・・？

「では、私達は廊下で護衛しておりますようか。」

お2人とも、積もる話もある事でしょうし。」

とルナさんが言い、オレ達5人は部屋を出る事にした。

あのリオン王子の表情は何だったのだろうか・・・

剣一 side out

慎重に動かないと作戦は失敗する。（後書き）

次回はバトルするかも・・・？
お楽しみに。

あの、活動報告にも書きましたが、
感想をいただけると、幸いです。
正直、この小説がちゃんと書けているのか不安で仕方ありません。
よろしく願います。

主人公はボス戦なら間違い無く本気になる。(前書き)

雷龍さんから感想をいただきました。ありがとうございます。

これから、よろしくお願いいたします。

まだまだ感想をお待ちしております。

・・・本当にお待ちしております。

主人公はボス戦なら間違い無く本気になる。

剣一 side

廊下に出たオレ、ルナちゃん、あと、ゲイルさんとイリスさんとシエカーさん。

オレは、いやオレ達はB隊の到着を待つ。

と言っても、到着予定の時間まで、おそらくあと6時間はある。

「(ヒマだなあ・・・ビビ、軽く話でもしてるか?)」

『(そうだな・・・いや、どうやらそういう訳にはいかないらしいぜ?)』

なに・・・?

「皆さん、廊下に出ているのでしたら私の部屋で少しばかりお話でもしませんか?

ちょうど良い紅茶とお茶菓子もありますので。」

オレ達の所にさっきの大臣がやって来た。

「せっかくですが、任務の途中ですので。」

ルナちゃんがきっぱりと断る。

「そうですか・・・ならば、交代で見張りをなさっては？」

1人2人での交代をして見張れば、長い時間見張る事が出来ますよ？」

「いえ、そういう訳n「分かりました。ならまずオレが。」え、エド!？」

「（なあ、この機会にやつを潰すのはどうだ？）」

『（そうだな・・・まあ、潰すなら早い方が良いか。）』

「（じゃ、行くか。）オレ、紅茶には目がないんですよ。」

宜しければ、ご一緒させてもらって良いですかね？」

オレは大臣にそう告げると、他のメンバーから睨まれた。

「そうですか、ならまずは・・・エド様でよろしかったですかね？」

「ええ。お願いします。」

オレは大臣に連れられ、部屋へと向かった。

剣一 side out

ルナside

何のつもりだエドは!!

この作戦が失敗に終わるかもしれないというのに……

「あいつ、結局ただの変わり者ってことでしょう。」

ま、所詮素人の気合いなんてこんなもんですよ。」

隣でシェカーが言い放つ。

そういえば、シェカーだけはエドに良いイメージを持っていなかったな。

ゲイルもイリスも「どうしてこんな事を」と言った表情で困惑している。

「（エドがこんな事する筈無い……なら何か考えが？）」

しばらく考えていたが、答えが出ない。

「……とりあえず、エドの事は後回しだ。私達は作戦に集中しよう。」

皆が私の言葉に頷く。

エド……後で必ず問い詰めてやる！

ルナsideout

剣一side

大臣の部屋に入り、立ったまま待つ。

さっきも見たけど、大臣の部屋、結構広いな。ここなら戦えそうだ・
・・・!

紅茶を入れている大臣にオレは思い切って言う事にした。

「で、貴方はオレに何をしたいのですか？」

「何を・・・とは？私はただ、護衛隊の皆さまに休んでいただきたいだけで・・・」

「ほお、王子の護衛より、オレ達の休息を優先していただけるとは、

それはそれは素晴らしき大臣様ですねえ。」

その言葉に、大臣の表情が固くなる。

「・・・何を仰りたいのですかな？」

「じゃあ単刀直入に言わせて貰う。この城の人達の洗脳を解け。」

「洗脳？ いったい何の・・・」

「とぼけるな。お前、魔王の手下だろ？」

そんな邪悪な魔力を剥き出しにしている所を見ると、かなり弱いようだな。」

そう言うと、大臣・・・いや、魔王の手下の表情が邪悪な笑みに変わる。

「・・・まさか、アスラローサ国の血筋以外に

私の事を見破る奴がいるとは思わなかったですね。

がしかし、弱いとは聞き捨てならなりません。」

「ふん、大体見た目からして上に媚びるような感じがするんだよ。

そんなやつが強い訳ないだろ？

お前が戦争を起こそうとした理由は2つ。1つは魔王への命の貢物。

そしてもう1つは、魔王唯一の天敵、アスラローサ国の王族の捕縛、もしくは殺害だな？」

手下を指差し、そう言うオレ。

すると不適に笑いながら、

「ええそうです。そうすれば私は魔の王に仕える四皇徒に入れるのですか

ら！」

クアトロ・ジェネラル
魔の王に仕える四皇徒？そんなのがあるのか・・・

「で、お前潰すけど良いよね？答えは聞いてない！」

決め台詞を言う。え？聞いた事あるって？

き、気のせいじゃないかな？・・・たぶん。

「貴方に私が潰せるかなあああ！！！」

と魔力弾を撃ってきた。

はあ・・・単純すぎる。

カキン

オレは四次元ポケットから剣を取り出しはじき返す。

ドッカーン

あ、壁に当てちゃった。

「なかなかやるようですね。これは私も本当の姿でいかないとやられてしまいそうだ。」

そう言うと、大臣の姿が歪み始め、姿が変わる。

イメージは・・・Fate／stay nightの佐々木小次郎のような感じだな。

って、そんな事言ってる場合じゃないや。

「さて、これを見ても、貴方は私を潰せるかな？」

「生憎、もっと強い人と毎日戦ってたし、もっと姿が気持ち悪いのとも戦ったんでね！」

「ほう、ぜひとも会ってみたいものですね。」

「無理だな。だって・・・お前はここで潰れるんだからな！」

オレは剣を構え、相手に向かって走る。

「では私も剣で行きましょうかね。」

そう言って、手下は魔力を集め、剣状にする。

カキン

剣同士がぶつかり合う。

「ふーん、お前、剣が一番得意そうだな。」

「そうです。そして、それは貴方も同じでは？」

「その通り・・・だ！」

鏑迫り合いから離れ、距離を取り、再び向かっていく。

激しい剣のぶつかり合い。

「悪いな。さっき弱いやつて言ったのは訂正する。」

お前の剣の強さはなかなかだ！」

「お褒めいただきどう、も！」

剣を振ってくる。

「だが——」

オレはそれを弾き、

「オレはその上を行くんだよ!!」

思いつき切りかかる。

「ぐっ!!」

手下は床を転げる。

「だが、1つ解せない。そんなにも強いのに、なぜ自分自身の力でさっき言った……魔の王に仕える四皇徒ってのに入ろうとしない?」

「くっ……今回の件は上からの命令でしてね。さっきの大臣の姿も演技でしたよ。」

魔の王に仕える四皇徒は、私の憧れでしたからね。
クアトロ・ジェネラル

どうしても入りたかったのですよ。」

立ちながらそういう手下。

ふーん。夢の為なら手段は選ばないって事か。

「でも、今は違いますね。」

「違う?」

「私は久しぶりに胸躍っています。まさか人間に、

私以上の剣の実力者がいると思いませんでしたから。

そんな人間との死合いを前にして、魔の王に仕える四皇徒など、

クアトロ・ジェネラル

今はどうでも良くなりましたね。まあ、作戦は命令なので、実行はしますが。」

「残念だったが、オレより強い人間が少なくとも1人はいるぜ？

そして、お前等の計画も絶対潰す！」

お互いが睨み合い、そして、

ダッ

走り出す・・・

そこから、すれ違いざまに、

ザン

斬り合う。

「やはり、上には上がいるのですね……」

そう言いながら、手下は倒れた。

「ふう、何とか勝ったな。」

オレが勝利の余韻に浸っていると、

『おい剣一！お前バカか！』

と怒鳴られた。なじえに？

『倒してどうすんだよ！洗脳解かねえと！』

え？……ああ！

「そうか！解いてもらわないと！」

と、手下の方を振り向くと、砂のように消え始めていた。

「おい！頼むから洗脳解いてから逝ってくれえええ！！！！」

肩を揺らしながらそう叫ぶと、手下が軽く微笑みながら、

「ふっ……大丈夫です。私が死ねば自然と解けます。」

なんだ・・・じゃあ別に無理して起こす必要なかったじゃんか。

「そ、そうか。じゃあ逝って来い！」

『お前酷いな・・・』

ふん！用事が無けりゃ、敵だった奴に興味は無い！が・・・

「・・・お前、名前は？」

「死に往く者の名前を知りたいのですか？」

「気になったからだよ。オレはエドって名乗ってるが、

本当は御神剣一って言うんだ。」

「そうですか・・・私はレオ。レオという名です。」

レオ・・・か・・・

「じゃあな、来世で会えたら会おうぜ。」

「ああ・・・その時はまた死合いましょう・・・」

そう言い残し、手下、いやレオは消えていった。

さて、そろそろ戻りますか。

「おいエド！無事か！？」

・・・と思ったら、ルナちゃん達来ちゃったよ。ってか、遅くね？

剣一 side out

主人公はボス戦なら間違い無く本気になる。(後書き)

ボス戦あっさり。

やっぱ主人公チートですね。

まだチートっぷりは発揮させたいなあと考えております。
それでは、また次回。

自分のやってあげた事が相手にとって嬉しい事とは限らない。(前書き)

テストが終わった〜!!!

これで、少しは落ち着いて書くことができます!

では、スタートです!

自分のやってあげた事が相手にとって嬉しい事とは限らない。

ルナside

爆発音が聞こえ、私達は大臣の部屋に向かった。

・・・途中少しだけ迷ったが。

ち、違う！私は方向音痴じゃない！

ただ、この城が少し広いだけだ！

コホン！そして、大臣の部屋に着くと、そこには

グチャグチャになった家具等と、

終わった〜、というような空気を醸し出しているエドがいた。

「おいエド！無事か！？」

ゲイルがそう言う。

「ええ。もう大丈夫です。全て解決しました。」

「解決？」

「はい。あの大臣が全ての元凶だったんです。」

実は・・・

私達はエドの説明を聞いた。

戦争を仕掛けさせようとしたのは大臣だという事。

城の者達が洗脳にかけられていた事。

あの大臣が魔王の手下であった事。

その大臣をエドが倒した事により、洗脳が解けたという事。

・・・というわけです。」

「そうだったのか・・・ってことは、」

「ええ。王子を誘拐する必要はありません。」

その言葉を聞いて、私はほっとした。

任せておけば大丈夫！っていうのはこういう事か・・・

「さて、説明も終わりましたし、行きましょうか。」

「？何処へだ？」

「洗脳されていた人の無事の確認。」

そして、王族や他の大臣の方々を説明をしに。

あ、あとこの場にいないアスカさんにも伝えに行かないと。」

なるほど・・・それもそうか。

「わかった。アスカには私が伝えよう。イリスはB隊の皆に

作戦中止とその説明、そして城内部の無事な者の確認に向かわせるように言ってくれ。

他の者はエドと一緒にナルダン王やその親族、大臣等の無事の確認と説明に向かってくれ。

私もアスカとリオン王子と共に後で向かう。」

「」「はい!」「」

ルナside out

剣一side

「お前、いつから城の者が洗脳にかかっていると気が付いたんだ?」
向かっている途中、ゲイルさんが聞いてきた。

どうしよう・・・何か言い訳考えないと・・・

「えっと・・・そう！オレ、そういうのに敏感な体質なんですよ！

なんか邪悪な感じの物に！それで、あの大臣から一番そんな気を感じたので、

あの誘いに乗ったんですよ。」

大丈夫か・・・これで・・・？

「そうか。それは凄いな。」

信じてもらえたみたいだ。よかった・・・

「じゃあ、どうして俺達に言わなかったんだよ？」

とシェカーさん。

「こいつ、お前がビビッたかなんかして

サボろうとしたんじゃないかって思ってたんだぜ？」

「え？そうだったんですか？」

「・・・ああ。」

そんな風に思われてたのか・・・Orz

「そんな事しません。オレだってルナさんについて行くと決めたんです」

それに、オレだっていくつかの修羅場は経験しているつもりです。今更、ビビりなんてしませんよ。」

「わかってる。ただコイツ、お前がアスカさんを

倒した事が気に入らなかったただけなんだよ。」

「なっ!？」

「そうなんですか？」

オレはシェカーさんに訊ねてみる。

「ち、違、俺は——」

「コイツ、アスカさんに一目惚れでさ。」

強く優しいアスカさんに憧れていたんだよ。

でも、お前がアスカさんを易々と倒してただろう？

それに対して勝手に腹を立てていたんだ。」

「へえ……そうなんですか……（ニヤリ）」

「うっ! な、なんだその意味ありげな顔は!」

「それはもうねえ？ エドさん？」

「そうですよねーゲイルさん？」

ガシッ

ゲイルさんと固い握手を交わす。

2人の気持ちは1つ。

こういう話大好き！

「ひ、人の恋路をからかうな！」

「「あ、やっぱり惚れてるんだ。」」

「っくくく！！！！さっさと行くぞ！！！」

そう言ってシェカーさんはさくさくと歩き出してしまった。

からかいすぎたかな？ 後で謝っておこう。

そして、作業が無事終了。

かかっていたのは洗脳だけなので、誰も負傷者等はいなかった。

ナルダン国王は、国を救ってくれたお礼としてかなり高額なお金を渡そうとしたが、

ルナちゃんが断った。

理由は、営利目的でやったのではないという事から。

それと、解決したのはオレだとも言っていた。

そもそも戦争を止めようとしたのはルナちゃん、

オレはそれに乗っただけなのだから、

結局はルナちゃんのおかげだと思っただけど・・・

こういうのはやはり本人の問題なんだろうか・・・

そして、アスカさんの家に帰ったオレ達は、

作戦成功(?)の祝賀会をあげていた。

皆、最初は静かだったが、酒が入ったとたん、どんちゃん騒ぎに。

オレもそれに乗っていた。

酒が意外と強いオレは、皆と一緒に騒いでいた。

「俺達の救世主、エドワード・エルリックにカンパニー!!」

「「「カンパニー!!」」」

「ちょ、恥ずかしいですって!!」

「いいんだいいんだ事実なんだから! お前のおかげで

俺達は罪悪感に駆られなくて済んだんだからよ!」

オレはその言葉に、少し心の引っ掛かりを感じた。

なんなんだ・・・? これは・・・

そして、全体の熱気が下降気味に入り始めた辺りで、

「・・・? 何だ?」

ルナちゃんが外に出て行ったのが分かった。

オレはそれについていく事にした。

「えっと・・・あ、いた。」

少し家から離れたところに川があった。

そこに、足を入れて、月を見ているルナちゃんがいた。

「ルナちゃん？」

「・・・エド。」

どうしたの？と聞こうとした時、

「エド、私がやってきた事っていったいなんだろう？」

「え？」

「もちろん、エドがやった事を否定するわけじゃない。

でも、エドがいれば、作戦はいらなかったんじゃないかって・・・」

オレはその言葉に黙る。

確かに、今考えるとオレの行為は、ルナちゃん達のやってきた事を全部ふいにする事だった……

さっき感じた心の引っ掛かりはこれか……

「……そんな事無いよ……だってルナちゃんがいなければ、

アスカさんや、オレ、ゲイルさんにイリスさん、シェカーさんも、

他の皆も、出会う事も無ければ、一緒に戦うことも「そうじゃない！」……え？」

「私は……今まで何をしていたのか、分からなくなってしまった……」

ルナちゃんはいつもの堅苦しい言葉使いに戻ってしまった。

「……すまない。これじゃあ私は、

お前のやった事を恨んでいるような物だな……」

「……いや、それは当たり前だよ。他の人に手柄を取られたんだから……」

「お前がやった事は正しい。だから、お前が気に病むことじゃない。

だが……すまないが、しばらく1人にしてくれないか？」

オレにそれを断る権利は無い……

「……………わかった。アスカさんの家に今日は皆泊まるみたいだから。」

オレも泊まらせてもらう。……………それともう1つ。」

「……………なんだ？」

オレはこの罪悪感で倒れそうになるのをこらえながら言う。

「こんな事言う資格は無いのかもしれないけど、言わせてもらう。」

オレは、ルナちゃんやアスカさん、他の皆と出会えた事を嬉しく思うし、

そう思わせてくれたルナちゃんには感謝してる。

やってきた事は、分からなくなったのかもしれないけど、

少なくとも、そうオレに思わせてくれたルナちゃんのやってきた事は

無駄じゃないと思う……………」

「……………」

「じゃあ、オレは戻る。風邪引かないように。」

オレはアスカさんの家へと歩き出した。

自分のやった事に対する罪悪感と、立ち直って欲しいという心配の
気持ちを持ちながら。

剣一 s i d e o u t

自分のやってあげた事が相手にとって嬉しい事とは限らない。(後書き)

感想、お待ちしております。

ドッキリにしても何にしてもバラす時には殴られる覚悟をしよう。(前書き)

やっぱ他の作者様たちの作品は凄いですね。

いろいろ読みましたけど、

どうしてこんなに書けるのか疑問に思いましたよ！

僕もあんな風に書ければなあ・・・

では、スタートです！

ドッキリにしても何にしてもバラす時には殴られる覚悟をしよう。

剣一 side

オレが家に戻ると、みんな既に寝てしまっていた。

・・・酒ビンを持って。

「どうするか・・・このままだと風邪を引くな。」

とりあえずオレはアスカさんの家の部屋全てから毛布を持ってくる事にした。

ちなみに、ビビも寝ていた。

「ふう、これで全部か。」

家中の毛布を探して持ってきた。

後でアスカさんに説明しておこう。

1人1人に毛布をかけてあげる。

「エドさん？」

突然声をかけられ、後ろを振り向くとそこにアスカさんがいた。

いつの間に・・・？

「いったいどうしたんですか？あ、もしかして起こしました？」

「いえ、外の空気を吸っていました。それで今帰ってきたんです。」

「あ、そうだったんですか。」

「エドさんは今何をなさっているのですか？」

「皆に毛布をかけてあげようと思って、家中からかき集めました。」

「すみません、勝手な事して。」

オレは頭を下げ、謝った。

「いえ。私でもそうだと思いますから、大丈夫ですよ。」

「そう言ってもらえると助かります。」

「私も手伝いますね。」

そう言って毛布をオレのところから持ち去るアスカさん。

「すみません。お願いします。」

「いえいえ。・・・あ、そうだ。」

「1つお願いしても良いですか？」

「え？何ですか？」

「・・・ルナさんの事です。」

その言葉に、オレは少し気分が暗くなる。

ルナちゃんは今あんな状態なのに・・・

「あの人、いえ、あの子は人前だと虚勢を張って、

強い風に装っているんです。」

「・・・わかります。」

現にあの子はオレ1人の前ではいつもの姿ではなく、

何処にでも居そうな普通の女の子だった。

「あの子には、以前目標としていた人が居たそうです。」

何でも、「その人と共に冒険したい」と。」

ん？それって……

「もしかして、その人が御神剣一……」

「既に軽く話は聞いていたようですね。そうです。

しかし、その人は10年前から行方不明で、

それでも、冒険を続けていればいずれ会えると信じて、

今まで過ごしてきたんです。」

そこまでオレの事を想っていてくれたのか……

「でも、何も情報は手に入らず、今回の事もあり

あの子はとても精神的に病んでいました。

それでも、自分を押し込み、周りの為に尽くしてきました。」

悲しげな表情を浮かべながら話すアスカさん。

「しかし、エドさんにより、作戦は失敗でも成功でもなくなってしまうった。

もちろん、これは最高のハッピーエンドと言えるでしょう。

でもルナさんは納得しきれなかった。自分のやった事が、

自分を押し込み、尽くしてきた事がふいになり、

なおかつ自分でも出来なかった最高の終わり方を来たばかりの人が成し遂げてしまった。」

「……でもルナさんはまだ自分を押し込み、

オレを恨んだりなどせず、自分で苦しんでいる。」

この気持ちは、オレには分からないだろう。

でも、とても苦しんでいる事だけは分かる。

「お願いします。ルナさんを立ち直らせてください。」

私は、あんなルナさんは見てられません。」

「……川に居たルナさんを見てきたんですね。」

「はい……」

通りでルナさんが悩んでいる事を知っていたわけだ。

正直、この悩みは時が経てば解決すると思う。

だが、このままだと間違い無く同じ事を繰り返してしまう。

「でも、オレじゃ立ち直させる事は無理でした。

それに、オレにそんな事を言う資格は……」

「いえ、立ち直させる事が出来るのはエドさんだけです。

現に、エドさんの前では本来の自分をさらけだしてました。」

「！知ってたんですか……」

「ルナさんが楽しそうに話していました。

あんな表情、私の前でもしませんでしたよ。

それまでは私もあんなルナさんだとは思いませんでしたし。」

ルナちゃんのあの性格はオレの前だけだったのか……

「お願いします。」

アスカさんに頭を下げられる。

「……わかりました。もう1度頑張ってみます。」

「！ありがとうございます！ルナさんはさっきと同じ、川にいます。

」

「わかりました。じゃあ、行ってきます！」

オレはそう言い、家を出る。

「頼みましたよ、御神劍一さん。」

アスカさんが何かを呟いていたが、オレには聞こえなかった。

家を出て数分。さっきと同じ場所にルナちゃんはいた。

「・・・1人にしてくれと言った筈だが？」

ルナちゃんはオレの存在に気づいたようだ。

「でも・・・そんな状態のルナちゃんは見てられない・・・」

「ふっ、つくづくお前には助けられるようだな。」

自嘲気味に笑うルナちゃん。

くっ、頑張ると言ったのに、かけてあげるべき言葉が見つからねえ・

数秒ほど沈黙が続き、ルナちゃんが再び口を開く。

「なあエド。お前は どうしてそんなに強いんだ？

アスカを倒し、城の者達の洗脳に気づき、その元凶を叩く。

そんな力をそこで手に入れたんだ？」

「それは・・・努力と良い師匠に出会っただけだ・・・」

「ならば、私には努力が足りず、良い師にも恵まれなかったという事か・・・」

どうすればいい・・・どんな言葉をかけてあげれば・・・！

「そんな・・・ことない・・・ルナちゃんはずっと頑張っていた。

少なくとも、アスカさんは見ていた。

良い師匠だって・・・」

「・・・私の育った村は、この川の上流沿いにある。

その村には、私の師とも言える父親がいた。」

急にそんな事を言い出したルナちゃん。

「その父親は、まだ幼い私に様々な事を教えてくれた。

生活に必要な事、戦い方、人との関わり方など。

でも、その父親は、4年前に行方知らずになった。

旅に出たつきり・・・帰ってこない。」

おそらく、父親、そしてオレ・・・御神剣一がどちらとも

自分の許から離れていってしまったから、自分に師匠はいない、という事だろう。

でも、そんなの・・・

「・・・・ルナちゃん。最初に言っとく、ごめん。」

「え?」

オレはルナちゃんの頬に向かって手を叩いてしまった。

「っ！」

「そんなの・・・ただの甘えじゃないか・・・！」

自分の出来なかった事を、尤もな理由をつけて否定しているだけだ・・・」

頬を叩いてしまった・・・でも、そうでもしなくちゃ、分かってくれない。

「ルナちゃんは、自分の限界を理解しようともせず、

勝手に限界を決め付けて、その限界に届かなかったからって、

その理想に届かなかったからって、1人で勝手に反省し、勝手に理解し、

勝手に落ち込んでいるだけ。」

「・・・」

「1人で超えられない限界なら、みんなで超えれば良い。

1人で得る事が出来ない理想なら、みんなで得れば良い。

その為に、オレやアスカさん、他の皆も集まったんだから……

」

「でも……」

こうなったら……やるしかない。

「ルナちゃん、これを見て。」

オレは大きな木の前に立ち、

「ブレイズアッパー火炎昇拳！はああああ！！！！」

技をやって見せた。

「え？……それは……！」

そう、10年前にも見せた、ブレイズアッパー火炎昇拳。

これを見せるという事は、すなわち、

「これで、オレの正体、分かったかい？」

オレが御神剣一である事をバラすという事だ。

「ま、まさか……ケンイチ……？」

言葉使いが元に戻っている。まあ、そんな事はいいか。

「ああ。そうだよルナちゃん。正真正銘の御神剣一さ。」

「本当に・・・？」

むっ、これでもまだダメか・・・なら、

「ルナちゃんは、10年前にお母さんと逸れた。」

その時に出会ったんだよね。オレ達は。」

「な、何でその事を・・・じゃあやっぱり・・・」

「その時に泣いてたルナちゃん可愛かったなあ？」

うんうん、無垢な少女って感じで！あ、オレロリコンじゃないよ？

「・・・な・・・！」

「え？何？聞こえないよ？」

オレは耳を近づける。

「ふざけるなああああああ！！！！！！！！！！」

「ゴフウウウウ！！！！」

なんと見事なアッパーカット。

オレは綺麗に吹っ飛ばされた。

ふっ、世界を狙えるぜその右手。

「ってか、ダメージデカすぎ・・・まさか、これがギャグ補正・・・！」

オレは気絶しそうになり、倒れる。

が、衝撃はいつまで経っても来ず、

代わりに柔らかいような感触がある。

「・・・心配させたんだから、そのくらいは当然だと思う。」

そう、つまりはオレはルナちゃんに抱きしめられている。

「・・・ごめん。まさか、そこまでオレの事を

想ってくれているって思わなかったから。」

1回の出会いが人を変えるという事は、

聞いたことはあっても、それを自分で体感する事はなかなか無いと思う。

ましてや、自分が変えさせたのなら尚更。

オレはルナちゃんと自分の体を離し、正面から話しかける。

「で、さっきの話に戻すけど、君の事は周りが分かってくれている。

だから、あんな風に落ち込んでいると、気になってしまうんだ。

それでも納得いかないなら、またやり直せば良い。

その考えに、皆が付いて行かなくても、オレは付いて行くからさ。

」

「エド・・・いや、ケンイチ・・・」

「さっきも言ったけど、皆、勿論オレも含めて、

ルナちゃんには感謝してるんだ。

だから、やった事は無駄なんかじゃない。

自信を持って・・・いいんだよ？」

今度はオレから抱きしめる。

恥ずかしいけど、ここは我慢！

「ありがとう・・・ケンイチ・・・」

もうしばらく、この体勢でいる事にしよう。

お互いにそう思ったらしく、10分ほど互いに抱き合っていた。

剣一 side out

ドッキリにしても何にしてもバラす時には殴られる覚悟をしよう。(後書き)

主人公殴られました。

ま当然ですよね。

それでは、また次回。

一難去ってまた・・・難か？（前書き）

ようやく復活できました！

本当に読者の皆様にはご迷惑をおかけした事を心よりお詫び申し上げます。

詳しい詳細が知りたい方は活動報告をご覧ください。

それでは、始まります。

一難去ってまた一・・・難か？

ルナside

ついケンイチに抱きしめられちゃった。

10年の間、ずっと会いたかった人であり、

もう半ば再び会うのを諦めかけていた人。

出会えた喜びと、心配させた怒りが合わさって変な気持ちになったけど、

それでも、喜びの気持ちの方が大きかったようで、

こんな事をされても、全然拒もうと思わない。

むしろ、もっとこの人の温もりを感じていたかった。

そろそろ放してもらおうかとも思ったけど、

でも、もうちょっと・・・このまま・・・

ルナside out

剣一 side

・・・そろそろ離そうかな？

さすがにずっとこのままって訳にはいかないし。

「ルナちゃん、そろそろいいかな？」

「あ、うん、ごめん。」

そう言って離れるルナちゃん。

「とりあえず・・・帰ろうか？」

「うん。」

「そうですよ？風邪引くといけませんし。」

「そうだね、アスカさんの言う通・・・り？」

「え？」

オレとルナちゃんは2人して同じ方向を向く。

「？何か？」

「アスカアアアア（さああああん）！？」

い、いつの間にアスカさんが……！

「い、いつから……」

「今来たばかりですよ？」

なんだ……そうか……

「けっして、剣一さんが木に殴りかかったり、

逆に殴られたり、

お2人が熱い抱擁を交わしているところなんて見てませんよ？」

って、見てたああああ！！

殴り殴られの所はともかく、

抱き合ってたところを見られたああああ！！！！

「ア、アスカ！これは……！」

「誤魔化さなくても良いですよ？」

それと、作戦も終わったんですし、

さっきまでみたいな話し方で良いんじゃないですか？」

「うっ！」

どうやら最初から見てたようだ・・・

ってか、知らぬ間に付いて来てたのか？

「さあ、帰りましょう？もう夜遅いですし。」

「「は、はい・・・」」

若干の行き場の無い怒りと、羞恥心を感じながら、

オレ達はアスカさんの家に帰った。

「ふわああ・・・何か目え覚めちゃったな・・・」

家に帰ってすぐ寝たオレは3時間で起きてしまった。

理由？わからん。ただ起きてしまった。

「皆は・・・まだ寝てるな。」

『オレは起きてるぞ。』

「あ、ビビ起きてたのか。」

『ついさっきまで寝ていたがな。・・・で、どうすんだ？』

どうしよう・・・いっそもう出て行くか？

とりあえず、ギルドの親父さんには報告しに行かなくちゃだな。

「お久しぶりですね？剣一さん。」

と、考えていると、後ろからかなり久しぶりでありながら、

かつ、メチャクチャぶん殴りたいやつランキング上位に入っている人物の声が聞こえた。

「なんでここにいるんだ駄神！」

「駄神って・・・10年ぶりの再会ですよ？」

もつと喜んでくれても・・・」

「お前にやる喜びの感情があれば、んなもん

チェーンメールにして他人に回すわ！」

または、不幸の手紙として。

『オレだったら、ビンに入れて海へ流すね。』

うーん、それもいいかも。

「ヒ、ヒドイですね・・・」

あ、落ち込んでる。

「・・・まあそれは今は置いておこう。

で、わざわざ下界に降りてきて何の用だ？

ってか、他人に見られるかもしれないのにいいのか？」

「この区域以く外の時間の流くれを止めてまゝす。

なくので、心く配いらなくてすよく。」

まあそこら辺はさすが神様って事か・・・

「で、何の用なんだ？」

「あなたに伝えくたい事く能力のく向上をしに来ましたく。」

「能力の向上？」

「ええく。ですがく、それはく話を終えてかゝらでく。」

「そうか・・・で、話って？」

紛いなりにも神が降りてきたんだ、よほど重要な話に違いない。

「まずくあなたが持っていてくる神聖剣を出してくださいさくい。」

「神聖剣？」

そんなものあったらどうか・・・

『ライジング・カリバー
太陽の神剣じゃないのか？』

ああ・・・なるほど・・・

「これですか？」

オレはポケットから取り出す。

「はい、これです。」

「これがどうかしたんですか？」

「そうですすね、まずく、この剣の正体から話しましょうか。」

正体？

「実はくこの剣はゼウス様が使っていたく剣なのです。」

『え！？ゼウス様が！？』

「ゼウスって・・・創造神！？」

そ、そんな凄い剣だったのか！？

「正確にゝは、ゼウス様の使っていた剣の欠片で出来た剣、ですけどね。」

『そんな凄い剣だったのか・・・』

「・・・でも、なんでそんな物がここに？」

「はるか昔。神々の戦ゝいがありました。」

その際、ゼウス様もゝ剣を振るって戦っておりました。

天界でゝの争いは、3日間続き、

ゼウス様率ゝる神の軍がゝ辛くも勝利を収めまゝした。

その時に、ゼウス様のゝ剣は折れ、その欠片が様々な世界にばら撒ゝかれました。

その欠片のひとつが、その剣なのでゝす。」

なるほど・・・だから・・・

『でも、そんな凄い剣なら、誰かが悪用したりするんじゃないですか？』

「その通りでゝす。私たゝちも世界に干渉しないはゝんいで

欠片の回収をしゝてきたのでゝすが、この世界の欠片がひとつ、

ある神の手に渡ってしまったのです。」

「それって・・・魔王か？」

だから魔王が復活したとか・・・

「いゝえ、そうではありません。それと今回の神は無関係です。

ただ、この世界に潜伏しているので、知らせておくべきだと

思いまゝして、今回来了。」

ふむふむ・・・

『・・・わかりました。帰って良いですよ。』

「ええ！？ヒドくなくいですか!？」

「つてか、さっさと帰れ。」

「な!・・・はい・・・」

しょんぼりしたような表情を浮かべながら、馱神は帰っていった。

さて・・・

『・・・ゼウス様の剣の欠片か・・・』

「改めて考えると凄いな・・・」

まじまじと太陽の神剣を見ていると、

「すいませくん、能力の向上を忘れてまゝした。」

・・・馱神が戻ってきた。

「そういえばそんなこと言ってたな。で？」

「で？とは？」

「能力ががどうなるんだよ。」

「ああゝそういうことですか。」

やっぱコイツむかつく。

「前に、再現でききる能力にゝは限りがあゝる事を言いまゝしたね？」

「ああ・・・殿堂入りってやつだろ？」

そのせいで一方通行や幻想殺し、

ヤミヤミの実の能力など、強すぎる能力は再現不可となっていた。

まあもつとも、今使ってるほとんどの能力も

ビビがいなければ再現できないんだが。

「なゝので、そのリミッターを少ゝしだけ解除しようと思うので

す。」

「一方通行とか使えるのか？」

「それはまゝだダメです。強すぎまゝす。」

なんだよ・・・なら別に――

「でも、未元物質ダークマターなら出来まゝすよ？」

「ってそれは出来んのかよ!？」

「他にも、ヤミヤミの実はダメですけど、

古代種や幻獣種ぐらいなら大丈夫ですよ？」

マジでか!？っていうか・・・

「なんでお前がそういうのを知ってるんだ!？」

最初の時はスルーしてたけど、ここまで知っているとは・・・

「あとは、無限の剣製やアンリミテッドワークス

エクスカリバー
約束されし勝利の剣は無理ですけど、

ゲート・オブ・バビロン
王の財宝や

ルールブレイカー
破戒すべき全ての符ぐらいなゝら再現できまゝすよ?。」

な、なんだコイツ……

ビビなんか『?』（表情は見えないけど）な状態だぞ!?

「なんでそんなに知ってんだ!？」

「神はく世界のすくべてを知っていなければなりまうせんからく。

」

な、なるほど……

「じゃ、じゃあ、早くやってくれ。」

「はいはいく。」

10分後

「出く来ましたく。」

「そうか、じゃあ……帰れ。」

『そうですね、帰ってください。』

「……予想はしてまうしたけくどね……」

そう呟きながら帰っていった。

「さて・・・もっかい寝るか。」

『そうだな・・・』

オレはベッドに戻り、そのまま眠りについた。

あの駄神のせいで疲れた・・・

能力の実験は明日にしよう・・・

一難去ってまた・・・難か？（後書き）

主人公がどんどんチート化していく・・・

復活初めの投稿がこれで良いのでしょうか・・・？

それでは、また次回。

新しい仲間が増えるのはやっぱり嬉しいもの。(前書き)

本当に！すみませんでしたああ！！

詳しい事情は後書きにて。

新しい仲間が増えるのはやっぱり嬉しいもの。

剣一 side

作戦成功の翌日・・・というか、

途中でアホ神に起こされたからオレ的には今日。

ルナちゃんはメンバーを集めた。

「どうしたのルナちゃん・・・さん。」

危ない危ない。ルナちゃんって呼んじゃダメだって言われてたもんな。

するとそれを見てアスカさんが、

「もう普通の呼び方で良いんじゃないですか？みんな知ってる事ですし。」

と言った。・・・ってえええ！？みんな知ってる！？

オレは他のメンバーを見る。反応は様々。

「……………（サッ）」

気まずくて目をそらす人。

「（――）^{グッ}b」

黙ってサムズアップする人。

「わはははは！」

大笑いする人。

………ものすつごく恥ずかしいわぁあ！！！！

人って……どうやったら記憶を消せるんだろう……？

「つい私ったらお酒が入って喋っちゃったんですよ。」

アスカさん……アンタが元凶かぁ！

「そんな怖い顔しないで下さいよ。」

「したくもなりますよ！見て下さいよ！ルナちゃんなんか、

顔真っ赤で固まってるんですから！」

そう、ルナちゃんはさっきから一言も喋らず、恥ずかしさで固まっている。

まあそりゃあ、今までずっとクールで過ごしてきた

突然ルナちゃんという可愛らしい愛称が付いたら、

恥ずかしくもなるだろう。

「ルナちゃん、呼び方の事だけなんだから・・・そこまで恥ずかしがらなくても。」

「う、うん、そうd「あ、私夜の事全部喋っちゃったみたい。」っ
！！」

な、なにいいいい！？

「ねえ・・・ルナちゃん・・・」

「うん・・・そうだね・・・」

オレとルナちゃんは2人そろってゆっくりと近づく。

アスカさんに向かって。

「咎人よ、滅びの光を」

「え？あれ？ふ、2人ともなんで武器を持って私に近づいてくるんですか！？」

ルナさん？ちょ、え、待って・・・いやあああああ！！！！」

アスカさんへの制裁を終え、メンバーの皆と話し合いをした結果、この集まりを解散し、それぞれまた元の生活が続けようという事になった。

メンバー全員と別れを告げ、オレも旅に戻る事になった。

……のだが、

「なあ、ルナちゃん。」

「なに？ ケンイチ。」

「……解散、したんだよね？」

「うん、そうだね。」

「じゃあ……」

オレはルナちゃんの方を見る。

「どうしてルナちゃんはオレと一緒に来てるのかな？」

そう、ルナちゃんはオレと一緒に歩いている。

最初は行き先が同じなのかな、と思っていたが、明らかに俺に付いてきてる。

「ダメかな・・・？」

涙目＋上目遣いコンボで見てくるルナちゃん。

彼女いない暦がそのまま自分の年齢になるオレにとって、

こういう場合の対応の仕方が分からない・・・

結果、

「・・・じゃあ、一緒に行こうか・・・」

「うん♪」

俺の旅に、新しい仲間が加わった。

剣side out

ルナside

解散が決まった時、私はケンイチに付いていく事に決めた。

最初の頃は、終わったら犯罪者になっている為、旅をしながら追われる人生に

なるのだらうと思っていた。

でも、ケンイチと再会して、ケンイチが、私達の運命を変えてくれた。

・・・正体を隠していたのは少し腹が立ったけど。

とにかく、私はケンイチに救われた。

十年前も、そして今回も。

だから、私がケンイチを助けたい。

そりゃあ、今の私じゃケンイチを助けるどころか、一方的に助けられるだけ。

でも、いつか・・・頼られるような存在になりたい。

そして、支えてあげたい・・・

その為にも、私に出来る事はやらなくちゃ！

ルナside out

剣一 side

「さあ、暗くなってきたし、ここら辺で今日は休もうか。」

「うん、分かった!」

とりあえず、ルナちゃんと一緒に旅に出る事にしたオレ。

でも、いつかは別れなくちゃだな。

いくらなんでも魔王との戦いに巻き込むわけにはいかないし・・・

「食料はバッチリ買い込んできたし、しばらくは何も採らなくても

大丈夫そうだな。」

「私も持ってきたから、少なくとも次の街に行くまでは困らないはずだよ。」

そう言ってバッグから食料を見せてくるルナちゃん。

うん、バッグ一杯だ・・・あれ?

「ルナちゃん? 服は?」

「もちろんあるよ! こっちのバッグに。」

と言って中身を見せようとバッグの中身を開けようとする。

・・・って!

「だ、ダメだ開けたら！」

「え？」

「ほら・・・その・・・下に着るものとか・・・」

「・・・・・・・・あ、そっか・・・・・・・・」

さすがに万が一の事があるからな、止めておかないと。

「じゃあ、少し早いけど夕飯にしようか。」

「そ、そうだね。」

頬を染めているルナちゃん。

恥ずかしがっている所を見ると、可愛いと思ってしまった。

なんか罪悪感が・・・

「ふう・・・ごちそうさま。美味しかったよルナちゃん。」

「ありがとう、ケンイチ。」

今日の夕飯はルナちゃんが作ってくれた。

こっちの世界での料理には、元いた世界に似た料理も多くて、

今日はシチューに似た牛乳ベースの野菜スープだった。

しかもルナちゃんのお手製。

いや、とても美味かった。

「さて、まだ寝るには早いし、どうする？」

「あ、じゃあ私、ケンイチの話が聞きたい。」

「オレの？」

「10年前にブラスタードラゴンと戦った事は聞いたんだけど、

それ以降、行方がしれなかった。だから何をしていたのか知りた
い。」

オレの10年か・・・あれは、思い出すと身震いする・・・！

「も、もちろん言いたくなければ言わなくて良いよ？」

と、そんなオレの姿を見て言うルナちゃん。

「・・・いや、大丈夫。ちょっと修行の時の事を思い出したただけだ
から・・・」

「み、身震いするほどの修行って何・・・」

「そうだな、例えば・・・」

オレは修行の時の話をし始める。

・・・いや、アレは本当にやばかったな・・・」

「・・・それ、人にやって大丈夫な修行なの？」

半ば信じられないような表情で見てくるルナちゃん。

「まあ、オレの師匠が色々と凄い人だから・・・」

「そ、そうなんだ・・・」

「・・・でも、オレは良い師匠に出会えたと思ってる。」

強さと優しさ、そして勇気を持つ最高の師匠だと、オレは思っている。

「そっか、私も会ってみたいな・・・」

「いつか会わせてあげるよ。・・・さて、もう良い具合だし、寝ようか。」

「良いけど、この辺はモンスターが出てくるよ？見張りを交代でした方が・・・」

そういう時はビビに・・・ってそういうええビビは？

『（・・・しくしく）』

「（ビ、ビビ！？どうして泣いてる！？）」

『（・・・良いんだ、俺はどーせ空気さ・・・）』

「（わ、わりい！！もう大丈夫だ、喋って大丈夫だから！）」

『（戦いだけが俺の出番さ〜♪どーせ〜空気を読んで〜出れないのさ〜♪）』

「（本当にごめん！だから戻ってこおおい！！）」

その後、ルナちゃんにビビの事を説明して、ビビを立ち直らせて、ビビの力で周りに軽いバリアを張るから安全だと教えた。

たとえ割れてもすぐに気づくから、と。

「よし、じゃあルナちゃんもテント張ってくれ。」

「・・・あ。」

と素っ頓狂な声を上げるルナちゃん。

「ん？どうしたの？」

「……テント忘れた……」

「ええ！？じゃあ、オレのテントで寝なよ。オレは外で寝るから。」

「でも、悪いよ……」

「気にしないでいいって、なあビビ？」

『そうだ、気にしなくて大丈夫だ。こいつ丈夫だし。』

ビビの言う通り、外で寝るくらい造作もない事だ。

修行の時に比べれば……うう、また身震いが。

「……そ、そうだ！一緒に寝よう？」

「……へ？」

……ルナサン？アナタハナニヲイツテイルノデスカ？

「そうすれば……ね？」

「ええっと……悪いけどごめん！」

オレはその場から猛ダッシュで離れた。

「……行っちゃった。」

『つたく、とことん初心な奴だな。』

「あ、えっと・・・ビビ、さん？」

『ビビでいいし、敬語も使わなくていい。』

「じゃあ、ビビ。ケンイチと一緒になかったの？」

『あいつ、バリアを壊さないようにするために置いていったからな。』

「大丈夫なの？ケンイチは。」

『この辺は弱い奴だらけだからな。あいつなら余裕だ。』

剣一 side out

その後、約一時間後に戻ってきた剣一は外で寝てしまった。

そして、ルナによってテントの中へ入れられ、ルナに寄り添われながら寝た。

翌日の朝、目が覚めたらルナと一緒に寝ていることに気づき、

剣一は自分が寝ぼけて入ったと勘違いし、土下座をしてルナに謝ることになった。

新しい仲間が増えるのはやっぱり嬉しいもの。（後書き）

えー、二ヶ月以上も間が空いてしまつてすみませんでした。

主な理由は二つあります。

一つは、学校の二学期が始まり、忙しくなったこと。

そしてもう一つは、新しい小説を書いていたからです。

まだそんなに話数はありませんが、近いうち投稿しようと思います。

本当にすみませんでした。

この小説も、新しい小説も、読んでいただければ幸いです。

では、また次回。

世間知らずは程々にしましょう（前書き）

また一ヶ月以上空いてしまった・・・

本当に申し訳ないです・・・

今回はエリサとシオンの話です。

剣「おい！久しぶりなのにオレの出番無しかよ！？」

しょうがないだろ、この二人も出てないし。

剣「くっ・・・なら仕方ない・・・」

あ、ちなみに次回も無いから。

剣「おい！」

世間知らずは程々にしましょう

エリサ side

今私は、旅に出て、初めての野宿をしている。

でも、私は色々と知らなかったことが多くて、シオンに怒られた。

たとえば・・・

「では、エリサ様。夕飯の仕度をしましょう。」

「エリサ。」

「え？」

「約束。」

「え、えっと・・・あ！エリ・・・サ。」

「はい、よく出来ました。・・・それで、今日のお夕飯は何かしら？」

「そうだね・・・果物がたくさん採れたから、それと、

持ってきた干し肉とパンと一緒に食べようか。」

「…………え？それだけなの？」

「それだけって…………これでも多い方だよ？」

「もっと…………仔牛のスープとか、鮭のムニエル・ホワイトソースがけとか…………」

「…………旅に出ればそんな物はありません！」

他にも…………

「…………ねえシオン。」

「ん？何だいエリサ？」

「これは何なの？」

「何って…………テントだよ。」

あ、もちろん僕とエリサのは別にするよ？これが終わったら組み

立てるから。」

「いや、そうじゃなくて……これでどうするの？」

「どうするって……この中で寝るんだよ。」

「……この中にベッドは？」

「………無いよ。」

「じゃ、じゃあパジャマある？」

「それも無いし、あっても汚れるだけだよ……」

はあ……私は本当に無知なのね……

ケンイチ君もこれをやっていたのかしら……？

この先の不安に心が苦しくなる。

「……ダメダメ！私は頑張るって決めたんだ！

こんな事で弱音吐く訳にはいかない！」

私はそんな決意を胸に、眠りについた・・・

エリサ side out

シオン side

「はぁ！ たぁ！」

今僕は、夜の鍛錬をしている。いつもの日課だ。

「ふう・・・ん、もう月が頂点に上がったか。」

ふと空を見ると月が空の中央で輝いていた。

その周りを星が彩っている。

「・・・・エリサ、もう寝たのかな。」

一応、国王陛下からの命令であるとはいえ、二人きりのこの旅。

意識せざるを得ない。・・・ましてや、好きな相手であるなら尚更だ。

「・・・・くっ。」

でもエリサは、僕に異性としての興味はない。

ずっと前から・・・なんとかケンイチという男の事ばかりだ。

「どうして・・・そんな10年も前に噂になったような奴なんか・・・」

もし、そいつがエリサを騙していたりするのなら・・・

「絶対に・・・倒してやる・・・」

そう思いながら、テントに戻っていった・・・

シオンside out

剣一side

ブルッ

「!・・・なんだ？」

「どうしたの？ケンイチ。」

「なんか、誰かに狙われたような・・・」

「・・・なにそれ？」

「……気のせいかも。もう寝ようかな。」

「じゃあ一緒に！」

「いや、あの、ってちよ、ああ！」

『(がんばれ)』

「(何その他人事的なセリフウウウ！?)」

剣一 side out

エリサ side

今日は新しい街に来た。

私はアスラローサ国王女としての身分を隠しているため、

他の旅人たちと同じような情報網で探すしかない。

……ということで、様々な人々が行き交うギルドに来た。

「ここがギルド……」

「そうだよ。色々な情報が手に入るから、ここで魔王とかについて聞こう。」

……ついでに、いくつか依頼をこなそう。お金を稼がないと

ね。」

シオンがそう言って、ギルドの受付へと向かう。

私もそれについてゆく。

「いらっしやいませ。ご依頼を希望の方ですか？

それとも、ギルド新規登録かご依頼の受諾でしょうか？」

受付の女性が聞いてくる。

「新規登録をお願いします。」

「では、こちらに必要な事項をご記入ください。

・・・そちらのお連れの女性の方でしょうか？」

「あ、いえ、かのj「はい！私もです！」ってええ！？」

「私だけやらないのは悪いわ。それに良い訓練にもなるし。」

それに、もしかしたらケンイチ君に追いつけるかもしれない・・・

「分かった。という訳で二人でお願いします。」

「承りました。では、こちらに。」

そう言ってもう一枚の書類を出してくる受付の女性。

約1時間後

「・・・大変お待たせしました。こちらがギルド用の証明書、ギルドカードになります。」

ギルドカードと呼ばれる物を受け取る。

「あの、早速ですが、依頼を受ける事は出来るんですか？」

シオンがそう言うと、受付の女性が微笑みながら

「はい、大丈夫です。ですが、登録したばかりですので高難易度の依頼は

受けることはできません。」

「分かりました。何がありますか？」

「そうですね・・・では、こちらなどはいかがでしょうか？」

結果、最初の依頼は猫探しとなった。

世間知らずは程々にしましょう（後書き）

次回はこの続きです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3766s/>

代打～神様に代わりオレ～

2011年12月1日18時50分発行